
お稲荷様日記

桜葉久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お稲荷様日記

【Nコード】

N6381P

【作者名】

桜葉久遠

【あらすじ】

異世界に来てしまったお稲荷様の瑠璃。
そこは腐敗した王朝に支配される国だった！？
過去の経験から救済のために奔走する瑠璃。
波乱万丈な異世界での生活のなかで何を学んでいくのか？

とにかく自分の趣味をつめこんだものです。初心者なので最初の方はかなり拙いと思いますが最新話ではそれなりに読めると思います。

感想、批評、アドバイス等お待ちしております。

ブログ

「天津姫はいらっしゃいますか？」

私は手土産に唐辛子の詰め合わせを持って、ひかりえのあまつひめ光江之天津姫の元を訪れていた。天界に来るのは実に五十年ぶりである。最後に来たのは修行を付けてもらっていた時だ。

「あら、天狐じゃない」

「お久しぶりです。これ、お土産です」

「ん、ありがと。それでどうしたの？」

「先日、大地震があったじゃないですか。それで、私の神社にも被害があつて……」

「ああ。天狐の神社なら建て直しに数年はかかるでしょうね」

私の神社は日本内でもかなり大きい部類に入る。柱から何まで丁寧に細かな細工を施されているため天津姫の言う通り数年は少なくともかかるだろう。……ん？

「何で建て直しになるって知ってるんですか？ 崩落したって言いましたっけ？」

「だって私が天狐の神社に集中的大地震をぶつけたんだもの」

「まさかの暴露ですね！」

相変わらずこの人は気まぐれで物事を決めるな。まったく悪びれた様子がないことに腹が立つ。しかし、恩人に対して手を上げることはできない。

「はいはい、落ち着いて。だって、しょうがないじゃない。土地に溜まった厄は払わないといけないんだから」

地震や火山の噴火は土地に溜まった厄を払うために行わなければならない神事の一つだ。これをしなければ、環境を保ったりすることができない。理由はわかるけど、私の所に集中的にした意味がわからない。せめて大地震じゃなくて、小さな地震で小分けに厄払いして欲しかった。

「それより、神社の建て直しが終わるまでどうしていればいいか知りたいんですよ？ それなら、ここに行けば大丈夫だから」

そう言って天津姫は一枚の地図を渡してきた。どうやら手書きのようだ。

「行けばわかるはずだから不便はないはずよ。設定とかはこの紙にまとめといたから読んで」

「はぁ………とにかくここに行けばいいんですね？」

「そうそう。サクッと行って来なさい」

天津姫が指をパチンと鳴らすと、私の身体は淡い光に包まれた。

プロローグ（後書き）

どうも、初めまして。作者の久遠です

この作品のテーマは『絆』（の予定）です

とにかく自分の好きなものを詰め込んでいきたいです

『巫女さん』とか、まあ、色々ですね

それで楽しんでもらえればなと思ってます

稚拙な文章でわかりにくいところもあるかもしれませんが、精一杯やっています

第一話『仕事さがし』

「・・・・・・・・ここどこだ？」

気がつくと私は荒れ果てた荒野に立っていた。空は曇天で、雷鳴が時折鈍く響いていた。

『天・・・・・・・・・・狐・・・・・・・・・・』

天狐』

どこからか天津姫の声が聞こえてきた。耳に直接届くのではなく、心に届くような感じだ。

「天津姫？ どこにいるのですか？」

『天界よ。それより、送る場所間違えたわ。てへっ』

「てへっ、じゃないですよ！ ここどこですか！？」

『異世界っぱいわね。ロンデステルテン辺りかしら？』

「世界すら違うんですね！ というより、ロンデステルテンってどこですか！？」

『盗賊あり、詐欺あり、殺人あり、リンチあり、戦争あり、文明は四つ五つ前、治安最悪のある意味楽園なところよ』

「悪の巣窟じゃないですか！」

『私がいたころはもつと酷い状況だったわよ。なんせ、子供が小刀を持って金を要求するのが普通だったんだから。まあ、しばき倒したけど』

「あんた何やってんの！？ 昔、何やってたの！？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・何にもやってないわよ？』

「今の間は何！？」

『そんなことはどうでもいいから、天狐はこれからのことを考えなさい。そのロンドステルテンでしばらく生活してもらわなきゃいけないんだから』

「え？」

『世界をそんなに簡単にホイホイ渡れるわけないでしょ？ 天狐をそつちに送るのにも、それなりに回りに影響与えるんだから。それに神気使うのもつたいないし』

「もつたいないって言いましたね！ 本音はそつちですか！」

『それは置いといて。これからどうするつもり？』

置いとかれてしまった。これからどうするか。多分、普通に村に行っただとしても警戒されてしまうだろう。ってことは、自分の力を見せて利害関係を示すのもありかもしれない。とにかく、人がいる場所に行かないと話にならないか・・・・・・・・。

「取りあえず村に行ってみます。そこで、利害関係が一致するよ

うならその村を中心に動いてみようと思います」

『うん、まずまずの答えね。それじゃあ、そろそろお昼を食べた
いから交信は切るわね』

「え？　ちよつ！？」

それから天津姫の声はプツリ途絶えた。せめて、ちよつとした
アドバイスくらいくれたっていいだろうに。というより『私<お昼
ご飯』の構図に軽く泣きそうだ。

「……………村に行くか」

私は人の匂いがする方へ歩きはじめた。

「止まれ！」

村の入口には屈強そうな男が二人立っていた。門番だろう。

「怪しい身なりだな。この村に何の用だ？」

「怪しいとは失礼な。この巫女服はれっきとした正装！」

神様になりたての頃、天津姫が『これが神様の正装だから常に身
につけてなさい。一部の人間も着るから外出の時に着けていても全然
平気よ』と言っていた。それ以来、私は巫女服が普段着だ。

「それなら何の用だ？」

胡散臭いものを見るかのような目で私を見る。確かに服装は周りと少し違うかもしれないし、剣だつて携えてるし……あれ？ 結構怪しいかもしれない。

「えっと」

さすがに住むとこがないから住ませてくれとは言いつらい。行商と言つても商品がないし。なら……。

「傭兵志願だ。この村の警備として雇つてくれ」

剣や槍、弓などの扱いはそこら辺のやつらより遥かに長けている自信がある。何せ、天津姫に教養だと言われ一日に十時間は鍛練していた上、戦国時代にはリアルに合戦に参加していたこともあるからだ。

「お前が？」

「私以外にここにはいないだろ？ それと私の名は瑠璃^{るり}だ。お前とか言うな」

「………ついて来い」

門番は村に入つてすぐそこにあつた小屋へ招き入れた。強めの風が吹いたら簡単に壊れそうな小屋だ。中には一人の男が机に向かつていた。腕や顔には古傷がいくつもある。いかにも『歴戦の強者』のような男だ。

「劉仙^{りゅうせん}さん。この娘が警備兵志願してきたんですけどどうします

か？」

「ん？ ああ、後で試験をやるから宿舎の方に先に案内しておいてくれ。午の刻に迎えに行くから」

「了解しました。宿舎に案内するからついて来い」

何で私にだけ横柄な態度なんだ？ 前を歩く男の頭を噛み付いてやりたい衝動を抑え私は黙って後を追った。

第一話『仕事さがし』（後書き）

読んでくださりありがとうございます

思いつきではじめたこの小説ですが、なるべくいいものが書けるよう推敲しながら書いていきたいなと

ですので、更新は一週間から二週間毎になると思いますがお付き合いいただけたらと思います

感想などもいただけたら参考にしていきたいので、よろしく願います

第二話『出会い』

「ぼろっ！」

案内された宿舎は酷いありさまだった。ツタだらけで穴だらけ。中は穴から吹き込む隙間風で外と大してかわらない。今が夏だからいいものの、冬なら確実に凍死していただろう。

「戦争や盗賊の影響がこんな辺境の村にまで出てんだよ。劉仙りゅうせんさんのお陰で細々とだが食いつないでいけるが、それもいつまで持つのか……」

「そんなに頻繁に戦争が？」

「この村だって先月あったし、ここから三十里ほど行ったところでも村と街が戦ってる。王朝が力をなくしてるからなんだろうな」

基本的にこの世界、ロンデステルテンでは王朝が村史と呼ばれる人と正規軍数名をそれぞれの村に派遣している。村史は派遣された村で兵をまとめ治安活動を行う。税金を徴収するのも村史の仕事だ。

「劉仙は何でこの村に？ 王朝の將軍だったんじゃない……？」

「さあな。何か大きな罪を犯したとだけ言ってたけど。おっと、ここがお前の部屋だ」

一番端の部屋の前で男は止まった。

る。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「あのさ」

私が口を開くと蘭紗が顔をこちらに向けた。瞳からは意図的に視線を避ける。何故かはわからないが、どうも直視することが出来なかった。

「蘭紗ってここに住んでどのくらい？」

「・・・・・・・・四百年」

「そっか四百年か。長いこと住んでるだね・・・・・・・・って四百年！？」

蘭紗は黙って頷いた。そしてまた意味がわからないことを言う。

「・・・・・・・・おおかみ狼」

「何が！？」

「・・・・・・・・」

「そこでの沈黙はやめてくれない!？」

言動が謎すぎる娘だった。蘭紗はもう言うことはないと言わんばかりに、私から視線を外し掛け布団を頭からかぶった。

「……………いずれわかる」

コンコン。

「はい？」

「韓星^{かんせい}というものですが、瑠璃さんはいらっしゃいますか？」

「瑠璃は私ですが？」

扉を開くと、そこにはなかなかの色男が立っていた。青味がかつた鎧をピシッと着こなしている。姿勢や体つきから厳しい鍛練していることがうかがえる。

「劉仙さんが村の南方に現れた盗賊討伐に出してしまったので、代わりに私が試験官代理となりました。早速ですが中庭に来てもらってもいいですか？ 蘭紗さんも一緒でお願いします」

「蘭紗も？」

「はい。半刻後までに準備を整えて来てください」

韓星は一礼をしてから部屋を出た。

「蘭紗、蘭紗。起きてっば」

「う?」

「韓星が一緒に来いって」

「………うん」

蘭紗はゴソゴソと布団から這い出し、寝ぼけ眼をこすった。その姿に思わずクスツと笑ってしまう。

「………何?」

「ううん、何でもない。ほら、髪梳かしてあげるからこっち来て」

蘭紗は素直に私に寄ってきた。座っている私の膝にちょこんと座る。何か、目が怖いとかどうでもよくなってきたかも………。

「これでよしと。それじゃあ行こうか」

髪を梳かし終えた私は蘭紗の手を引いて部屋を出た。

第二話『出会い』（後書き）

読んでくださった皆様、ありがとうございます

そして、あけましておめでとうございます
今年もよろしく願います

さて、今回は蘭紗という新キャラが出てきました
無口キャラが好きな人はどれくらいいるんでしょうか？
個人的には和風な無口っ娘が好きだったりします

さて、この娘がこれからどう瑠璃と関わってくるのかその辺りを注
意しながら書いていきたいと思っています
また、いつも通りに自分の好きなものを詰め込みながら書いていこ
うと思っています

第三話『試験』

蘭紗と宿舎を出ると韓星が出入口のところで待っていた。

「ゴメン、待たせた？」

「いえ大丈夫です。それでは行きましょうか」

「…………逢い引き？」

蘭紗が何かつぶやいたようだが気にしないでおう。それよりも今は試験のことだ。

「ねえ、韓星。試験って何やんの？」

「教養、体力、技術、軍略の試験ですね。教養は筆記で、軍略は実際に兵を率いて模擬戦をやってもらいます。それらを総合的に判断して合否を決めます」

「うっわ……………」

てつきり手合わせだけかと思ってた。これは少なくとも一日はかかるかもしれないなあ。

「ねえ蘭紗」

「…………ん？」

「試験っていつもこんなに面倒なの？」

私は蘭紗に小声で尋ねた。こんなに面倒なら複数の応募がきたら、
相当な手間なはず。

「・・・・・・・・フルフル」

「だよなあ」

「・・・・・・・・瑠璃が強いから」

まだ手合わせしたことないのになんで言い切れるんだろう？

「人が多いのではぐれないくださいね」

先を歩いていた韓星が広場の前で立ち止まっていた。広場には店
が多く建ち並び、多くの人で賑わっている。

「ここは？」

「・・・・・・・・たくさんのお店が集まるところ」

「商店街みたいな？」

「・・・・・・・・ショーテンガイ？」

蘭紗が首を僅かに傾^{かし}げる。どうやら、商店街という概念はこ
ちらにないようだ。

「えっと、じゃあね・・・・・・・・お店の集合地？」

「・・・・・・・・〔コク〕」

「本屋は？」

蘭紗はある店を指す。その先には、昔の書物のように紐で綴じた本が積み重ねられている店があった。

「武具屋は？」

また同じようにある店を指す。剣、槍、弓、鎧と品揃え豊富な店だ。蘭紗に今度、案内してもらおうかな。どこに何があるのか完全に把握してるみたいだし。

広場を抜けると柵で囲われた場所に出た。広場の賑やかさとは一転し、随分と物寂しい雰囲気だ。

「さて、瑠璃さんにはここで試験を受けてもらいます。教養、体力、技術、軍略の順でいきます」

そう言って韓星が渡してきた紙の束は優に百ページはあった。全部で五百問。合格点は八割だそうだ。

「では、始め！」

私は問題用紙を開き目を通そうとした。が、知らない文字の羅列で読めない。何て書いてあるんだろ、これ？

「韓星、韓星」

「どうしました？」

私が手招きすると韓星が近づいてきた。

「字が読めない」

「・・・・・・・・・・」

「蘭紗に手伝ってもらってもいい？」

「・・・・・・・・・・どうぞ」

蘭紗が問題を読み、私が解く。特に難しい問題はなく、一般常識の問題ばかりだった。そしてページをめくり最後の問題に。

『それぞれ甲、乙、丙の全く同じ力の人物がいる。それぞれが勝負をした場合全勝する確率はどのくらいか？』

これも簡単な確率の問題だな。私は解答を書き込み、全てを解き終えた。ずっと下を向いてたから首が怠い。

「終わったぞ、韓星」

「え、もうですか？」

「簡単だったからね」

韓星は私から解答用紙を受け取り採点を始めた。

「蘭紗ありがとね、問題読んでくれて」

「・・・・・・・・「コク」」

私の言葉に蘭紗はただ黙って頷いた。

「九割九分ですね。合格です」

何を間違えたのだろうか？ 満点だと思ったのだが。

「次は体力と技術の試験ですね」

「あれ？ まとめてやるの？」

「蘭紗さんが、瑠璃さんが飛び抜けた体力と技量の持ち主と言っていたので。試験官は蘭紗さんが引き受けてくれました」

やはり蘭紗と手合わせをするようだ。私の胸の辺りまでしか背のない蘭紗を見下ろす。蘭紗は視線に気がついたのか、私を見上げてきた。その目には最初のような無機質さは感じられなかった。・・・私の気のせいだったのだろうか？

「それでは蘭紗さんと瑠璃さんはここで本気の戦いをしてもらいます。制限時間が切れるか、どちらかが負けたら終わりにします」

一定の距離をお互いに取る。私は自前の剣を取り出す。蘭紗は太股に取り付けられた鞘から短刀、ナイフと言った方が正確かもしれない、を取り出した。

「始め！」

韓星の合図で私たちは同時に走り出した。

第三話『試験』（後書き）

読んでくださりありがとうございます

この作品は私、久遠が好きなものとにかく詰め込んだものです

さて、次回では試験の合否がわかります

蘭紗が勝つか、瑠璃が勝つか

戦いの描写は難しいかもしれませんが精一杯書いていきたいと思
います

また、お気に入り登録をしてくださった方、評価をしてくだ
さった方にはここを借りて感謝を述べさせていただきます

第四話『闘争』

「・・・・・・・・ふっ！」

蘭紗は小柄な身体を活かし、素早い動きでナイフを繰り出してきた。私は最低限の動きでそれを避ける。

数度それを繰り返すと、蘭紗は一旦後ろに飛び距離をとった。そしてもう一本太股に取り付けられた鞘からナイフを抜き取った。それを逆手に持ち両手を交差させて構える。

それに対し、私は両刃の剣『龍月』を抜いた。身体を横に向け、剣を握った手を後ろに引く。

この剣は竜の牙を使って作られたものらしく、名前もそこから由来している。私が生まれるよりもはるか昔に鍛えられたものと天津姫は言っていた。

蘭紗は屈んだ足に力を溜め、私の方へ飛んできた。私の顔を目掛けてナイフを突き出す。咄嗟に顔を右にそらさなければ、風穴が空いていたところだ。左頬がわずかに切れ、血が流れる。

「十分早いけど、天津姫の方がまだ早いかな！」

私は蘭紗に息が吹きかかる所まで近づいた。蘭紗のように小回りの効くナイフならまだしも、長い『龍月』のような剣で超接近をするのはセオリー上有り得ない。

「・・・・・・・・!!」

蘭紗にとつても私からの接近は予想外だったようで、驚きに目が見開かれる。

鳩尾に拳を叩き込む。蘭紗は糸が切れたように倒れた。

「っと」

地面にぶつからないようお姫様だっこで抱き上げてやる。

「これでどう?」

韓星に向かって言うと、韓星は感心したように拍手をした。

「お見事です。体力、技術の試験は文句なしの合格です。正直、勝つとまでは思っていませんでした」

「えっと、次は統率力だっけ?」

「この村の警備兵二十人を率いて、南西に三里程行ったところにいる盗賊たちを討伐してきてください。弱小ですけどね。必要な物資などがあれば用意します」

「正直言つてさ、この統率力の試験つて必要? 私は数ヶ月したらこの村を出るかもしれないんだけど?」

もともと警備兵を志願したのも路銀が必要だからだ。路銀さえ貯まればこの村を出て色んな所を回るつもりでいる。

「この試験に合格すれば、警備兵長に就くことになります。給金

も劉仙さんに次いで高くすることが出来るのですか？」

「んゝ・・・・・・・・いや、やっぱりいいよ」

最低限の生活とそれなりの給金があれば欲しいものは他に特にはない。強いて言うならこの世界、ロンデステルテンの詳しい情報くらいだ。だが、それも蘭紗に聞けば事足りるだろう。

「そうですか。それでは、これで試験を終了いたします。階級は蘭紗さんと同じ警備隊副長です。仕事の内容は蘭紗さんに聞いておいてください」

「ん、わかった」

私は蘭紗をお姫様抱っこをしたまま宿舎へ戻った。

「・・・・・・・・ん」

「あ、起きた？」

「・・・・・・・・ここは？」

ぼんやりとした目で辺りをキョロキョロと見回す。意識が軽く朦朧として、頭が回ってないのだろう。

「宿舎だよ。試験中に当て身を受けたの覚えてない？」

「・・・・・・・・思い出した」

「試験は無事に合格出来たよ。これからは蘭紗と同じ副長として働くことになったから」

「・・・・・・・・〔コク〕」

「というわけで仕事の内容を教えてくれるかな？」

蘭紗の話をまとめるところだ。朝は日の出とともに始まる。副長数名で組になって訓練の指導をする。それが昼まで続き、そのあとは王朝から送られてくる書類整理。次に、警備兵を数名引き連れて村の巡回。その途中で矢倉の見張りの仕事をチェック。そして夕餉^{ゆうけ}のあとに自己鍛練。

とまあ、こんな感じで割りと忙しかったりする。

「ずいぶんとやることがあるね」

「・・・・・・・・それが長の名前が付く者の役目」

「う、確かに」

蘭紗の言うことは至極まっとうだ。社長、会長、隊長と長が付く役職で楽なものはどこにもない。

「・・・・・・・・仕事は明日から。今日は村を案内する」

そう言つや否や蘭紗は私の手を取って歩きだした。

「え！　ちよっ!？」

慌てて『龍月』をつかんだ私は蘭紗に引きずられる形で宿舎をあとにした。

第四話『闘争』（後書き）

読んでくださりありがとうございます

今回は蘭紗と瑠璃の戦闘シーンを入れてみました

正直、描写がとても難しかったですね

普段何気なく読んでる描写がいかに難しいか、他の作家さんがどれだけ上手く描写しているかがよくわかりました

もし、アドバイス等があれば感想のほうでよろしくお願いします

第五話『実は大食らい』

「・・・・・・・・このご飯美味しい」

蘭紗が最初に連れてきたのは一軒の中華っぽい店だった。中からは食欲をそそるスパイスの香りが漂ってくる。

「ここでお昼を良く取るとか？」

「・・・・・・・・「コク」」

「ふん」

そういえばお昼食べてなかったな・・・・・・・・。美味しそうな匂いで私は自分の空腹に気がついた。

「ここで食べていけない？」

「「コク」」

いつものようなちよつとした間がなかった。食べることにたいして執着が強いのか、私みたいにお昼を食べてなくて空腹なのか。それはわからなかったが、取り合えず二人で店の扉をくぐった。

「いらつしやいませ！ お好きな席にどうぞ」

元気良い声で女性店員が迎えた。蘭紗は迷わず店の端で入口が良く見える椅子に座った。指定席なのだろうか。

「窓際の景色じゃなくていいの？」

「……………襲撃を受けたとき対応しづらい」

なるほど、端なら警戒する方向は二つに絞られるというわけだ。でも、わざわざそんなことを気にしながらいつも食事をしているのだろうか？ 私ならゴメンだけど。

「……………私の故郷はとても治安が悪かった。これが普通だから気にしなくていい」

蘭紗は私が思ったことを感じとったのだろう。そう言った。

「ご注文は何にいたしましたでしょうか？」

「お勧めは？」

メニューのような紙が張られてはいたが、私は文字が読めない。仕方なく店員に聞くことにした。

「『辛豆腐』ですね。とろみのついた辛いタレを一口大に切った豆腐にかけたものです。当店一のお勧めですよ」

麻婆豆腐みたいなものだろうか？

「じゃあ、それで。蘭紗は？」

蘭紗は無言で指をさした。それは。

「はい、『包蒸肉』ですね。いくつになさいますか？」

「……………あるだけ全部」

「ぜ、全部ですか？ 百個はありますが、大丈夫ですか？」

「……………問題ない」

心なしか蘭紗がキリツとした表情になった気がする。

「かしこまりました」

店員は一礼してから慌てて厨房に向かって行った。今頃、調理師は過去最多の注文にてんやわんやに違いない。

「お待たせいたしました」

「多っ！」

二人がかりで持って来た皿は、そう山だった。うずたかく積み上げられた『包蒸肉』。しかもそれが二皿だ。

「蘭紗食べ切れるの？」

「……………〔コク〕」

「そ、そう」

蘭紗はおしぼりで手をふくと、片っ端からモグモグと食べはじめ

た。『包蒸肉』を頬張って、頬を膨らましてるその姿はまるでリスやハムスターのようだった。何か癒されるなあ。

「あと、こちらが『辛豆腐』です」

私の前に置かれた料理は、元の世界の麻婆豆腐のようなものだった。ただ、色が赤を越えた赤だった。むしろ赤過ぎ。これ、何が入ってるんだろ？

一口『辛豆腐』を食べる。豆腐のまったりとした感じがこの辛いタレと合わさって何ともいえない……………。

「辛っ！？ 痛いっ痛いっ！！！」

慌てて水を飲む。おかわりを何杯かもらってやっと落ち着いた。口の中がヒリヒリする。辛さも度が過ぎると痛いだけになるらしいが、それを身を持って実感した。

「何これ！？ めっちゃめっちゃ辛いんだけど！？」

某カレー屋の辛さ百倍なんて目ではない。生ハバネロより辛いものなんて初めてだ。思わず涙をこぼす。蘭紗の差し出す手ぬぐいで涙を拭う。さすがにもう一口食べる気にはなれなかった。

「……………これ普通」

私がもう食べないのを見て蘭紗は『辛豆腐』の皿を自分のほうへ引き寄せた。そして一口食べてからそう言った。

うずたかく積み上げられた『包蒸肉』と『辛豆腐』は瞬く間に蘭

紗のお腹のなかにおさめられていく。早送りでも見ている気分だった。

「・・・・・・・・ご馳走様でした」

数分で大皿の中は空になった。あれだけの量を食べたにも関わらず、蘭紗の表情に苦しそうなところはなさそうだ。会計を済ませ店の外に出る。

「次はどこに連れていってくれる？」

「・・・・・・・・後は知らない」

「え？」

「・・・・・・・・ここしかお店知らない」

衝撃のカミングアウト。一軒しか知らないのに案内すると言ったらしい。・・・・・・・・まあいいか。後は自分で見て回るとしよう。前に聞いたときに答えられたのは偶然その店が目に入ったから答えられたただだったようだ。

「・・・・・・・・「クイクイ」」

「ん、何？」

蘭紗が私の巫女服の袖を引っ張る。しゃがんで蘭紗の視線に合わせる。

「・・・・・・・・眠い」

私はその言葉に苦笑すると、蘭紗に背中を向ける。蘭紗が背中に乗ったのを確認して、立ち上がったときには軽い寝息が聞こえてきた。私は起こさないように気をつけながら、店先をのぞきつつ宿舎への帰途についた。

第五話『実は大食らい』（後書き）

読んでくださりありがとうございます

さて、作中に出てきた『辛豆腐』と『包蒸肉』ですが、それぞれ『シントウフォー』と『ホウチュウニー』という読み方をします
適当な読み方で正式な読み方ではありません。また、オリジナルに考えたものなので、実際には存在しませんのでご注意ください

今回は食事シーンがメインとなりましたがいかがでしたでしょうか？
『どこそこをこうするといいよ！』と言ったアドバイスがもしありましたら感想のほうによろしくおねがいします

第六話『初日から』

宿舎に帰り蘭紗を寝台に寝かせる。警戒心のかけらもないその顔は外見相応のあどけないものだった。

「こうしていれば可愛い子供なだけどなあ……」

蘭紗の栗色の髪を撫でながらつぶやく。しばらくそうしていると部屋の戸を遠慮勝ちに叩く音が聞こえた。

「開いてますよ」

「し、失礼します」

部屋に入ってきたのは一人の女性だった。艶やかな長い黒髪。モデルのようにバランスの取れた肢体。抜けるような白い肌。淡い桜色の唇。すっきりと整った顔立ち。どこかの令嬢といってもおかしくない。

「あなたは？」

「隣の部屋に住んでる美羽と申します。えっと、あなたが瑠璃さんでよろしいのでしょうか？」

「ええ、そうですよ。短い期間ですがよろしくおねがいしますね」

そう言ってから手を差し出した。美羽は怖ず怖ずといった感じで私の手を握る。

「お、おにえがします」

緊張のあまりかカミカミだった。顔も熟れたトマトのように赤い。

「美羽さんはここでの役割、といいますか役職は何ですか？」

「私は軍司をしています。古今東西の兵法や農業、政治、経済に
関して一通り学んできました。その知識を活かして今は劉仙さんの
補佐もしてます」

まあ、美羽を見てから鬼神のように剣を振るってるとこなんか想
像はできないわな。剣を持たせたら手とか痛めそうだ。

「あ、それですね。もうひとつ大切な用件がありまして……

……

「ん？」

「かつてないほどの大規模の盗賊団がこの村に向かってきてるん
ですがどうしましょう？ 劉仙さんたちは朝廷に呼ばれて巳の刻に
出発してしまっただ、私たちしか残ってないんですが……」

「

劉仙は私と会ったあとすぐ、朝廷からの使いに呼び出されたそう
だ。この村の警備兵の八割方を引き連れて。

「なんつー状況になってんだか。えっと、それで迎撃する際の割
り振りとかはどうなってます？」

「韓星さんからの指示で軍司に私、大将として韓星さん、將軍として瑠璃さんと蘭紗さんとなっております。それと残った警備兵の数は全部で五十人でいどです」

「盗賊団の規模は？」

「規模は推定五百人ほど。練度は低いでしょうが、数が多すぎるのが難点ですね」

「よし、逃げよう」

「待つてください！」

荷物、といつても『龍月』だけだが、を持って部屋を出ようとすると美羽が巫女服の裾にしがみついていた。

「村の皆を守るために警備兵になったんじゃないんですか？」

「勝てない勝負はしない主義なんで」

「そんなことはありません！ 瑠璃さんが半分、蘭紗さんが半分倒したら勝てます！」

「軍司がそんな頭の悪そうな発言すんな！ 一人で半分とか常識で考えて無理だから！」

「……本当に無理ですか？」

突然、美羽にスッと冷静に返され私は言葉につまる。正直言つて

しまえば出来なくはない。蘭紗がいればさらに楽に出来る。

「私知ってるんですよ、瑠璃さん。蘭紗さんと模擬戦したときも全力は出してませんでしたよね？」

「見てたのか？」

「本気で瑠璃さんが戦えばそうですね……最低千人は相手出来るんじゃないですか？ 蘭紗さんが本気をだしても五百人くらいならなんとか出来そうですが、まあ確実に死ぬでしょうが」

美羽は形の良い唇に手をあて、クスクス笑った。

「お前……そっちが本性か」

先程までのポヤポヤした温かい感じはなく、目の前にいるのはただ冷たい笑みを浮かべるだけの女だった。

「さて、何のことでしょう？ 私は事実を鳥瞰した上で思ったことを言ってるだけです。やるのであれば、村民は助かりますし、やらなければ村が潰滅するだけですからどちらでもいいですけど」

別に戦い自体にすることは構わない。天津姫に散々鍛えられたから。だが、ここまでの戦力差があるならば神としての力を使わざるをえなくなる。それが唯一の気掛かりだが………ったく。

「わかった、やるよ。ただし、私の指揮には必ず従うこと。じゃないと、本気で全滅するぞ」

「わかりました」

美羽はまたクスリと笑って部屋を出た。

「蘭紗。蘭紗。わるいけど起きて」

ユサユサと蘭紗の身体を揺する。最初は全く起きる様子はないが、揺すり続けるとうつすらと目を開けた。

「盗賊がこの村に向かって来てるみたいなんだ。力をかしてくれないかな？」

「・・・・・・・・「コク」」

蘭紗は目を擦り擦り頷いてくれた。

「ありがとう。終わったら何か美味しいもの奢ってあげるから」

蘭紗は目を輝かせコクコクと頷いた。

さて、久々に本気を出すか。私は『龍月』を握りしめ、蘭紗の手を引いて部屋を後にした。

第六話『初日から』（後書き）

読んでくださりありがとうございます

珍しく、早めに書き上げることができました

さて、瑠璃は異世界に来て初日から盗賊の群れと戦うことになりました

瑠璃の本気とは？

そして神としての力を使うことに何故ためらいが？

次回それが明らかになる予定です

第七話『本性の片鱗』

「韓星。状況は？」

私は村の入口付近に張られた陣に向かった。その中央には天幕が張られ、中では韓星と美羽が頭をつきあわせながら話し合っていた。

「あまり芳しくはありません。あまりの人数差に警備兵の間にも不安がはしっています」

「そう………。美羽」

私が美羽の方を向くと、彼女は静かに微笑みを浮かべながら言う。

「きちんと話してありますよ」

「全ての指揮権を瑠璃さんに託すことですね。この村を守れるのであれば、そのくらいお安いご用です。瑠璃さんに全権を委ねます」

「ありがとう」

村に来て初日の私に全権を委ねるのは普通なら絶対にありえないことだ。しかし、今は緊急事態。韓星としても劉仙のいない今、藁にもすがる思いなのだろう。

「あと、もう一つ聞きたいことが」

「何でしょう?」

「今、村に向かってきてる盗賊団っていうのは試験のときに言っ
てたやつ?」

「ええ。弱小だったんで放っておいてもよかったです、間の
悪いことに他の盗賊団と併合し大きな集団になってしまいました」

韓星は後悔するかのように、苦虫をかみつぶしたように顔を歪め
た。

「わかった。それじゃあ、まず警備兵は全員村の中に残して籠城
の準備をしておくいて。あと、この陣も盗賊たちが来る前に撤収し
ておくこと」

「わかりました」

「後は私と蘭紗が何とかするから。いい? 私が良いというまで
絶対に出て来ないで」

経験上、門さえ閉じておけば村は大丈夫だ。盗賊たちは基本面倒
臭が多い。しっかりと守っていれば、じきに諦めるはずだ。万
が一私たちが駄目だったときの保険だ。

私は今まで籠城していれば助かったにも関わらず、義憤に駆られ
迎撃した結果返り討ちに遭い、全滅する村を幾度も見ている。その
逆もそうだ。しっかりと籠城して助かった村も幾度となく見ている
のだ。

「さて、いっちょやりますか」

村を出ると目の前にはむさ苦しい男たちの群れ。それぞれが斧や槍、剣などの思い思いの武器を携えている。何人かの頭領格である男が馬に乗っているのも見えた。

「蘭紗も本気出していいからね。あと、危なくなったら必ず呼ぶこと。いいね？」

多分、大丈夫だろうけど。

「・・・・・・・・〔コク〕」

蘭紗は一度うなずくとナイフを引き抜き逆手に構えた。私もそれに倣い『龍月』を鞘から引き抜く。

銅鑼^{ひし}の鳴り響く音が聞こえてきた。それと同時に土埃を舞い上げながら盗賊たちが走り出す。

「行くよ蘭紗！」

「・・・・・・・・〔コク〕」

最初にたどり着いた男を縦に真つ二つにする。血飛沫が顔にかかるが気にしている暇はない。そのまま右から剣を振りかぶるやつに返す剣で手元を切り付ける。手を押さえ、よろめいたところを容赦

なく蹴りつける。

「ぐあっ！」

呆気なく倒れる。それを一瞥してから、より人数の多いところに走り一閃。まとめて五人の首を落とす。槍を奪い、直線に並んでいた男たちの心臓を一気に貫き通す。

後ろから振り下ろされた斧を避け、足首を踏み砕きながら前から襲ってきたやつを逆袈裟切りに切り捨てた。重い音を立てて落ちた斧を拾い上げ、思い切り放り投げる。数人が成す術もなく屍となり崩れ落ちた。

蘭紗のほうを見ると、淡々と切り捨ては次、切り捨ては次とテンポ良く人数を減らしていた。蘭紗が通った後らしき道は死々累々となっていた。

「あれなら大丈夫かな」

そう呟きながらも前のやつの顔面を蹴り飛ばし、左からきたやつ
の肩を下から切り上げる。孤を描きながら飛んでいく腕。

「うつ！？」

切って、蹴って、殴って、突いてとやっている我突然目の前から馬が突っ込んできた。敵味方おかまいなしの暴走だ。慌てて避ける

が、わずかにかすめバランスを崩す。その隙に周りを囲まれた。その層は厚く、抜けるのにかなりの労力が必要そうだった。

「……………力を使うか。神氣しんきをのせ剣を振るう。」

「はあっ！」

触れた奴はもちろん、触れてもない奴らまで見えない刃物に切られたかのように血飛沫をあげていく。一瞬にして血の海が出来上がる。

「無駄に命を落としたくなければ退け！」

私はその声を張り上げた。

「無益な殺生はしたくない。お前たちが今退くというのであれば追撃はしない。だが、あくまでも戦うというのであればお前たち一人たりとも生かしては帰さないつもりだ！」

高らかにそう言うと、

「お、女にビビって盗賊なんかできるかあ！」

最後の頭領格の男が馬を走らせ猛然と斧で襲い掛かってきた。私の『龍月』と盗賊の斧が交差する。ガキンと鈍い音が響く。見た目以上に重い一撃だった。武術の心得があるのかもしれない。だが……………

「ぬる
温い！」

『龍月』を振るい、胴を横に薙ぎ払い上半身と下半身を両断する。切断面から噴水のように血が吹き出し、血霧となる。頭領格がやられるのを見た盗賊の残党は蟻の子を散らすように、我先にと逃げ出した。

「・・・・・・・・ふっ」

盗賊が逃げ出すのを見届け、『龍月』の血糊を払い鞘に戻す。返り血で巫女服が生臭い。洗濯しないと。

「そういえば蘭紗は・・・・・・・・っと、いたいた。蘭紗！」

蘭紗はちょうど草むらの影辺りにしゃがんでいた。私の声に気がつかなかったのか、じっとしゃがんだままだ。私は蘭紗のもとへ駆け寄った。

「蘭紗。何やって・・・・・・・・」

蘭紗をのぞきこんだ私の言葉が尻すぼみになり、風の音に消される。足音に気がついたのか、蘭紗が振り返った。その顔、特に口元は血で真っ赤だった。その口端からは肉片がはみ出している。

蘭紗の前には腹をこじ開けられた人だった何かが転がっていた。首はなく、所々噛みちぎられたような傷もある。

「一体何を・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・」

蘭紗は私の言葉には答えず、ただ、じっと私の瞳を見つめ返すだ

け
だ
っ
た。

第七話『本性の片鱗』（後書き）

読んで下さりありがとうございます

いきなり血生臭い話になってしまいました

苦手な人にとっては気分を害す話でした

この場を借りてお詫び申し上げます

さて、瑠璃の實力は折り紙付きということがわかりました

この中では描ききれませんでしたので、次回以降に力を使いたがらない理由を書いていこうと思っています

また、いつも通りに何かしらのアドバイスなどがありましたら感想の方へよろしくお願いします

第八話『疑い』

「蘭紗？」

振り向いた蘭紗は私を見ているようで見ていないそんな虚ろな目をしていた。しかし、それはほんの僅かな間だった。

「大丈夫？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・〔コク〕」

やや間が空けてから蘭紗はうなずいた。

立ち上がって服の裾に着いた土埃をパツパと払う。懷から手ぬぐいを出して口元を、血が乾き引き攣った感じが気になったのだろう、拭った。

「何やってたの？」

「・・・・・・・・〔フルフル〕」

「覚えてないの？」

「・・・・・・・・〔コク〕」

「そっか」

経験上、こういう症状を出す子は何かに憑かれていることが多い。昔、神様がまだ信じられていた頃に似た症状の子のお祓いを良くや

っていた。どうしても無理なときには一日預かって天津姫にお扱いをしてもらっていたが。

「まあいいか。村に帰って何か食べよう。奢ってあげるから」

蘭紗は私の言葉に目を輝かせると、私の腕を引っ張りながら村へと駆け出した。

「それでは、盗賊はしばらくは来ないということぞ?」

私は韓星と美羽のいる部屋を訪れていた。今後どうすれば良いかの指針を決める話し合いだ。蘭紗もいるにはいるが大袋八個分、およそ二百個くらい、の胡麻団子を黙々と食べることに必死になっている。

「うん。ただ、また来る可能性があるのは否定しきれないから堀を作ったり、櫓^{うぐい}を建てたりしたほうが無難だけどね」

「わかりました、それはこちらで手配しておきます。それと蘭紗さんの胡麻団子代はあとで払いに行っておきますので、もう休んで結構ですよ」

「そう、後よろしく」

そう言い部屋を出る。蘭紗も私に付いて出る。

「あれ? 胡麻団子は?」

「・・・・・・・・食べた」

早い。買ってから十分くらいしか経ってないのに。どっかの早食い選手権にでも参加すれば優勝するんじゃない？

「・・・・・・・・ちょっと足りない」

「まだ食べるの!？」

早食いなだけでなく大食いでもあった。このちっさい身体のどこに入るのだろう？ 見た目だけなら小学校高学年くらいだというのに。

「瑠璃さん」

後ろから声をかけられ振り向く。そこには美羽がいた。

「なんだ美羽か・・・・・・・・何？」

「ちよつと話が。蘭紗さん、これで好きなもの食べてきていいですよ」

美羽が幾枚かの金貨を蘭紗に渡す。

「・・・・・・・・〔コク〕」

蘭紗はそれを握って駆け出した。それを見送ってから美羽は私に向き直る。

「さて、話に入りましょうか」

「手短にな」

「それはどうでしょうね」

美羽はそう言いクスクスと小馬鹿にするように口元に手を当て笑った。一つ一つの動作が気に食わない。

「まずはお疲れ様。やはり私の見込んだ通り、軍神のように強いのですね」

「・・・・・・・・」

「それですね、私の忠臣に死体処理をもらったのですが、いくつか奇妙な死体があったんです」

「奇妙？」

「四肢がまるで食いちぎられたようになっていたり、鋭い爪で首を貫かれたようなものがあつたんです」

恐らくは蘭紗の前に転がっていた骸のことだろう。今、美羽が言った特徴と合致する。

「何か知っていることはありませんか？ 心当たりでもいいですけど」

「・・・・・・・・いや、知らないな」

私は首を横に振った。何故かはわからないが、蘭紗のことは話し

てはいけない気がしたのだ。私のこういう直感は良くあたる。

「そうですか。何か思い出したり、気がついたりしたことがあれば教えてくださいな」

「確証はできないけどな」

私はそう言って踵を返した。

そこは闇の黒よりもさらに黒い闇だった。すべてが飲み込まれるような闇だった。そこにそいつはいた。

「あれが厄神、天津姫が育てあげた天狐か……………」

耳には聞こえず心に直接響く声が辺りに響いた。聞いているだけで絶望に飲み込まれそうになる声が辺りに響いた。

「この世界で終わらせてやる。天津姫共々にな」

そしてそいつは笑う。発狂しているような声を上げて笑う。

第八話『疑い』（後書き）

読んで下さりありがとうございます

さて、大して時間的には進んではいませんが物語の中では多少の變化が始めました

何本か伏線（回収しきれるか不明）も張らせてもらいました
おいおいそれを取っ掛かりに話を展開していく予定です

また、何かアドバイスや感想等がありましたら感想のほうへよろしくお願いします

第九話『別れと出会い』

「お世話になりました」

私は二人に頭を下げる。

盗賊の騒ぎから三ヶ月。契約期限がついにおとずれた。

「いつでも戻ってこい」

「妖あやかには気をつけてくださいね」

見送りに来てくれた二人、劉仙と韓星が口々に言った。辺りはまだ薄暗く私たちの三人以外に誰もいない。

「機会があればね。それと気をつけるよ。それじゃあまた」

別れはあっさりとさせる。名残惜しさにグズグズしたくはない。私は傍らに置いてある荷物を肩にかけ、『龍月』を腰にさし歩きだした。

「さてと……………」

昼下がり。鬱蒼うつそうとした密林の奥。休憩がてらに私は劉仙からもらった地図を広げ、次の目的地を確認した。

「結構あるな。馬でも買っとけばよかったかなあ」

言っても仕方がないのはわかっているがそう言わずにはいわれなかった。見る限りでは一週間くらいはかかりそうだ。だが、この密林を抜けなければ大回りになりさらに一週間はかかってしまう。

「文句言つても仕方ないか」

私は地図を荷物にしまい立ち上がった。お尻に着いた枯れ草を払う。

「この密林の真ん中辺りで次の休憩を取るかな」

私は傍らに置いた『龍月』を手に取り奥に向かって進んだ。

「・・・・・・・・何これ？」

しばらく進み少し開けた場所に出ると異様な光景が広がっていた。

横転した馬車。散らばった積み荷。至る所に倒れている武装した男たち。

慌てて駆け寄ったがほとんどは息絶えていた。腕がない者、首がない者、上半身がない者、外傷らしい外傷はないが死んでいる者。

「うう・・・・・・・・」

後ろからつめき声が聞こえた。馬車の方だ。振り返ると頭を押さ

えながら這い出てくる少女がいた。

「大丈夫か!？」

出血が酷いせいで意識が朦朧としているようだ。浅く呼吸を繰り返すばかりで何も言おうとはしない。

私は手ぬぐいを取りだし剣で切れ込みをいれた。それを引き裂き包帯がわりにし、傷口に丁寧に巻き付ける。

「これで良しと」

少女を安全そうな場所に寝かせてから探索を始めた。積み荷に役立ちそうなものはないか。他に生存者はいないか。

数分して探索を終える。生存者は残念なことに他にはいなかった。積み荷にも役立ちそうなものはなさそうだ。

遺体は穴を掘って供養する。こういうときは神様っていうのも便利だ。正しい形式で弔える。

「……………それにしても本当に何があったのだろうか? 盗賊にしては遺体の損壊がおかしすぎる。身体の一部を切る理由がない。………妖かな? とにかく、あの人が目を覚ますまでここに留まろう。」

「ううん……………」

「目覚めた？」

夜半が過ぎ月が西に差し掛かった頃、少女が目を覚ました。

「……………ここは？　それに貴女は誰？」

「ここは密林の真ん中。私の名前は瑠璃。あなたは？」

「蓮^{れん}よ」

少女はそう答え、身体を起こした。少しふらつくのか頭を軽く押さえている。

「まだ寝てた方がいい」

「大丈夫、血も止まったみたいだし。手当してくれたのは貴女ね？　ありがとう」

「気にしないで。ところで何でこんな所に？　護衛もいたみたいだけど何があつたの？」

私が尋ねると蓮は少し躊躇うかのようなそぶりを見せた。しばらくの沈黙の後、口を開く。

「今から話すことは他言しないでもらえるかしら？」

「別にいいけど……………」

蓮は一つ頷いて話し始めた。

「改めて自己紹介ね。私の名前は華蓮^{かれん}。現王朝に滅ぼされた、華王朝の一人娘よ」

「……………は？」

驚きのあまり私は間抜けな声をあげてしまった。

普通なら誰でも同じような反応をするだろう。たしかに、着ているものや、容姿からはどこことなく気品を感じる。しかし、こんな密林の奥地でお姫様ですと言われるにも到底信じることができない。

「『は？』じゃなくてそうなの！ 現王朝から身を隠さないといけないから今はこんな所にいるけど、昔は偉いお姫様だったのよ！」

「今は浮浪者でしょ？」

「くっ！ う、うるさいわね！ それに私に向かって無礼だわ！ 何様のつもりよ！」

『神様のつもりだ！』とは口が裂けても言えない。無難に武芸人とだけ答えておく。まあ、あながち嘘というわけでもないし。

「なら、私に仕えなさい」

「それじゃ、私はここで」

「待ちなさい」

立ち上がってその場を去ろうとしたが、肩をガツとつかまれた。

この娘、映画かなんかで最後まで主人公の足を引っ張って、それでいて生き残るタイプだな。

「話は支離滅裂。信じるに足る証拠もない。正直関わりたくない」

「ずいぶんとハッキリ言うわね。なら、これを見てもそんなことを言えるかしら？」

華蓮は懷に手を入れ、手の平に収まる小箱をだした。

「何それ？」

「重要なのは中身よ」

フンと華蓮は鼻で笑い、小箱を開けた。中には見事な細工が施された玉璽が収まっていた。

「私のお父様が使っていた玉璽よ。どう？　これで信じられるでしょ？」

『信じられるでしょ？』と言われても私はこの世界の玉璽がどういうものかなんて知らないし、そもそも前王朝が本当に華王朝なのかさえ知らない！

しかし、そろそろこの娘の相手も疲れてきた。なら………。

「わかったよ、仕えてあげる」

「本当！？　今さらやっぱり無しつてのは駄目よ？」

「でも条件がある。私の任意にやめることが出来ること。私が拒否した場合はどんな命令も無効にすること。この二つを受け入れるなら仕えてもいい」

私がそう言うと、華蓮は腕を組み唸りはじめた。

しばらくそうして、華蓮は「それでいいわ」と言った。

「それじゃ、よろしく」

第九話『別れと出会い』（後書き）

読了ありがとうございます

前回から二週間も間が空いてしまいました
物事を続けるのはとても難しいことですね
他の作家さんたちが定期的に更新しているのをみると感心しています

さて、今回は旧王朝のお姫様との出会いでした
もちろん、いったんは別れた蘭紗や美羽も後々に再会する予定です

第十話『密林にて』

「そういえばさ、私に来る前に何があったの？ 馬車とか倒れてたし」

次の日。お互いに一通りの自己紹介を済ませた後、密林を抜けるために西北の方向へ進みながら私は聞いた。

「妖に襲われたのよ」

「妖？」

「巨大な狼と蛇の姿をしてたわ」

「よく無事だったね」

護衛があんな無残に殺されてたのだ。華蓮みたいな娘なんて真っ先にやられてもおかしくはない。……。いや、やっぱり主人公の足を最後まで引く張るアホの子だから生き延びたのか？

「妖も私の威厳に恐れをなしたにちがいないわ」

「それはないって」

どんなひいき目だとしても威厳のかけらも見当たらない。

「旅をするに当たってなんだけど、何か得意なことってある？ 料理が得意とか、地理が詳しいとか」

ちなみに私はサバイバルなら得意だが、料理となれば門外漢だ。元の世界ではスチール製の鍋を爆破させ天津姫に驚かれたものだ。

「歌と踊りが得意よ」

「役立たず！」

歌と踊りが旅に役立つわけがない。精々が見世物小屋で路銀稼ぎに役立つくらいだ。次の村ではそうしてもらうことにしよう。

「な、何よ！ 得意なことをって言うから言ったのに」

「このくらいの乾いた小枝を拾いながら歩いというて」

頬を膨らませ抗議する華蓮の言葉を軽くスルーして、私は傍らに落ちていた枝を拾い上げた。拾いながら歩いておけば、夜中に休息を取るとき薪を集める必要がなくなる。

「何で姫である私がそんなことしなくちゃいけないのよ！ そんなの下々の者がする仕事だわ！」

「華蓮はもう一般人でしょ。華王朝はもうないんだから。それに言うことを聞かないならここで置いていくよ」

「ひ、卑怯よ！ わかったわよ！ 拾えばいいんですよ、拾えば！」

華蓮はぶつくさと言いながらも指示通りに枝を拾いながら歩いた。私も拾いながら歩く。

そして約二時間後。

「疲れた！ もう歩けない！」

華蓮が駄々をこね始めた。頭が弱いお姫様は身体と体力まで脆弱になっっているようだ。今まで楽しく生きてきたんだろうなあ。

「あとちょっと歩いたら川があるみたいだから、もう少し頑張ろう？　ね？」

私のなだめに華蓮は渋々といったように頷いた。

「あ、華蓮。それまだ焼けてない」

「こっちのは？」

「そっちは平気」

休憩がてらに私たちは川で魚を取り、それをお昼にしていた。てつきり華蓮が『魚なんて下々の者が食べるものだわ！』とでも言うかと思っていたが、文句も言わずに食べている。

「華蓮って偏食はしないんだ」

「じゃないと密林での生活を三年も続けられないでしょ？　好き嫌いは無いわよ」

お姫様としては珍しいな。私の知るお姫様はひどい偏食だった。

野菜は食べない。甘いもの超好き。肉は霜降り部分しか食べない。
治すのには相当苦労した。

「偉いね、鳥からすくらいには」

「ふふん。もつと褒めなさい」

AAAカップ程度の胸を張りながら華蓮は形の良い鼻を鳴らした。

鳥と同レベルに評したが何故か喜ばれた。もつと直接的に言っても賛辞と受け取るかもしれない。

取り合えずは褒めろと言われたので、頭を撫でておく。華蓮は気持ち良さそうに目を細めた。

「食べ終わったら出発するから。水を竹筒に入れるの忘れないようにね。華蓮、良く飲むでしょ？」

「大丈夫よ。私を誰だと思ってるの？」

世間知らずで体力のない苦労知らずの元お姫様と思ってます。

華蓮は傍らに置いてある竹筒を手に取り、水を汲みに川へと歩いていった。

私は残った魚を葉で包み、荷物に入れた。たき火にも砂をかけて消しておく。自然鎮火するだろうが、万が一ということもある。出発の準備をしていると華蓮の悲鳴が響き渡った。

「華蓮!？」

私は川の方へ振り返った。華蓮が巨大な翼竜の脚につかまれ連れ去られるところだった。

私は慌てて荷物をつかみ、翼竜の後を追った。

翼竜の後を追い続けて三時間。いい加減、足にガタがきていた。肺も痛いし、汗が滴って気持ち悪い。

「ハアハアハア。いい加減止まれえ!」

すると私の叫びに呼応するかのように翼竜が一本の巨木に止まった。かと思うと再び飛んで行ってしまふ。しかし、その脚には華蓮はつかまれていなかった。

「華蓮! 大丈夫!？」

巨木のとっぺんに向かって声を投げ掛ける。

「大丈夫なわけないでしょ! 高過ぎて下りれないわよ!」

怒ったような声が返ってきた。それだけ大きな声をだせるなら平気でしょ。

私はわずかに飛び出た部分に足をかけて慎重に上っていった。

「ふう。迎えに来たよ」

「遅いわよ！」

華蓮はギャーギャーと何か文句を言っていたが、私はその華蓮の隣にチヨコンと鎮座しているものが気になった。さっきの翼竜の二十分の一サイズの翼竜がいたのだ。

「翼竜の子供みたい。何故か私について来るのよね」

私の視線に気がついたのか、華蓮はそう言った。

「すりこみ？」

「さあ………。そんなことはどうでもいいから早く下ろしてくれない？」

命令する華蓮をおんぶして、私は巨木から飛び下りた。この方が手っ取り早いし私にとっても楽だ。

「いやあああああ！」

「ちょ！ 暴れなわわわっ！？」

しかし、高所恐怖症なのだろう、反狂乱になった華蓮が私の背で暴れ宙でバランスを崩してしまった。頭と足の位置が真逆になる。私は華蓮を抱き抱え、自分が下になるように身体を入れ替えた。

「むぎゅー！」

「ぶぺっ！？」

華蓮は私というクッションがいたため地面との衝突はなかったが、私は顔面から地面に落ち首の辺りでペキッと嫌な音が鳴った。

「いたたた……何考えてるのよ！ 飛び下りるなんて危ないじゃない！」

華蓮がお尻の辺りをさすりながら怒鳴る。

「……………華蓮が暴れなかつたら安全の予定だったの」

私は痛む首をおさえながら立ち上がった。軽く跳んでみるが他に痛む場所はない。丈夫な自分の身体に感謝だ。

「華蓮は？ 怪我とかはない？」

「翼竜につかまれていたところとお尻がすこしだけ痛むくらいよ。あとは特に問題はないわ」

「そっか。なら早めにここを離れよう。多分、あの翼竜は華蓮を餌として連れてきたはずだから」

それから私と華蓮は足早にその場を離れた。華蓮は走った私とは対照的に元気そうだ。

「華蓮って元気だね」

「それが王族の証拠よ！」

「体力を大して使わないから元気が有り余っていると」

「その通りよ。もっと褒めなさい」

「別に褒めてないし」

道中そんなくだらないやり取りをしていたため頭上から降ってくるものに私は気づけなかった。

頭上から降ってきた何かは私の顔面に激突し墜落した。一方、私は後頭部を地面に強く打ち付ける。

「いったあ。な、何？」

たんこぶができないように頭を押さえながら起き上がり衝突したものを見る。そこには……………。

「さっきのミニ翼竜？」

第十話『密林にて』（後書き）

読んでいただきありがとうございます

自分では上手く書いてるつもりなのですが、他の作家さんの話を見ているとずいぶんと文章表現の巧みさが違うなあと思うこのごろです

レベル向上のためにも、感想欄にて批評等をお願いします！

第十一話『密林にて〜その2〜』

「何でここにこの子が？」

私とそのミニ翼竜を抱き抱えようと手をのばすと、ミニ翼竜はグルグルと唸り声をあげその手に思い切り噛み付いてきた。

「っつー！」

が、噛みついたミニ翼竜は私の手をマズそうに顔をしかめながらすぐさまペツと吐き出した。え？ そんなに私の手ってマズい？

美味しいつもりは無かったがこれはこれで少し傷つく。

ミニ翼竜はそんな私にはお構い無しに華蓮に擦り寄った。

「撫でて平気かしら？」

華蓮はしゃがみこみながら私に尋ねた。

「噛み付かれるかもよ？」

私ですらとつさに神気で守ったにも関わらず歯型がついたのだ。なんか傷口が緑色でグジュグジュになってるし。さてはこのミニ翼竜………牙に毒を持ってるな？

「噛み付かれたらひっぱたくから平気よ」

いや、ひっぱたく云々の前にその手がなくなるかもしれないんだ

って。

華蓮は特に警戒もせず、手をのばした。案外、肝がすわってるのかもしれない。ミニ翼竜は私のときとは打って変わった様子で喉をゴロゴロと鳴らしながら撫でられるがままになっている。

「平気じゃない」

「何で!？」

キアラ的にはそこでガブツとされるはずなのに！

「連れて行けば役に立つかも」

「元の場所に置いてきなさい」

近くにいただけで牙を剥く翼竜なんか飼っていたら私の身体がもたない。というか穴だらけになる。

「せっかく追いかけて来てくれたのに可哀相じゃない」

「とにかくうちでは飼えません!」

「絶対に飼う!」

拒否する私と食い下がる華蓮。まるで雨の日に猫を拾ってきた親子の会話だった。

折れない華蓮に私が根負けし、結局連れていくことになった。ミ二翼竜は華音かのんと名付けられた。華一族の一員として誇りを持って欲しいそうだ。誇りの前に噛み付かないようにする躰が必要だと思う。

「ふっふっふ。これで私も立派な妖使いの一人ね！」

いや、それはどうだろう？ ミ二翼竜が巨大な妖を前に逃走していくところしか想像できない。あるいはあっさり負けるところだ。

「悪い妖が出たら私にバーンと任せなさい。バーンとやってけてあげる」

「華音がもう少し大きくなるまで待ったほうが良いって」

「うん。……それもそうね。じゃあ、それまでは瑠璃が頑張つてよね！」

「……まあ、出来たらね」

私の歯切れの悪い返答にはもちろん理由がある。妖には絶対勝てる自信がないからだ。

劉仙の下にいたとき一度だけ戦ったことがあるが妖は凶悪過ぎる。敏捷な動きに、狡猾さ、おまけ一発一発の攻撃の重み。本気を出さないと到底勝てなかった。しかも、その勝った要因はほとんど運ときた。遭遇率こそ低いものの、あまり相手にしたくないというのが正直なところだ。

「今日はどの辺りまで行く予定？」

「翼竜のことがあったから予定より結構進んだかな。明日には多分近くの村に着くはず」

「あ、ここ村じゃなくて町よ」

確認するために荷物から地図を取り出して見ていると華蓮が目的地を指差しながら言った。

「そうなの？」

「地図上じゃわからないかもね。でも、ここは行ったことがあるから知ってるわ。桃の蜂蜜漬けが有名なのよ」

「華蓮、よだれよだれ」

軽く妄想世界にトリップしていた可憐はハッと我に振り返って口端を拭った。

「と、とにかくこの町はそれなりに大きいからここで馬を調達しましょう。そうすればずいぶんと楽になるはずよ」

そこまで言われてあることに気づく。

「そういえば、華蓮ってどこまでついて来るつもり？」

密林の中で一人で生きるのは無理だろうと思って連れてはいるものの、具体的にどうするかまでは決めていなかった。どこかに頼りになる人がいるならそこまで送り届けてはやりたいが……。

「え？ 私がついて行くんじゃないかって瑠璃が私について来てるん

じゃないの？」

「は？」

「だって、瑠璃は私に仕えてるじゃない」

「そっぴゃ、出合ひ頭にそんなやり取りをしたような気がしないでもない。」

「なら目的地つてあるの？ 頼りになる人がいるなら連れて行ってあげるけど？」

「一族郎党皆殺しにされたからそんな人はいないわよ」

「重い！ 空気が急に重くなった！」

「えっと……なら、私としばらく旅してみる？ 独り立ち出来るようになるまでなら一応面倒は見れると思うけど」

「そうね、それもいいかもしれないわね」

「じゃあ、差し当たってこの町に行くことに問題はあつ？」

「現王朝になつてからは密林で暮らしてたからどれだけ変わつてゐるかがちよつとわからないけど、それなりに大きな町だから警備兵が多いと思うわ」

「つてことは長居すればするほど危険？」

「そつぷいことになるわね」

ゆっくり安心して休める村や町がないのはきつい。どんな人でも十分な休息を取らなければ満足な行動を取ることも出来ない。

私たちの重い空気を感じ取ったのかキュ〜と華音が鳴いた。華蓮がよしよしと頭を撫でてなだめる。そこで私は一つの案を思いついた。

「というわけで髪を染めてみました」

金細工のように輝いていた華蓮のブロンドは深い藍色となっていた。少しカットもしてため、太股辺りまであった髪は腰の辺りまでの長さになっている。

「この色もなかなかいいわね」

華蓮が金髪だというのは有名だったらしいので、藍色に染めてみたのだ。染料は近くにあった野草を使った。恐らく注意して見なければ華蓮だと気づかれないと思う。人の思い込みとはそういうものだ。

「これってどうやったの？ 瑠璃みたいな綺麗な銀髪にすることも出来る？」

「私のは地毛だし、そもそも染料がないからちよつと出来ないなあ」

「ふ〜ん」

華蓮はしばらく私の髪を羨ましそうに見つめていたが、あきらめたのか視線を外した。

「それよりも、そろそろ暗くなってきたことだし夕食の支度でもしよう。翼竜の一件があつたからそんなに枯れ枝も拾えてないし。華蓮は華音をつれて枯れ枝を拾ってきてくれる？ 私はその間に寢床の確保とかしておくから」

「わかったわ。華音、行くわよ！」

華音は華蓮の呼び声にキュ〜という鳴き声で応じ、パタパタと華蓮の後を追った。

今日の夕食は干し肉とドライフルーツ、そして水だ。どれも味気が無さすぎて泣けてくる。華音と華蓮には昼の残りである魚を食べさせている。もちろん、華音に与えるときには手を噛まれた。

「そういえばさ」

「うん？」

華蓮が一旦食事の手を休め口を開いた。

「瑠璃の格好って珍しいわね。どこの出身なの？」

「えっと、今進んでる方向とは真逆に進んで密林を抜けると村が

あるんだけど、その出身・・・・・・・・かな？」

「どうして疑問系なの？」

「気にしないで。で、この服は私が勝手に作ったものだから珍しく見えるだけ」

この世界の服は基本的に木綿の服だ。私のように絹で作られたものは珍しいのだろう・・・・・・・・デザイン共々に。

「ふん」

華蓮は納得したのかそれ以上聞いてくることはなく、夜は更けていった。

第十一話『密林にて〜その〜』（後書き）

お読みいただきありがとうございます

いまだに密林からは抜けられてはいませんが、華音というお供が出来ました

これで華蓮も戦力に………なりませんね

それはもう少しあとの話と言つことで

感想、批評、誤字脱字報告お待ちしております

第十二話『奇妙な町』

「あ、アステルダが見えたわよ！」

密林をやつとの思いで抜け、草原を進んでいると華蓮がはしゃぎながら言った。華蓮が言っていたように、たしかに大きな町だ。

「行きましょ。まだ小雨のうちに」

「そうだね」

朝からポツポツと降り始めたせいで、髪や服が軽く濡れていて気持ち悪い。早く宿で着替えたいものだ。

「なに・・・・・・・・この死んだような町」

大きさは裏腹に活気が全くない町だった。まばらに人は歩いているものの、生氣はなく虚ろな目でうつむき加減に歩いているだけだった。

「おかしいわね。昔はもう少し活気があったんだけど・・・・・・・・・・？」

華蓮は華音を両手で抱きかかえながら、辺りを忙しく見回す。華音も不安に感じたのかキュッと鳴く。

「すいません、この辺りに宿屋はありますか？ 食事が出ればど

んなところでもいいのですが……」

私は近くを通り掛かった一人の男性に声をかけた。

「……大通りを真っ直ぐに進むと、赤色の屋根の建物が
見えてくる。そこに行くといい」

男性はゆっくりと振り向き抑揚のない低い声で、つぶやくように
言つと、ふたたびのろとした動作で立ち去った。

「陰気くさい」

華蓮がとても失礼なことを言うが、それを注意することは出来な
かった。私も同じようなことを思っていたのだ。

男性に言われた通り大通りを進むと、赤色の屋根の建物に行き当
たった。恐らくこれが男性の言っていた宿屋なのだろう。他にそれ
らしい建物はない。

にしてもずいぶんと寂れた宿屋だ。とても流行っているようには
見えない。

「ここね。早く入りましょ」

華蓮は私の返事を聞く前にさっさと中へ入って行った。私も後を
追う。

薄暗い帳場には初老の男性が一人座っているだけで、他に人の気

配はない。

「すいません、一泊いくらですか？」

「代金は無料でございます」

「・・・・・・・・はい？」

「代金は無料でございます」

男性は無機質に同じことを繰り返した。その目からは何も読み取れない。

「えっと・・・・・・・・それじゃあ二人で一泊お願いします」

「お部屋は空室であればどこでも構いません。食事は一刻後にお部屋に運ばせます。ごゆっくりどうぞ」

そう言ったきり、男性は帳場から動こうとはしなかった。え？案内なし？

仕方なく自分達で一つ一つ部屋を確認する。廊下はうつすらと埃が積もっていて、歩きたびに足跡がついた。

「あつ！ 瑠璃、ここ大丈夫みたいよ！」

ほとんどが一人用だったが、三階の隅によやく二人部屋を見つける。ほか部屋とは異なり、比較的綺麗に掃除されていた。ほのかに花の香りもする。

「ベッドがフカフカよ！　んゝ、お日様の匂い」

華蓮は部屋に入るなり靴を脱ぎ散らかしてベッドにダイブした。華音もそれに倣いピヨンと隣のベッドにダイブする。……………それ、私のベッド。

「瑠璃」

「ん？」

着替えを済ませ、荷物整理をしていると華蓮がベッドに寝転びながら私を呼んだ。

「桃の蜂蜜漬けが食べたいわ」

「いつてらっしゃい」

「じゃなくて！　買ってきてって言うてるのよ！」

「そんな贅沢してたら路銀がすぐ底をつくからダメ」

「食べたい！　食べたい！　食べたーむきゅっ！」

手足をバタバタとさせていたため華蓮は見事に転げ落ちた。ドシンと鈍い音が鳴る。

「……………痛い」

「だろっね」

目端に涙を浮かべ、鼻を押さえながら華蓮は立ち上がった。

「あら？」

「どうしたの？」

「ここ……床に少し窪みがある」

「どれどれ」

私は華蓮が指した場所を調べてみた。たしかに不自然な窪みがある。壊れてるのではなく、人工的なものだ。

「よっ………」

『龍月』でその窪みを拡げてみる。するとそこには……。

「地下階段？」

井戸状になっている空間に鉄製の梯子^{はし}がずっと下へと伸びている。あまりにも深いせいか底は闇に覆われていた。

「降りる？」

「……いや、今はやめておこう。もうすぐで夕食が運ばれてくるはずだから。探索はその後でも遅くはないでしょ」

「それもそうね」

華蓮も納得してうなずいた。

その窪みを上手く板で隠したところで食事が運ばれてきた。目茶苦茶に質素だったが……。冷えた緑茶と齒が折れそうなほど固いパン一切れって何？

「……………不味い」

華蓮がボソツとつぶやく。私もそれには同意だ。これなら干し肉や野草を煮た物の方がまだマシかもしれない。

「ちよつと待ってて。厨房借りて食べられるようにしてくるから」

私は石のように固いパンの乗った皿を取り上げ、ひとまず帳場へと足を向けた。

「えつと……………あ、いたいた。すいません」

帳場には私たちが来たときと同じ男性がぼんやりと手持ち無沙汰に座っていた。

「……………何かご用でしょうか？」

「厨房をお借りしたいのですがよろしいですか？」

「どうぞご自由にお使いください。一階の廊下を真っ直ぐに進めば見つかります」

ずいぶんとあっさり許可された。もう少し根掘り葉掘り聞かれる

かと思ったのだが……まあいいか。

「ありがとうございます」

私は一礼してから、言われた方へ向かう。今思ったけど、燭台に火くらい点してくれないかなあ？ 足元が見にくくて仕方がない。

「ここかな？」

古びた扉に行き着いた。厨房と書かれたプレートがかかっている。押し開けるとギィと軋む音がした。

「汚っ！」

思わず叫んでしまった。洗い所は使いつぱなしの鍋や皿。貯蔵庫の辺りからは虫が何匹も出たり入ったりしている。それだけではない。長い間換気をしていなかったせいかすえた匂いが立ち込めていて、呼吸をするたびに気分が悪くなりそうだ。

「……………やめておこう」

ここで調理したら逆に病気になるそうだ。それくらいなら、このまま食べた方がまだマシというものだろう。

私は嘆息し、部屋へと戻った。

「ゴメン、厨房使えなかった」

「えっ」

華蓮が不満そうに口をとがらす。

「なら、華蓮のパンと私の分の干し肉交換する？」

「うん」

お互い交換をして簡単な食事を済ませた。

「さてと………」

一心地ついてから立ち上がる。お待ちかねの地下探索だ。

「いよいよね。何があるのかしら？」

「レアアイテムがあるといいけど」

「『れああいてむ』？」

「なんでもない、気にしないで。ほら、行くよ」

私は隠していた再び窪みを広げる。先程と変わらず井戸状の穴がそこにあった。私と華蓮はその穴を慎重に降りていった。

第十二話『奇妙な町』（後書き）

お読みくださりありがとうございます！

自分では頑張って書いたのですが、読みづらい箇所などはございませんでしたでしょうか？

感想、批評、辛口コメント、誤字脱字、何でもかまいません。
参考にさせていただきたいのでよろしくお願いします。

第十三話『地下探索』

「……………暗いな」

梯子を降りた先はただっ広い空間があった。壁際にズラツと兵隊のように一列に並んだ、優に百体を超える石像が気味が悪い。

地下なだけあって一寸先は闇。視覚は何の役にも立たなかった。部屋から拝借した燭台がなければ到底進むことは出来なかっただろう。

「この暗さじゃ、はぐれたら見つけにくいから離れないでね」

私はそう言いながら華蓮の方へ首を向ける。しかし、そこにはいるはずに華蓮の姿はなく華音が首を傾げている姿だけだった。

「……………華蓮のバカアアアツ！」

私の叫び声は反響しながら暗闇へと吸い込まれていった。

く地下三階く

「あら？ 瑠璃？」

華蓮は二階層下のフロアにいた。造りは一階とほぼ似たようなもので、暗闇の空間が広がっている。

「どこ行つたのかしら？ はぐれたら危ないのはわかつてるでしょうに……」 はぐれたのは華蓮からです」

辺りに燭台をかざし見回すも、当然のことながら瑠璃の姿はない。

「ま、いいか。それよりこの宝箱よね」

そして目の前の箱に向き直る。大の大人が三人は入りそうな巨大な箱。札で封がふたされていた。開けたら間違いなく良くないことが起きそうである。

しかし、華蓮はそんなことは気にしなせず、札をあっさり破り捨てる。

「んしょ……っ」と

見た目通り重いのか少し手間取るが、何とかギシギシと鈍い音を立てながら開けられた。それと同時に多量の埃が舞い上がり、華蓮の顔を襲う。

「うみゅっ！？ ペっぺっ！」

口に入ってしまった埃を吐き出し、箱の中身をのぞきこむ。

「……何も入ってない」

華蓮は露骨にがっかりした顔をして、その場を後にした。

く地下一階く

「何コイツ!？」

私の目の前で上半身が骸骨、下半身が蛇、背中に鷹の羽、と様々な獣が混ざったような気色の悪い巨大な怪物が鎮座している。

華蓮を探していると、目の前が急に光り、その光が収まると目の前にその怪物がいたのだ。

「落ち着いて状況を整理だ」

地下に潜る↓華蓮が早々に迷子↓探しに出る↓突然の発光↓目の前に怪物。

「意味がわからない。っと!」

怪物の尾のたたき付けを横っ飛びに避ける。と同時に龍月で斬り付けた。

断ち切るつもりで斬ったのだが、思ったよりも効かなかったのか、薄い切り傷が出来ただけにとどまった。その傷口からは黄色い血が流れ出ている。

「華蓮を探さないといけないからね。さっさとそこをどいてもらう!」

私は最初からギア全開でその怪物に飛び掛かった。

く地下六階く

「右と左どっちにしようかしら？」

華蓮は特に何事もなく地下へと進んで行った。せいぜいが老朽化したせいで床がでこぼこになっていたため、つまずいて転んだ程度だ。

「どっちがいいと思う？」

振り返って聞く。

「右ね？ それじゃあ行くわよ！」

実は華蓮は今は一人ではなかったりする。同行人へ人と言っているのかはわからないが」を含めて計四人で道を進んでいるのだ。

「それにしても知らなかったわ。骸骨って歩けるし、意思の疎通も出来るのね」

もちろん普通は出来ないのは言うまでもない。

「褒めてとらすわ」

華蓮のその言葉に骸骨は騎士のようにひざまづき恭しく頭を下げた。

「それで、この先には何があるの？」

骸骨たちは壁に何かを掘りはじめた。どうやら文字のようである。

「ふ・う・い・ん・の・ち・か・ら。……………封印の力？」

骸骨たちはカシャカシャと首を縦にふる。

「何を封印するためよ？」

この言葉には骸骨たちは首を横にふる。どうやらわからないようだ。

「ま、いつか。ほら行くわよ」

細かいことは気にしないのが華蓮の危ういところでもあり、良いところでもある。特に気にしていない様子で更に奥へと足を向けるのだった。……………足元のスイッチを押したことはない気づかずに。

く地下一階く

「こんの野郎っ！」

私は神気を龍月に纏わせ振るった。骨と剣がぶつかる鈍い音はせず、やすやすと切り裂く。怪物の右手が床を震わせながら落ちた。しかし、すぐに再生が始まる。

「ふう・・・・・・・・どこかに弱点ないかな？　これじゃあ、キリがないっての！」

後ろからの薙ぎ払いを反射神経だけで避ける。そのまま一回転。襲撃者に向き直る。

「石像！？」

襲撃者は壁際に並んでいた石像たちであつた。怪物に加え百体以上の石像。正直・・・・・・・・きつい。

私はすつと腰を落とし剣を眼前に構えた。相手の力を利用する攻撃、カウンターで処理する作戦に切り替えた。恐らく、力押しをしたとしても先に力尽きるだけだろう。

石像が左右に回り込み剣を振り下ろしてきた。龍月の刀身で力を受け流し、他の石像にぶつける。突進するやつに足払いをかけ、よるめいたところに猛烈な蹴りをかます。

「ガアアアアア！」

突如、怪物が地面を揺らすほどの咆哮をあげた。かと思うと背中のお飾りと思っていたレンガ色だった翼が凶々しい黒色に変わり、大きさも倍以上になった。その翼をはばたかせ、宙に舞う。

「え・・・・・・・・面倒な」

石像に加え、怪物のパワーアップ。一難去らずにさらに一難か・・・・・・・・やばいかも。

私は背中に冷たい汗が流れるのを感じながら思った。

「地下十五階」

「ここかしら？」

華蓮は扉の前にいた。全長が五、六メートルはある石造りの扉だ。

「どう思う、幽羅？」

華蓮は肩の上に乗っている小人に尋ねた。骸骨の騎士とは別に増えた仲間だ。地下十階辺りを歩いているときに蝙蝠のようなモンスターにかじられているところを助けたところ、仲間になりたいと申し出たのだ。もちろん蝙蝠モンスターは骸骨の騎士に一刀両断されている。

本人いわくこの地下が建設されて以来、ずっと住まわされているそうだ。だから、地下に関して知らないことはないらしい。

「華蓮お嬢様が触れれば開けられるかと」

「どうして？」

「華王朝の娘だからです」

「ふん。よくわからないけど触れればいいのね？」

「その通りです」

華蓮は首を捻りながらも扉に手を触れた。するとそれに呼応する
かのように無音で扉が開き始めた。そこには……。

第十三話『地下探索』（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

皆様は地震災害は無事でしたでしょうか？

私は活動報告を見ればお分かりになると思いますが、大学で一泊するハメに陥りました。

この災害がなるべく早く収まることを切に願っております。

さて、小説のほうですが、瑠璃と華蓮がはぐれて地下をさまようこととなりました。

瑠璃はピンチな状況で奮闘中。

華蓮は何故か仲間を増やし安全に地下探索。

そして、華蓮は何かを見つけたようです。

次回にそれは明らかにあります。

第十四話『踏んだり蹴つたりの末』

そこは神殿のような場所だった。地下にも関わらず昼のような明るさだ。真ん中に噴水のようなものがあり、その周りで小鳥たちがさえずっている。どこか微笑ましい光景だった。

「……………綺麗」

華蓮がポツリとつぶやく。そこが地下だということを忘れ、その景色を食い入るように見つめていた。

「華蓮お嬢様？　華蓮お嬢様？」

幽羅が頬を突き現実に戻そうとする。

「え？　あ、な、何かしら？」

「あちらに紅蓮の石があるのが見えますでしょうか？」

幽羅が示す方向、噴水のさらに奥に手の平大の石が宙に静止していた。

「あれは？」

「あれこそ森羅万象を封印できる力を秘めた魔石です」

「ふん。あれを手に入ればいいのね？」

「その通りです」

「わかったわ」

華蓮は一つうなずくと奥へと進んで行った。魔石は光を受けてるわけでもないのに、光り輝いていた。中は水が入っているかのように動いている。氷の中に水が入っているのを想像したらわかりやすいだろう。

「ちょっと待ってくださいます？」

華蓮が魔石に手を伸ばそうとすると、おっとりとした女性の声が響いた。

華蓮が振り向くと入口のところに二人の女性が立っていた。

「誰よアンタ？」

「美羽とでもお呼びください」

「それじゃあ美羽。何で待たなきゃいけないのよ？」

「何故、魔石が宿屋の地下にあったと思います？」

「え？」

「そんな強大な力を持つものがそんなところにあるわけありませんよね。普通なら都にある王宮の地下にあると思いませんか？」

「まあ、それは確かにそうね」

「ここから導き出される結論は一つ」

美羽が指をピツと立てた。

「動かしようがなかったということです」

「なるほどなるほど」

感心したように華蓮は何度もうなずいた。実際は誰もが考えつくような内容なのだが、華蓮にとっては意外だったようだ。

「動かしようがない。それはこの魔石の力が既に使われていることを示しています。逆に言えば、動かしたら封印が解けてしまうということです」

「あれ？ それじゃあ、幽羅の話は？」

「嘘ですね。ただ、王族の物が触れないと封印が解けないというのは本当のことですが……」

美羽は全てを見透かしたように幽羅を見据えた。

「くっ！」

幽羅はポンツと音がしたかと思うと姿を消した。それと同時に骸骨の騎士の姿も消える。

「え？ あれ？ 幽羅？」

「逃げたのでしょうか。蘭紗、追えますか？」

「・・・・・・・・「フルフル」」

蘭紗と呼ばれた少女は黙って首を振った。

「そうですか・・・・・・・・仕方ないですね。取り合えず、ここを出ましよう。華蓮さんが触れれば扉は再び閉ざされますので」

「わかったわ」

華蓮は美羽と蘭紗に連れられ部屋を出る。スツと触れると開いたときと同様に音もなく扉は閉まった。

「地上に戻りましょう。私たちについてきてください」

「わかったわ」

華蓮、美羽、蘭紗は地上を目指し来た道を戻っていった。

「はあはあはあはあ・・・・・・・・これで、はあはあはあ・・・・・・・・終わりかな？」

私は周りをグルッと見回した。私を襲ってきた動く石像は今や単なる石の破片と化している。

「残りは・・・・・・・・この怪物だけか」

「たく・・・・・・・・石像の力、強すぎだったの。関節の節々は痛

いいし、頭は強打されたせいでフラフラする。擦り傷や打撲もある。言ってしまうえば満身創痍の状態だ。

一方、怪物は幾度とない斬撃にも関わらず、驚異的な再生力で治癒してしまい、まったくの無傷でそこにいた。あれから何回かさらに変化を繰り返し、今や腕が六本で翼が凶々しい黒色になってしまっている。

「ははは。これは……無理、かな」

自嘲するように笑った。怪物は翼を羽ばたかせ宙に浮かぶ。かと思つと、クルリと真反対へ方向転換した。私に突っ込んで来るかと思つたが違ふのだろうか？

そのまま怪物は奥へと羽ばたいて行ってしまった。

「え？ 何？」

自分で言つのもなんだが、とどめを刺す絶好の機会だつたと思つ。それを逃したつてことは、私を倒すことが目的ではなかった？ あるいは、何か別に不測の事態が起きたとか？

「……いや、今は華蓮を探してあげないと。こんな危険なのに華音すら連れてないんだから」

私は華音を脇にかかえ奥へと走った。

「それでは、瑠璃さんとともに旅をしてるのですか？」

「ええ。まあ、瑠璃は私の家臣だけだね」

美羽は軽く驚いたようだった。一つ目は瑠璃が誰かに仕えている「形式上だけということはもちろんわかってる」こと。二つ目が華王朝の娘が生きていることだ。世間には華一族は枝分かれた親戚筋まで皆殺しにされたということになっているからである。

「美羽はどうして瑠璃を知ってるの？」

「瑠璃さんが一時期警備兵として滞在していた村に私もいたに過ぎません。こちらの蘭紗も同様です」

蘭紗は同意するように黙ってうなずいた。

「な、何かその子、寡黙過ぎない？」

「食えるときにはその分だけ口を開いてはいるのですが……
・まあ、話すのが苦手とでも思っていてください。それなら華蓮さまごとき頭脳でもご理解いただけたと思います」

「当然よ。何たって私は華王朝の娘たる華蓮なんだから！」

馬鹿にされているのに気づいていないのはいつも通りである。美羽はそんな華蓮を見てクスクス笑っている。

「……………「クイクイ」」

蘭紗何かに気づき美羽の袖を引っ張った。

「どうしました？」

「……………瑠璃が四階辺りにいる」

「どうしてそう言えるんです？」

「……………匂い」

「そうですか」

「始めてその子の声を聞いたわ」

華蓮が匂いのくだりで疑問を抱かず、声を聞けたところに注意を向けているのもお約束である。

何しろアホの娘だからである。

く地下四階く

「……………何もいないな」

私は右足を引きずりながら地下を歩いていた。燭台は先の戦いでなくしてしまったので、感じ取る気配だけが頼りである。鼻は自分の血の匂いのせいで利いていない。

「取り合えず、ここで休憩取るか」

私は身体を壁に預け休もうとした。が、壁に細工がしてあったの

かそのまま壁の後ろへと倒れてしまう。

「わわわわわっ!?!」

一旦、崩れたバランスは取り戻せない。私はそのまま重力に引かれ裏側にあつた急斜面を転げ落ちていった。

しばらく転がり腰を強く打ち付けてようやく止まる。

「いたた………。もう！ 何で私ばかりこんなに踏んだり蹴ったりなのよっ!?!」

「あれ？ 瑠璃？」

聞き慣れた声に顔を上げるとそこには華蓮がいた。そしてその横には。

「美羽!?! それに蘭紗!?!」

「お久しぶりです、瑠璃さん」

「いや、数日しか経ってないし。それよりも何でこんなところに!?!」

「話せば長くなるのですけれど」

そう前置きをして美羽は口を開いた。

第十四話『踏んだり蹴つたりの末』（後書き）

読んでくださりありがとうございます！

また、お気に入り登録をしてくださった方、とても嬉しいです！
ありがとうございます！

最近は一週間ごとの更新になってる気がしますね。
三日に一回の目標はどこにいったんでしょう？w

今回も地下での話です。

瑠璃がまさに踏んだり蹴つたりでしたね。

次回は世界観に関する話の予定です。

恐らく、一週間後の更新になると思いますが、そこは気長に待っていてください！

第十五話『予感』

「ここは旧王朝が秘密裏に建てた地下迷宮。魔石を守るためにあらゆる仕掛けが施されているのです」

美羽の説明に私は首を傾げる。

「それがどうして美羽と蘭紗がいる理由に？　そもそも魔石って？」

「魔石というのは『かくかくしかじか（前話参照）』というわけですよ」

「……なるほど。それじゃあ、美羽たちがいる理由は？」

「『かくかくしかじか』というわけです」

「『かくかくしかじか』でわかるか！」

「おかしいですね。さっきは通じたのですが……」

「さっきのは特殊！　とつとと説明する！」

今の私は踏んだり蹴ったりな目にあつたせいで気が少し短くなっている。私が声を荒げて言う和美羽はクスクス笑いながらわかりましたと言った。

私たちがいたあの村は前王朝に仕えていた者たちが造った村なんです。まあ、書類上は新しく造られた村、となっていますが。

ここからあの村は近いですね？ 森がありますが、馬を使えば二日もあれば辿り着ける程度です。近いところに造ったのは、もうわかりだと思いますが、あの魔石の封印を守るためです。

もちろん、王族の血を受け継いだものでなければ扉を開けることは出来ませんし、生半可な実力で地下を突破することも出来ません。

かと言って放っておくのも無用心が過ぎますよね？ ですので、定期的に村の者が視察に来ているのです。……先に言っておきますが、村の者は全員が元軍人ですよ。

私ですか？ 私も軍人ですよ。人形使い、なんて二つ名がありましたね。それでも、極秘作戦にいくつか従事したこともあるんですよ。ただ、卑劣の限りを尽くしたんで褒美は取り消しになりましたが……。

人形使いと呼ばれる理由ですか？ 私はこの竜の心臓から稀に取れる心糸しんしと呼ばれる糸で人形を操って戦わせているんです。

少し昔は旅芸人として生活してましたからね。稼ぐためにも、そして盗賊と戦うためにも必要な技術だったんです。

そんなに治安が悪い理由ですか？

王朝が基本的に統治しているのはもう知ってますよね？ 王朝が

統治しているといっても、大枠だけ決めてから後はそれぞれの町や村の官吏に任せてしまっんです。そのため、私腹を肥やそうとする人が多くて。

もちろん改革をしようとはしました。ですが、王朝からの使者は無視あるいは捕殺され、あまつさえ反乱を起こす者まで現れる始末です。前華王朝は賢帝と高評判ではありましたが、数の暴力には抗い切れず崩御してしまっただんです。

そして、現王の駿郁しゅんいくがその反乱の首謀者なんです。気に食わない者は殺し、仲間であっても牢屋に放り込む。民には平気で重税を課し、戦に駆り立てる。まさに暴君なんです。

私たちのいた村は劉仙さんと韓星さんが朝廷内でも高い地位を持つているため、まだ何とかなっていますが、それもいつまで持つか・
・・・・。

あの村が瑠璃さんをアツサリと受け入れたのは、戦力増強をしたかったからなんです。試験内容に指揮をさせるのもありましたよね？ それは、駿郁を倒すため指揮が出来る人材探しも兼ねているからなんです。

「とまあ、こんな感じですね。何か他に疑問とかはありませんか？」

「魔石は何から出来てるんだ？」

「遙か太古に神殿で見つかったとだけ聞き及んでいます。何で構成

されているかはまったく持って不明です」

「・・・・・・・・そっか」

ここまで聞いた私は記憶の隅に何か引つ掛かる物を感じた。ずっと昔、私が天狐になったばかりの頃に・・・・・・・・天津姫が何か言っていたような・・・・・・・・。

「どうしました？」

美羽が顔をのぞき込んできた。

「いや、何でもない。それより、美羽と蘭紗はこれからどうするつもり？」

頭^{かぶり}を振って雑念を払う。

「そうですね・・・・・・・・お邪魔でなければ旅に一緒にさせていただきます。駿郁に不満を抱いている者たちは私たちだけではないはずです。仲間を見つけるためにもお願いします」

美羽は深々と頭を下げた。その姿からは嘘偽りは見えない。

「・・・・・・・・わかった。蘭紗はどうする？」

ずっと黙っていた蘭紗に話を振ってみる。

「・・・・・・・・色んなご飯食べられるならついて行く」

「各地の名産品は食べれると思うよ？」

「・・・・・・・・行く」

四回のやり取りで決まった。蘭紗は食べ物を持ちつかせると扱いやすいなあ。

地下から這い出るとすでに朝日が昇っていた。

「つ、疲れた・・・・・・・・」

私はベッドに飛び込んだ。すぐさま気を身体に巡らせて回復に努めてみるものの、打ち身や捻挫はなかなか治らない。

「そういえば瑠璃って傷だらけよね。どうしてなの？」

華蓮が不思議そうに聞いてきた。死ぬ思いをした私はその言葉に軽くイラッとする。

「地下の仕掛けのせいだよ。華蓮は何もなかった？」

「私？ あるわけないじゃない。だって私よ？」

「『根拠を言ってやったぞ、どや！』みたいな顔をしてるけどその根拠は成り立ってないからね？」

「え、そうかしら？」

心底不思議そうにする華蓮。

「とにかく地下でゴタゴタがあったせいで、ちょっと疲れてるんだ。半刻も休めば平気だと思うから」

「そう。私は物分かりの良い主だから許してあげるわ。美羽と蘭紗を連れて町を見て回ってくるからそれまでゆっくり休んでなさい」

「はいはい、ありがとうね。気をつけて行って来るように。蘭紗、美羽。華蓮のこと頼んだよ」

「任せてください」

「・・・・・・・・・・〔コク〕」

三人はそう言って部屋を出ていった。

「・・・・・・・・・・ふう」

これでやっと休めるかと思うと身体から力が抜けた。それほどにまで地下の戦いはきついものだったのだ。

「駿郁か・・・・・・・・・・」

私は何となくだがこれからききな臭い起こりそうだと直感的に感じていた。この世界、ロンデステルテンの歴史のページになりうる何かを・・・・・・・・・・。

第十五話『予感』（後書き）

読んでくださりありがとうございます！

前回は一週間後とは言いましたがそれより二日早く書き上げられましたw

お気に入り登録が倍に増えていても嬉しいです！

ポチッとワンクリックしてくれた皆さん、ありがとうございます！

さて、今回はロンデステルテンの現状を説明する話となりました。敵を明確に認識するためですね。

あ、もちろんコメディーの風味はこれからも書いていきますよ？私自身、コメディーはとても好きなので。

モンスターもオリジナルでどんどん出していきたいと思ってます。戦闘描写はとても難しいですが、書くのはとても楽しいのでw

感想、批評、アドバイス、改善点、誤字脱字報告、お持ちしております！

第十六話『奇襲』

「瑠璃？ 瑠璃ってば！」

誰かに揺すられ強制的に眠りから覚醒させられる。

「う………ううん？」

「目を覚めた？」

薄く目を開くと華蓮が顔をのぞきこんでいた。藍色のサラサラな髪が窓から差し込む日差しで鮮やかに輝いている。

身体を起こし身体を軽く動かしてみるのが特に異常はなかった。気を巡らせながらゆっくりと休んだお陰で完全に回復したようだ。傷痕も残っていない。

「あれ、華蓮だけ？ 美羽と蘭紗は？」

ふと美羽と蘭紗がいないことに気づく。部屋には華蓮しかいない。

「何かやることがあるらしいわ。ちょっと前に部屋の前で別れたけど、もうそろそろ戻って来るんじゃないかしら？」

と言ったと同時にドアが開く。

「あら、もう起きて平気なんですか？」

美羽と蘭紗だ。会ったときには持っていなかったはずの荷物を大量に抱えていた。

「え？ 何その大量の荷物？」

「華蓮様にご不便をかけたくはないので、生活物資を買い込んで参りました」

「森にいるころは手を差し延べなかったのに？」

森と村はそんなに離れていなかったはずだ。真つ当な私の疑問に美羽は、

「……さあ、華蓮様。好きなお茶をお選びください。色んな種類のを買ってきましたよ」

スルーしたよ、この人。まあいいけど……。

「忘れ物はないね？」

「平気よ。あつても取りに戻らせるわ」

「キユ」

「大丈夫です」

「……」

四者？四様の返事を確認してから部屋を出た。目指すは西にある村だ。美羽の話ではそこにも前王朝の仲間がいるらしい。しかし、一年ほど前に連絡が途絶えてしまっていて、その安否を確かめに行きたいのだ。

今日は雲一つない晴天。旅をするには幸先が良さそうな……。

「ぶっ！？」

わけではなかったようだ。まさに晴天の霹靂^{へきれき}。扉を開けたと同時に頭部への強い衝撃を受けた。感觸的には鉄パイプのようなもので撲^{なぐ}られた感じた。

「瑠璃！？」

華蓮が悲鳴をあげる。

「騒ぐな！ 大人しくしろ！」

鎧やら剣やらハンマーやらで完全武装した複数の男たちが部屋に土足で踏み込んできた。私の頭を撲ったのはあのハンマーのようだ。

「蘭紗！」

「……………！〔コク〕」

蘭紗は私の意図に気づいたのか、華蓮と華音を両脇に抱えて窓から宿の屋根へと跳び上がった。その間に私も体勢を立て直す。頭か

ら血が流れ出ているのは今は無視だ。

「美羽、何人いける？」

「十二人くらい私一人でも充分ですよ？　せつかくですから私が人形使いの異名を持つ所以ゆえんをお見せしましょう」

そう言うとき美羽は服の懷からグローブと指輪のようなものを十個取り出した。それを手に装着する。

「お仕置きの時間ですね」

小型の人形が四体ほどどこからともなく現れた。それぞれが武器を持っている。

美羽がクイツと指を動かすと人形が男に向かって飛び出していった。男はフンツと鼻で笑い、人形を切り落とそうと剣を振るった。いや、振るおうとした。

薄ら笑いを浮かべた首が身体から転げ落ちた。ドシャツと血を撒き散らしながら倒れる身体。

男たちは何が起きたのか理解出来ずにポカンとするばかりだった。それはそうだろう。人形が飛び出してきたかと思うと、それを斬ろうとした仲間が血を撒き散らしながら倒れたのだから。しかも、それをしたのが極上の美人なのだから。

美羽は長い黒髪をかきあげながら、微笑みながら言った。

「いつまでここにいらっしやるおつもりですか？」

その言葉に男たちは一瞬の沈黙のあと、我先にと蟻の子を散らすように逃げ出した。来るのが急だったように、退散するのも急だった。残ったのは首と身体が分断された男の死体だけ。

「追わなくていいの？」

「平気ですよ。今頃ここに来たこと自体後悔するような目にあってるはずですから」

「?」

私には何を言っているのか良くわからなかった。

「それよりも瑠璃さんの怪我ですよ」

美羽は私の髪をかきあげ傷口をよくみようとしてきたが、その手を払う。

「油断した報いだから気にしないで。それにこんな怪我すぐ治るし」

気が少し抜けていたせいだ。いつもなら、あんな攻撃避けられた。これは私にとって良い薬になるだろう。

「額が割れてて、明らかに数針は縫う必要がありそうですね？」

「平気平気。それより蘭紗を呼んであげないと。蘭紗！」

私が呼ぶと蘭紗は窓から頭だけひよいとのぞきこませた。

「もう終わったから華蓮を連れておいで」

「・・・・・・・・〔コク〕」

蘭紗は一度頭を引つ込ませ、すぐに華蓮を抱えて下りてきた。

「あら？ さっきの狼藉者たちは？」

華蓮がキョロキョロと見回す。

「今頃後悔するような目にあってますよ」

美羽がさっきと同じことを繰り返した。華蓮と私は首を傾げるばかりだ。蘭紗は華音と我関せずと荷物から果物を取り出してムシヤムシヤと頬をいっぱいにしながら食べていた。

く町中でのやり取りく

「女を襲えば終わるんじゃないの？ あいつら強すぎる！」

男たちは鎧をガシャガシャ言わせながら走っていた。先程、瑠璃たちを襲ったやつらだ。

「だから俺はやめとこうって言ったんだ！ 女を襲うだけであの報酬は高すぎるって！」

「最終的にはお前だって賛同していただろうが！」

責任のなすりつけあいである。醜いことこの上ない。

この言い合いが原因で男たちは町の住人たちに周りを囲まれていることに気づくのに遅れてしまった。そしてそれが致命的となる。

「お、おまえら、何囲んでやがる！ とつとと散れよ！」

「殺されたくなければ失せな！」

しかし住民たちは無表情に近づいて来る。これはかなりの恐怖だ。さらにそれぞれの手に斧、鉈などの凶器を持っているとなればそれは計り知れないものとなってくる。

男たちの罵倒も勢いのないものになっていき、そして悲鳴に変わっていく。

「来るな！ 来るなあああああ！」

男たちはたちまち住民たちの波に飲み込まれた。

しばらくして……。

町は元通りの寂れた風に戻っていた。男たちの姿はない。逃げお
おせたのか。それとも死んだのか。その後、男たちの姿を見た者は・
・・・・いない。

第十六話『奇襲』（後書き）

お読みくださりありがとうございます！

今回もかなり、早めに書き上げることができました。

さて、今回では黒幕のようなもの、次の目的地の設定、美羽の強さを軸に書かせていただきましたがいかがでしたでしょうか？

町の謎もそれとなく察せるように書いてみたのですが、お分かりいただけただでしょうか？

私の實力不足でわからなければすいません。

感想欄でわからないと書いていただければお教えいたします。

次回は道中の話です。

なるべくギャグ要素を入れたいですね。

第十七話『山道にて』

晴天の下、獣道を歩くのは存外に気持ちよかった。すぐ側には川も流れていて景色も良い。

「気持ちいいわね」

華蓮が顔をほころばせながら言った。その言葉には私も同意だ。いつになく気分が高揚している。

「華音も気持ちいいわよね？」

華蓮の言葉に側をパタパタと羽ばたいている華音はキュ〜と鳴いて同意した。尻尾も振って確かにどことなく嬉しそうだ。

「ここは私が旅芸人のところに見つけた抜け道なんです。普通は山を越えなくてはいけないのですが、ここはちょうど山間にある道なので上り道とかも少ないんです」

「山のモンスターとかは平気？」

「何故かここ周辺はあまり出ないんです。私が会ったのも片手で数えれば事足りるくらいですよ」

「ふうん。って、蘭紗！ 川に飛び込みそうしたらだめ！」

私の言葉に蘭紗は今にも飛び込みそうな格好で静止した。

「……………魚」

「着替え持っていないでしょ？ 木の実だったら好きなだけ取っていいから」

「……………〔コク〕」

蘭紗のうなずきに―安心……………するの早かった。おもむろに全ての服を脱ぎ、綺麗なフォームで川へ飛び込んだ。私の話を『服さえ濡らさなければ平気』と解釈したようだ。

少し楽しそうに魚を追いかける蘭紗を見て、私はまあいいかと思ってしまう。

「少し休憩しよう。蘭紗があを通りだし」

「そうですね」

「私も川に行こうかしら？」

「ダメ（です）」

「どうしてよ！？」

しばらくして蘭紗は川から上がった。雪のように白い肌を這うように水が伝う。

「……………いっぱい捕まえた」

蘭紗の手には山のような魚が抱えられていた。どこことなく満ち足りた顔をしているのがうかがえる。

「美羽に渡してからこっちにおいで」

蘭紗はうなずくと美羽に魚を渡して戻ってきた。その身体を冷える前に拭こうとタオルですっぱり包むが、嫌がるように身体をよじられた。

「こーら、風邪ひいたらどうするの？」

私がそう言うのと大人しくなった。そうやって蘭紗の身体を拭いていると、

「まるでお母さんと子供みたいね」

と華蓮に言われた。

「そう？」

自分では特別なことをしているつもりはない。風邪をひいてこじらせたら事だし、昔に風邪で何人も知人を亡くしている。出来ることをするのは当然だろう。

「はい、終わり。ちゃんと服を着るんだよ？」

「……………〔コク〕」

蘭紗が服を着るのを見ていると美羽に呼ばれた。

「何？」

「日が暮れる前に進めるだけ進んでおきましょう。このあたりは夕暮れになると霧が出るんです」

美羽の進言に従い休憩を切り上げた。霧が出るなら見晴らしの効くほうが良い。視界が遮られていると何かに接近されても気づきにくくなってしまう。

途中で休憩を幾度か挟みながら獣道を進んでいく。木々の隙間からこぼれ落ちてくる日の光もすでに赤味を帯びている。

「霧が出てきたな」

話通り霧が出てきた。それもずいぶんと濃い霧である。

「はぐれないように気をつけて………って、二人は？」

振り返ると華蓮と華音と蘭紗のちびっ子二人組プラス一匹が忽然と姿を消していた。その場には私と美羽の二人しかいない。

「はぐれたのかもしれないですね。探しにいきますか？」

「……いや、ここに留まろう。蘭紗がいるんだし、よっぽどのがなければ大丈夫のはず」

「そうですね。たき火を焚いておきます。目印くらいにはなるでしょう」

「まったくダメな家臣ね！　蘭紗！」

「……………」

「二人がどこにいるかわかる？」

「……………匂いが拡散されててわかんない」

「使えないわね！」

理不尽にキレる華蓮。

「とにかく二人を探すわよ。多分まだ近くにいるはずよ」

「……………そっち違う。こっち」

勢いよく華蓮が歩き出したのは獣道からはより離れてしまう方向だった。蘭紗が静かに指摘する。

「う、うるさいわね！　ためしてみたのよ！　わざとよ！　うつかりよ！」

空回りになったせいかわ顔を赤くしながら支離滅裂なことを叫ぶ華蓮。そんな華蓮を蘭紗は不思議そうに見ていた。

「とにかく！　早いとこ合流するわよ！」

華蓮は恥ずかしさを紛らわすように大声で言った。それに応えるように獣じみた鳴き声が聞こえた。

「華音、変な声出さないの」

「キユ〜？」

華音が華蓮の言葉に首を傾げる。

「華音じゃないの？　なら蘭紗？」

「・・・・・・・・・・フルフル」

「え？　じゃあ誰が・・・・・・・・・・」

再び背後から獣の鳴き声が聞こえてきた。さっきよりもそれは近くなっている。ダダッダダッと鈍い足音まで聞こえる。華音は威嚇するようにグルグルとうなっている。

「何か近づいてくる？」

「・・・・・・・・・・」

茂みを掻き分けて現れたそれは体長十メートルはありそうな巨大な熊のようなものだ。しかし決定的に熊と違う点があった。それは堅そうな棘が背中に加え、手足は合計で十本あるところだ。

「きゃああああああ！」

華蓮が悲鳴を上げる。

熊は華蓮をギロリと睨んだ。その視線は見られた者を恐怖の奈落

に突き落とし、死ぬ覚悟をさせてしまっただった。

蘭紗は敵わないとみて、華蓮と華音を両脇に抱え遁走を始めた。もちろん、熊は生き物の本能として二人と一匹を追いかける。

「追いかけてきてるわよ！」

「……………」

蘭紗はそんなことはわかっているといいたげにうなずいた。

木々の間が狭いところをぬうようにして、熊の動きを制限しながら上手いこと逃げ続ける。時折、反撃が出来ないか隙をうかがうがそれも難しそうだ。蘭紗たちはとにかく逃げつづけることしか出来なかった。

「今、悲鳴が聞こえなかった？」

「聞こえましたね。華蓮様の声に似てる気がしました」

私と美羽は立ち上がって辺りをうかがった。しばらくの静寂の後、再び悲鳴が聞こえた。それはさっきよりも近づいている。

龍月の柄に手をかけいつでも抜けるようにしておく。美羽も人形をどこからともなく取り出し何か起きてても対応出来るようにしていた。

ガサガサと草むらを掻き分けて現れたその姿に、

「何だそいつ!？」

私はそう叫ぶしかなかった。

第十七話『山道にて』（後書き）

読んでくださりありがとうございます！

目標に近いペースで何とか仕上げられています。

今回、モンスターがやけに少ない山道で、モンスターにであってしまいました。

少ないのはそれはもちろん強いモンスターがいるからです。

さて、瑠璃たちはどうなるのか？

次回、熊モンスターとの戦闘or逃走になります

第十八話『対策』

私、美羽、蘭紗の三人は熊型モンスターと対峙していた。涎をダラダラと流し、私たちを餌であるかのように捕食者の目で見ている。

「……………青十熊^{せとく}」

美羽がつぶやいた。その顔はいつもの微笑みはなく恐怖に歪み、声も震えていた。

「美羽？」

「瑠璃さん、逃げましょう！ こいつは化け物です！ 敵うわけありません！」

は、切迫した表情からは本気の色しか見えない。それを見て取った私は、

「私が殿^{しんがり}をする！ 走れ！」

私たちが走り出したと同時に青十熊も追跡を始めた。

「あと少し行ってから右に曲がります！ そうすれば小さい洞窟があるので、そこに逃げ込みます！」

先行する美羽の言葉にうなずく前に青十熊の鋭い爪が私を襲う。

「くっ！」

龍月で何とか軌道をそらす。そうやって凌いでいるものの、幾度となく繰り返された攻撃は着実に私に傷を負わせていた。

町の地下にいた怪物とくらべても桁違いの強さだ。龍月で切り付けても弾かれ、気を使ってたとしても何とかわずかな切り傷をつけられるだけ。なら……。

「はああああっ！」

繰り出される爪をかい潜り、どんな生き物でも鍛えられないであろう目に全力で刺突を放った。

グギヤアアアアア！

聞くだけでも恐ろしげな苦痛の叫びが響き渡る。攻撃が通ったのだ。

「今のうちに早く！」

美羽たちのほうへ振り返り叫ぶ。青十熊はもがき苦しみ、腕を目茶苦茶に振り回していた。目を潰された痛みで私たちどころではないようだ。

私は踵を返し美羽たちの後を追った。

ぴちゅん。ぴちゅん。

規則正しく水が天井から滴り落ちる音が聞こえる。

「ここなら安全なはずです」

私たちは美羽の言っていた洞窟にいた。少し奥に言ったところに都合よく休めそうな場所があったのだ。

「ねえ美羽。青十熊ってなんなの？」

「世界を狩る怪物です」

「世界を狩る？」

「青十熊は基本的に生殖活動はしません。脱皮を繰り返して、永遠に生きるモンスターです」

「それならあの個体を倒せば安全になるんじゃない？」

「普通はそう考えますよね？　ここが最大の特徴なんですけど、背中にはえている棘がありましたね。その先端は小さな穴が空いていて、そこから液を流せる仕組みになっているんです」

「液？」

「はい。青十熊はある程度以上の大きさを持った獲物に棘を刺して、液を流し込み、その獲物の身体を作り替えてしまうんです。そうやって繁殖をしているんです」

つまりは獲物さえいれば繁殖が出来るということんでもなく厄介な

モンスターということだ。それに加えてあの強さ。たしかにこれは世界を狩ると言われてもおかしくない。

「……………天津姫め。何て厄介なところに送り込んでくれたんだ」

「何か言いました？」

「いや、こつちの話。……………それよりも、青十熊に弱点はないの？」

「目だけです。身体は堅い毛皮で覆われてますから。青十熊が現れた場合は罾で捕らえて、残酷ですが、目から刺し通し身体の内側を直接破壊しています」

人だって生きるのに必死だ。弱肉強食、食物連鎖の一環に人だって組み込まれている。モンスターに殺される人がいれば、人に殺されるモンスターだっているのだ。それは自然の摂理である。

私と美羽の間に重苦しい沈黙が下りた。

「なら」

今まで黙っていた華蓮が口を開いた。

「方法がわかってるなら退治したほうがいいんじゃないかしら？」

「華蓮様も御覧になった通り、倒そうと思って倒せる強さではないのです。瑠璃さんが今回一矢報いることが出来たのは瑠璃さんの

技量が飛び抜けていたからです。私や蘭紗では傷を負わすことは出来ても退治することは不可能なんです」

私も美羽に同感だった。正直、気を使った攻撃を弾く甲殻に覆われているモンスターを倒すのはかなり難しい。村や町に現れたとき専用の罠みたいなものがなければ、下手をすれば死にかねない。

「誰も一人でやれなんて言っていないわ。三人でならどうとでもなるでしょ？」

華蓮は馬鹿ねとも言うかのようにやれやれと首を振った。

「王族の血を引く者として民が危機にさらされている状態は看過できないわ」

「今回だけは華蓮が頭良さ気に見えるね」

「そうでしょう？　なら……」

「でも賛成は出来ない」

「どうしてよ!？」

「私たちが死んだ場合、華蓮を守る者がいなくなるからね」

「つつ!」

華蓮が苦虫を噛み潰したような顔をした。

「近隣の村に青十熊が出たことを知らせるから、それで今回は許

してくれないかな？」

「・・・・・・・・わかったわ」

自分に関することなので不承不承ふじふじふじと言ったように華蓮はうなずいた。それを見て私は苦笑しながら、華蓮の頭を優しくなでた。

「私たちだつて助けたくないわけではないんだ。なるべく華蓮の意思を尊重してやりたい。でも、相手が相手だからね」

「・・・・・・・・わかってるわよ、そのくらい」

華蓮はすねたように顔をしかめ、華音を抱えて後ろを向いてしまった。

「さて、近隣の村を回って警戒するように言いに行こうか」

私と美羽は私の持っていた地図を開き、村の所在地の確認を始めた。

第十八話『対策』（後書き）

読んでくださりありがとうございます！

ここ最近はやや軽いスランプが発作的に起こりがちですが、何としても週に一回は更新いたします。これは最早、宣言ですね。

まあ、私事のことは置いておきましょう。

今回、伝説級の化け物『青十熊^{せとく}』が出てまいりました。読み方は私が適当に考えたに過ぎないので万が一試験に出たとしても間違っ書かないでくださいねw

華蓮を優先して、退治しないことに決めた瑠璃たち。その決断がどういった方向に進んでいくのか？

それは追々書いていきたいと思います。

第十九話『腐っても元王族』

洞窟を抜けるとそこには平原が広がっていた。吹き抜ける風に草木がなびく。思ったよりも時間が経っていたのか、大地は茜色に染まっていた。その平原中心にポツンと少し大きめの村がある。

「やっと出れたわね」

そう言う華蓮の顔には疲労の色が見える。華蓮だけではない。美羽も、そして華蓮と華音を抱えて走り回った蘭紗も同様だ。

「今日は宿を取りましょう。この状態で先に進んでも危険なだけです」

美羽の言葉に私たちはうなずいた。

「四名様で四千ガルドとなっております」

「四千ガルド!？」

私たちは村長に青十熊が付近にいますと言ってから宿屋に入った。そこで告げられた言葉に驚く。

一ガルドが大体二百円というのがこの世界の相場だ。つまり四千ガルドとは元の世界の通貨に換算すると八十万円となる。

それ以下の通貨単位は『リユミ』と呼ばれている。価値は『ガル

ド』のちょうど十分の一だ。

「他ですと千ガルドの部屋がございますが……………」

「美羽と蘭紗はいくら持ってる？」

二人は懷から財布を取り出し中を見せてきた。

「三百ガルドと十ガルド……………。それと私のを合わせて千二百ガルドか……………どうする？」

「他に宿はありませんか？」

「この村ではうちだけです」

無情に告げられ、私たちはうなだれた。すると、華蓮にちよんちよんと肩をつつかれる。

「なに？」

「なにに困ってるかは良くわからないけど、私が払おうか？ 五千ガルドなら即金で払えるわよ」

「……………は？」

「ちょっと引き出して来るから待ってて」

そう言つと華蓮は踵を返し宿屋を出て行つた。蘭紗と華音がその後を追う。

しばらくすると華蓮たちが戻ってきた。手には革袋が握られている。

「待たせたわね。はいこれ、四千ガルドピッタリ入ってるから」

華蓮は帳場に革袋を置いた。ジャラジャラとお金同士がぶつかる音がする。

「は、はい！・・・・・・確かに。それではご案内いたします！」

払えると思っていなかったのか宿屋の主人は慌てたように帳場を飛び出し、私たちを先導した。

「ふうん、まあまあね。ああ、荷物はそこに置いといてくれればいいから。あと、お湯も沸かしておきなさい。すぐに行くから」

部屋に入るなりあれこれと指図する華蓮。

「か、かしこまりましたあ！」

主人は慌てたように一礼をしてから部屋を出て行った。

「ん？ みんなして固まってどうしたの？」

「いや、だって・・・・・・ねえ？」

華蓮が不思議そうな顔をするが、私たちは言葉を濁すしかなかった。

「うん。良いお湯ね」

華蓮が気持ち良さそうに伸びをした。蘭紗もパシャパシャと泳いでいる。

この世界ではお湯は貴重だ。相当に高級な宿に行く、あるいは貴族でないかぎり入る機会はないと言っている。

「華蓮」

「なに？」

「どこからあのお金持ってきたの？」

「私の私財だって言ったじゃない」

「華王朝はもうないのに預金なんて出来るわけないと思うんだけど……」

元の世界では王朝が潰れたときには、その財産は全て押収されてきた。戦国時代がわかりやすいかもしれない。合戦で負けた国は領地と財産を奪われる。それは敗国の反逆の芽を潰すという目的があるからだ。

「瑠璃のいたところがどういうところだったかは知らないけど、少なくともここでは何人たりとも財産を剥奪されることはないわよ」

「え？ 何で？」

「ここでは王朝の税収だろうと何だろうと、個人の正当な働き掛けによって得たものを奪うことは同盟法で禁じられてるわ。万が一、破ったことが公になった場合同盟国から徹底的に叩かれることになるわね」

「なら、国同士で戦争になった場合どうなるわけ？」

戦争なんて基本的に自分の私服を肥やすためにあるようなものだ。どんな大義名分を掲げたとしても、最終的にはそうなる。

「その場合はどちらかが負けて、その賠償として差し出すという形になるのよ。『貴国の傘下さんかに降ります』といった内容の契約書にその国の玉璽ぎせきを押して、戦勝国の属国となるわけ」

「なるほど……」

私はそう呟き、身体を湯船に沈めた。

第十九話『腐っても元王族』（後書き）

読んでくださりありがとうございます！

どうにもスランプに陥ったようでなかなか筆が進みませんでした。
短い上に大した話でなくてすいません！

次回も恐らく短い話になってしまうかもしれませんが、今度はなるべく間隔があかないよう頑張りたいとおもいます。

何卒、これからもよろしく願います！

第二十話『華蓮』

「華蓮。そっちの桶取って」

「はい」

「ありがとう」

受け取った桶でお湯を汲み、頭からかぶる。何百年を経ても変わらず、きめ細かく、みずみずしいままの肌に湯のしずくが伝った。

「ぶはあ」

久しぶりに生き返った心地だ。疲れが一気に癒された気がする。

「じ〜」

「ん？」

視線を感じ振り返ると華蓮と蘭紗が私をしげしげとながめていた。その視線はやたらと熱い。

「どうしたの二人とも？」

「大きいわね」

「……………（コクコク）」

私の質問には答えずに二人で何か分かり合っている。

「え、何？ どうしひゃっ!？」

二人は急に後ろから私の胸をわしづかみにし、揉みだきはじめた。右が華蓮、左が蘭紗と役割分担までしている。

「ちょ、やめ、んんっ!」

「真っ白な肌もスベスベで綺麗だし、胸も大きさの割にはたれていない。どうやらこんな完璧な身体つきになるのかしら?」

私は変な声を上げそうになるのを必死にこらえるのだけで精一杯だった。そんな疑問に答えている世余裕はない。

「私にも少しわけなさいよね!」

「そんなうん! 無茶苦茶、ん……………ああ。言わ、ない……………でえ!」

「声まで色つばいし! 反則よ! は・ん・そ・く!」

華蓮はもみしだく手をさらに激しく動かす。その一方で蘭紗は耳たぶを甘噛みしてきた。

「あうっうう」

浴場にわたしの声が響き渡った。

「はあはあはあ。もう……やりすぎだ」

私は息も絶え絶えだった。力が抜け、足腰が立たない。

「大丈夫ですか？」

美羽の手を借りて何とか立ち上がる。それでも身体が時々痙攣してしまい、立っているのが少しつらい。

「あ、ありがとう」

「礼には及びませんよ」

見づに介抱されながら何とか部屋に戻ることが出来た。

余計に疲れてしまった身体を横たえながら休めていると夕食が運ばれてきた。

ミディアムレアに焼かれた薄切りされた肉。野菜とパスタをあえたサラダ。こうばしい香りが立ち上る白色のスープ。次々と並べられていく皿は高い宿代に見合う料理の数々だった。

「私のおかげね。感謝しなさい！」

「税をきちんと払ってくれていた民に感謝しておきますね」

「うんうん」

何故か満足そうにうなづく華蓮。

「さて、それじゃあ……………」

ぎゃあああああ。

廊下側から悲鳴が聞こえてきた。悲鳴というよりは断末魔かもしれない。その後には物が割れる音。そして再び悲鳴。

「何？ 何なの？」

突然の出来事に戸惑う華蓮。

「……………二人ともここで待ってて」

私は美羽に目配せをし、龍月をつかみ気配を殺しながら廊下に出た。二人で音がする方へと向かう。

「何が起きたんでしょうか？」

「さあ？ 良くないことが起きたのは確かだろうけど」

ロビーにあたるところにたどり着く。そこは酷い状態になっていた。壁には大きくえぐり取られたような傷。粉々に割れた壺。そして、その場に立ち込める胸のむかつくような鉄の匂い。

「ひどいですね」

「何があっただんだ？」

「遺体を調べてみましょう。何かわかるかもしれません」

私と美羽は手分けをして調べてみることにした。首がないもの。腕が吹き飛んでいるもの。腹に穴が空いているもの。上下に分かれているもの。そのどれもが鮮やかな切り口で明らかに刃物で斬ったことがわかる。

しかし、値打ちがありそうなものはどれも手付かずとなっていた。財布や金庫なども同様で奪われそうになった形跡がない。ただ、帳場から宿泊名簿だけがなくなっていた。

「何かわかった？」

「いえ、人の仕業ということくらいですね。そして物取りというわけでもなさそうだということと複数人だということくらいです」

「そっか」

ここを襲撃した者は何が目的だったのだろうか？ 金目のものではないならば、殺すことが目的だった？

「情報を整理してみましょう」

「そうだね」

「まず、単なる無差別な殺人でも物取りでもなさそうですね」

「根拠は？」

「客室には来ずに帳場にいた人だけが殺されているからです。無差別なのだとすれば、客室にいる者たちを殺さないはずがありませんからね。物取りも、金庫や財布に手がつけられてないことからわかります」

「他には？」

「気になったことといえば宿泊名簿がなくなっていたことでしょ
うか」

やはり美羽も気になったようだ。宿泊名簿なんて売ったとしても二束三文にもなりはしない。

「なら、それを盗った理由を考えよう」

「宿泊名簿からわかることでしたら、誰が泊まっているかくらいですね。別に居住地や身分を書いたりするわけでもないですし」

「名前か……」

そこで気がつく。もしかしたら……。

私が部屋へと駆け出した。後ろから美羽が呼んだ気がしたが無視する。

「華蓮！？ 蘭紗！？」

ドアを蹴破り中へ入る。

しかし、そこには頑丈そうな紐で拘束され、猿轡さるべしわを噛まされてい

る蘭紗が転がっているだけだった。

「大丈夫？」

すぐに拘束を斬り蘭紗を解放してやる。

「何があつたの？」

目線を合わせ優しく尋ねる。

「……………悪い奴らたくさん来た。狭い部屋だったから取り押さえられて、たくさんは倒せなかった」

そついうと蘭紗は悲しげに顔をうつむかせた。

「蘭紗が無事だっただけで今はいいから」

そつと抱きしめてやる。蘭紗は私にぎゅっとしがみつき、顔をうずめた。

「瑠璃さん！」

「ご覧の通り、華蓮がさらわれた。宿泊名簿は私たちが泊まっているかどうかを調べるために持っていたんだ」

「くっ！」

美羽が焦ったように部屋を出ようとする。しかし、その手をガツとつかむ。

「放してください！ 華蓮さまが危険な……」

私は思い切り美羽の頬を叩いた。頬を押さえ呆然とした様子で私を見る。

「落ち着いて対処しなければ助けられるものも助けられないだろ！ 冷静になつて考えろ！」

部屋の中がしんとなる。聞こえるのは割られた窓から入ってくる虫の鳴き声だけだった。

第二十話『華蓮』（後書き）

読んでくださりありがとうございます！

今回からついに物語が大きく動き始めます。

華蓮がさらわれ、それを追う瑠璃たち。

この後どうなるのか？

今回は一週間かかってしまいましたが、次回はもう少し早く更新したいと思います。

第二十一話『前の町へ』

「落ち着いた？」

「はい……取り乱したりして、すいませんでした」

美羽が深々と頭を下げた。

「謝らなくていい。それよりも華蓮を助けることを考えよう」

「はい」

蘭紗は誘拐犯の特徴を一つ一つ思い出しながら詳細に語ってくれた。それと美羽の情報を照らし合わせる。すると、簡単に特定することができた。

「駿郁直属の護衛部隊、じゅうこくせいしだん十黒星騎士団ですね。飛び抜けた技量、何物にも動じない精神力。やっかいな相手です」

「なんでまた華蓮を誘拐したんだか。元王族ってだけで、実のことは単なるアホの子なのに」

「恐らくは封印を解くためかと」

「封印？」

封印というのであれば？ 魔神だの、邪神だの、悪魔だのを封じるやつだよな。

「はい。前の町にあった地下迷宮を覚えていますか？」

「やたらと仕掛けの施してあったあれ？」

「そうです。あの魔石には邪神が封じられているのです。そしてその封印を施したのが華蓮様の父君、華隆様かりゅうなんです。魔石の封印は華隆様の血族、つまり華蓮様が触れない限り解けないのですが、連れ去られたところを見ると駿郁が封印を解くつもりなのでしょうね」

「ちょ、ちょっと待った！」

矢継ぎ早に説明されて少し混乱する。美羽の説明を整理するところだ。

魔石には邪神が封印されている。そして、その封印を施したのが華蓮の父親である華隆。封印は華一族でなければ解けない。その華蓮を駿郁の手のものがさらった。目的として考えられることは、邪神を封印から解き放つこと。

「そうだな……なら、三つに分かれよう。元々の目的地だった町に行く人と、前の町に戻る人と、村に戻る人で」

「どうしてです？ 三人で戻った方が良くないですか？」

「まず駿郁とことを構えなければならぬときに手数が多い方がいい。それと、華蓮が前の町に連れて行かれた確証がない。なら、三つに別れたほうが効率はいいってこと」

全員で戻って何もありませんでしたじゃ、意味がない。それに、

仲間が多い方が華蓮を捜しやすい。

「なら私が前の町に戻ります」

「いや、美羽にはこのまま進んでもらう」

「どうしてですか！？ 華蓮様が危険な……」

再び美羽の感情が高ぶり声を荒げる。

「先に人の話を聞く！ 美羽が行かないとこの状況を説明できないでしょ？」

蘭紗が行ってもいいけど上手く説明ができるかわからないし、私が行っても『誰、お前』ってなる。なら美羽が行って状況確認、説明、協力の要請をしたほうが効率がいい」

美羽はグツと黙った。

「焦るのはわかる。でも、そういうときこそ状況を冷静にみないと思わぬ失敗をしてしまうんだ」

私の言葉に美羽はゆっくりと苦虫をかみつぶしたような顔でうなずいた。

「それじゃあ、こいで」

町の出入口である門の前で美羽に別れを告げる。蘭紗とは途中まで道が同じなのだ。

「あ、瑠璃さん」

「ん？」

「町の人の様子が少し違っていても気にしないでいいですからね。あれ全部、自律人形ですから」

「・・・・・・・・・・は？」

「だから人形なんです。私がいるときには私が操りますが、今は自律させてます」

え？ つまり、あれは全部美羽が動かしていたってこと？ 数えたわけではないから正確な人数はわからないが、千人は超えていたはずだ。

「詳しい説明は省きますが、悪意ある者が町に入ったら攻撃するようにしてあるので、華蓮様を誘拐した者が入った場合は多くの人形が倒れているのが目印になるはずですよ。蘭

紗さんを一時的とは言え、無力化する相手を自律人形で倒せるはずもありますし」

「なるほど。わかったよ」

そして美羽と別れた。

青十熊がいる山を越えることは余りにも危険過ぎた。私と蘭紗は迂回道、町と町をつなぐ道を通ることにした。勇気と蛮勇は違う。危険があると分かっているにも関わらず、そこへ飛び込むのは馬鹿のすることだ。

「って言っても、こっちだと時間がかかりすぎるのが問題なんだよなあ」

「・・・・・・・・・・？」

蘭紗が首をコテンとかしげて私を見上げてくる。それに微笑んでは、

「山道を通ったら早いけど、こっちの道だと時間がかかるなっと思っただけ」
と言った。

蘭紗はその通りだと言わんばかりにコクコクとうなずいた。

目の前に続いている道は、ただ延々と続いているだけで面白みもない。町が見えているわけでもないから余計にそうである。

「通らないといけない町は五つほどあるけど、どんな町か知ってる？」

「・・・・・・・・「フルフル」」

「知らないか。・・・・・・・・ま、行けばわかるでしょ」

しばらく道に沿って歩いてしていると晴天だった空が曇りはじめた。空気も湿気が混じりつつある。そういえば、天津姫が『鳥が低く飛んでいるときは雨が降る』って言ってたっけ。

「ってことは、一雨くるかな」

「・・・・・・・・もうすぐ降る」

「え？ あっ！」

蘭紗がそう言うと、それに呼応したかのようにポツポツと降り始めた。それはすぐに強くなる。

「雨宿り出来るって、どっかに・・・・・・・・無いし！」

見渡す限り延々と続く道しかない。そんなことをしている間にも雨足は強くなる一方。

「・・・・・・・・「クイクイ」」

蘭紗が袖を引っ張り、私の注意を引く。

「どうしたの？」

私が尋ねると蘭紗は一方向を指した。そちらに目を向ける。パツと見では何も無いように見えるが、目をこらすと木の陰に隠れるようにして館が建っていた。見落としていたのだろうか？

「あそこで雨宿りさせてもらおう」

私と蘭紗はそこへ向かって走った。

第二十一話『前の町へ』（後書き）

お読み下さりありがとうございます！

なかなか筆が進まない中、目標の『どんなに遅くとも一週間以内に更新する』だけは守ろうとした結果が今回の話です。

物語が次第に核心に近づいて来ました。

わかりにくかったらすいません！

単なる実力不足です（＜|＞）

それではまた次回、お目にかかれますよう

第二十二話『館の主』

館の前で服をしぼり、見事な細工が施された荘厳な扉を叩いた。

「すみません！ 誰かいませんか？」

しばらく待つも応答なし。再び声をかけるも結果は変わらなかった。

「どうしよう………って、あれ？ 開いてる？」

軽く押すとあっさり扉は開いた。見る限り相当な重量がありそうなのだが。

「すみません！ 雨宿りさせていたきたいのですが！」

中に呼びかけてみるが、やはり返答はない。帰ってくるのは静寂だけだった。

「……………仕方ない。少し入らせてもらおう」

雨足は次第に激しさを増し、濡れた服は身体の体温を奪っていく。このまま外にいても風邪をひくだけである。家人が留守なら、帰ってきたときに勝手に上がらせてもらったことを謝罪し、改めてお願いをしたほうがいいと判断したのだ。

「……………すげい」

中に入った私は思わず感嘆の声をもらしてしまった。少し見ただ

けでも高級品とわかる、それでいて嫌みの無い調度類の数々。白や水色のような淡い色でに統一された室内は清潔感が感じられた。埃の一つですら落ちていない。

「どこかの貴族の家とか別荘かも……………」

私と蘭紗は目の前の大きな扉をくぐると、そこは食堂だった。机の上には様々な種類の皿、グラスが並べられている。

一步踏み出すと入ってきた扉が私たちの後ろで一人でに閉まった。それどころか出入り出来そうなあらゆる扉が次々と閉まっていく。見る見るうちに密室空間が出来上がった。

奥から一人の青年が規則正しい靴音をさせながら現れた。サファイアのような青い瞳と光り輝く金髪が印象的だ。両脇には体長が二、三メートルはありそうな二匹の狼を従えている。明らかにモンスターだ。

「誰だ？」

私は龍月の柄に手をかけながら聞いた。普通の人だったならばここまででは警戒しないが、相手はモンスターを従えているような人物だ。油断は出来ない。

「人の家に勝手に上がり込んでおいていきなり喧嘩腰かい？ とんだ無頼者だね。まあいい。僕は関昂かんこう、この館の主だよ」

「何故モンスターを従えている？」

「僕の仕事さ。モンスターと言えども、生まれた頃から世話をし

ていれば、その者を親と思うだろう？

そうやって賤をして貴族に売り払うのさ。まあ、この二匹は僕のお気に入りだから売るつもりはないけどね」

「ふうん？」

話をしながら相手の様子をうかがう。こちらの呼びかけに応えず、密室にして閉じ込めた真意が知りたい。しかし、それは探るまでもなかった。

「瑠璃と言ったかな」

「……何故、私の名前を？」

龍月をいつでも抜けるように手に力を入れた。

「君はね、邪魔なんだよ。魔狼まろうと破蛇はだの二匹を使ってようやく見つけた獲物を搔かつ攫とって」

その言葉に、華蓮と出会ったときのことを思い出す。噛みちぎられたような死体。変色した死体。無惨なものだった。

華蓮は言っていた。巨大な狼と蛇に襲われたと。この世界にモンスターは存在するものの、絶対数は少ない。一月に一度会うか会わないかくらいだ。むしろ会わないほうが多い。
それを二匹同時になんてのはおかしかったのだ。

「お前も駿郁の仲間か」

「仲間だなんて恐れ多い。駿郁様は僕の主だよ」

「民に重税をかけ、貧困に喘がせていてもか？」

「力を持つものが力をふるって何が悪い？ 駿郁様は力を持つものとして当然の権利を行使しているだけだ」

関昂は私の言葉を鼻で笑った。それは元から強者として生まれた者の笑いかただった。

「お前・・・・・・・・」

怒りに身体が震える。そんな理由で多くの人間を苦しめることに我慢がならなかった。

「おお、怖い怖い。綺麗な顔が台なしだね。噛み付かれる前に僕はひとまず退散することにしよう」

関昂は指を一鳴らししてその場を立ち去った。逃がすまいとその背中を追おうとする。が、それはかなわなかった。

「つつー！」

横から強烈な殺気を当てられ床に身体を投げ出す。その数瞬あとに私の身体があった場所を瞬速の豪腕が通り過ぎていった。わずかに避けるのが遅れていれば肉塊になっていただろう。

起き上がり相手を見る。

「・・・・・・・・マジか」

それは、片目が潰れた青十熊せとくだった。

第二十二話『館の主』（後書き）

お読みくださりありがとうございます！

やはり一週間かかってしまいました（汗）

小説を書き続けるのは簡単そうで難しいですね。

さて今回は今まで張ってきた伏線（↑と自分では思ってます）を少し回収した話となっておりますがいかがでしたでしょうか？

何か気づいたりしたことがあれば感想欄までよろしくお願いします。

それではまた次話で。

第二十三話『覚醒』

龍月を抜き放ち眼前に構えた。青十熊^{せじく}を相手に気を抜けば一瞬でやられるのは先日の一件で骨身に染みている。全身、そして龍月にも神気を纏わせた。

いたずらに長く戦ってもこちらの体力が先に尽きてしまうのは目に見えている。それならば、体力を大幅に消費してでも短期決戦をしたほうがいい。それに、この状態ならば青

十熊のように堅固な身体にも傷つけることも十分可能である。二重に都合がいいのだ。

「蘭紗！」

その声を合図に私は右に、蘭紗は左に跳んだ。青十熊は蘭紗の後を追う。その隙に背後に回り、脅威である背中の棘を削ぐように振り下ろした。

しかし、思惑に反する結果となる。

「なっ！？」

驚きで目を見開いた。振り下ろされた龍月は何の手応えもなく、棘は櫛^{くし}でなで付けられるように倒れただけだったのだ。

そこで初めて理解する、背中の棘は体毛で出来ていたことに。

青十熊は私の攻撃など意に介さず、蘭紗を丸太のような豪腕で薙ぎ払った。小さな身体はあっさりと宙を舞い壁にたたきつけられた。

うつぶせになったまま起き上がる様子はない。

「蘭紗！」

青十熊は私の叫び声に緩慢な動作でこちらを向いた。私を確認すると、地響きのような唸り声をあげ、巨木ですら一撃で木片にする凶爪を連続で繰り出してきた。

私はそれを地面を転がり、ときには振るわれた腕を踏み台に跳んで避けつつける。その度に置かれていた調度の類がゴミと化していく。

上手いこと避けてはいたが、いつまでも避けられるわけではなかった。足を机に取られ転倒してしまう。

「しまっ！　がつ！？」

慌てて龍月で爪の直撃を凌ぐが衝撃は吸収しきれない。蘭紗のところまで弾き飛ばされてしまった。身体を起こそうとするが、変にひねってしまったのか足がジクジクと痛み再び倒れ込んでしまう。

ふと、蘭紗が立ち上がるのが目の端に入った。霞みのようなオーラをまとい、亡霊のように立っている。特に注意を引いたのは目だ。虚ろな、何も見ていないようなそんな目。

「蘭・・・・・・・・紗？」

蘭紗は私のことなど見えていないようで、一歩一歩踏み締めるよ

うに進む。青十熊はそれを見てたじろぐような、怯えるような様子を見せた。

もう一度声をかけようとすると、突如、蘭紗の身体が膨れ上がった。着物が引き裂け、その下から漆黒の毛があふれ出した。小さかった手にはあらゆるものを狩るための鋭い爪がはえる。しばらくして、その場に君臨したのは一匹の巨大な狼だった。

先ほど関昂が引き連れていた魔狼よりもはるかに大きい。目の前の青十熊と同等の大きさである。

蘭紗は青十熊に無音で襲い掛かった。その巨軀からは信じられないほどの速さで肉薄し、頭にその必殺の鋭い牙を突き立てる。青十熊はなす術もなかった。あれほどまでに堅かった青十熊の皮膚はやすやすと貫かれ、辺りにどす黒い血が撒き散らされる。ムワツと鉄の臭いが立ち込めた。

私はその光景をただ見ていることしか出来なかった。しばらくして、その猟奇的行為が終わりを告げる。とどめと言わんばかりに、青十熊の首をかみちぎったのだ。首をなくした胴体が地面を揺らしながら床に崩れ落ちる。

確実に仕留めたことを見届けた蘭紗の身体は見る見るうちに縮んでいった。太かった四肢は細くなり、鋭かった牙も通常の犬歯と大して変わらない長さに戻る。あつという間に元の少女の姿に戻った。

「蘭紗！ 大丈夫か！？」

元の姿に戻った蘭紗が力尽きたのか倒れそうになるのを私は慌てて受け止めようとした。が、痛めた足では力が入らず一緒に倒れこんでしまう。

「・・・・・・・・うう」

私の腕の中で蘭紗がうめき声をあげる。

「大丈夫？」

目をうつすらと開けた蘭紗は言った。

「・・・・・・・・お腹空いた」

一瞬呆気にとられるが、蘭紗らしさにプツと吹き出す。

「そっかそっか。じゃあ、次の町に着いたら何か食べよう」

弱々しく首を縦に振る蘭紗。その様子に微笑んでから立ち上がる。足は痛むことには痛むが少し我慢すれば歩けないこともなかった。

閉じられた頑丈な扉を破壊する。外に出ると雨はすでにあがっていて、空には数多の星が瞬いていた。

「さあ、行こう」

蘭紗に向かって手を伸ばす。蘭紗はその手をきゅっと握り返してきた。

第二十三話『覚醒』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

さて、今回の話で最初の方で書いた蘭紗の伏線（↑伏線になってたと信じたい）が明らかとなりました。
どこが伏線だよ？とお思いになった方。すいません、自分の實力不足です。

それではまた次話で。

第二十四話『思い出語り』

あの館では到底休める気がしなかった。畏がまだ仕掛けられている可能性もあったし、なによりも関昂かんこうの手の中にいる気になつてしまふ。

私と蘭紗は星明かりだけを頼りに夜道を歩いていった。この世界には月が存在しない。しかし元の世界とは違い、それだけでも十分過ぎるほど明るかった。

「そろそろ休める場所が見つからないとまずいんだけどな……」

痛めた足のためにもゆつくりと出来るところを見つけておきたい。支えてくれている蘭紗にもずいぶんと負担をかけてしまっているだろう。しかし、無情にも左右には草原が広がるばかりで休めそうな場所は見当たらなかった。せいぜいがポツポツと生えている大木の下くらいだ。

「蘭紗、あの木の下で休もう」

「………」

私は近くの木を指して言う。それには雨が再び降り出してもしめる程度には葉が繁っていた。

「ふう」

背中を木に預けて一息つく。色々なことがありすぎた。今日あつ

た出来事が脳裏を目まぐるしく駆け巡る。豪雨、青十熊^{せとく}、蘭紗の本性。

「……………ねえ、蘭紗」

そこらの枯れて乾燥している葉や枝を集めて、たき火の準備をしている蘭紗に声をかける。蘭紗は顔だけ私に向けた。手元では火打ち石をカチカチと鳴らしている。

「蘭紗って狼なの？」

私がそう言うのと同時に薪に火が移り辺りを明るくした。木の影で隠れていた蘭紗の顔が見えるようになる。その顔はいつもの無表情だった。

「……………神狼^{しんろう}と呼ばれる種族の一員。気を失ったり、沢山の血を見ると本性が出る」

と言う。盗賊の一件では本性が出かかったというわけだ。

「……………だからわかる。瑠璃も人じゃない。匂いが人じゃない」

「やっぱり分かっちゃうか」

私は苦笑いを浮かべた。

「そうだね、蘭紗が教えてくれたんだから私も教えないと公平じゃないか」

私は恐らく私と天津姫しか知らないであろう話をするためと口を開いた。

私の親は世間で言う化け狐だ。正式な名前は妖狐こじゆという。人を化かしたり、貯蔵してあるものを盗んだり、まあ、悪行三昧をしていた。

もちろん人は怒る。それでも私たち妖狐は自分達の行いを改めようとはしなかった。モンスターが人を襲い食べるのと同じように、それが妖狐にとって当然のことだったからね。

しばらくして、私の親は人の畏にかかり捕らえられてしまった。人だって物を盗まれたりされてはかなわない。自分達の手で討伐しようとしたんだ。悪夢のようだったよ。知り合いや兄弟、姉妹が次から次へとなくなっていく。それは私の親も例外ではなかった。

孤独の身となった私は復讐のために妖力を鍛えに鍛えた。今思えば単なる逆恨みだけだね。明らかに悪いのは私たち側だ。

百数十年の時が経ち、生まれた時には二つだった尾が九つまでに分かれた頃に私は思った。今ならどんな相手でも勝てると。事実手を出してきた奴らは皆殺しにしていた。

そして九尾^{きゅうび}として復讐のために人里に下りたんだ。得意の狐火で家を焼き払い、牙で人を噛み殺しと仲間を一匹一匹思い出しながら殺していった。

百近くの村を破壊し、三十ほどの討伐隊を蹴散らしたくらいに私は敗れることとなった。今の私の主であり師匠でもある天津姫に。

その当時、天津姫はある村の守護神をしていた。その頃から天津姫の力は強く、あらゆる災害、山賊、飢饉を退けたりと相当なものだったらしい。

私はその噂を聞いても何とも思わなかった。自分の力に絶対の自信を持っていたからだ。いつも通りに狐火を放ち、その村を襲った。

今となつては言い訳も出来ないとわかる。それほどまでに天津姫の力は圧倒的だった。巧みな剣技に、神速とも言える速さ。身体のかなしは無駄が無く、どんな攻撃でも避けてしまう。さらには最悪の局面でも解決策を見出だす超絶的な頭の回転。

どんな策を練ってもことごとく看破されてね、結果は惨敗。一回も攻撃を当てられなかったよ。

そのあとは三日三晩にわたって正座をさせられて説教されたよ。少しでも姿勢を崩したりすれば定規で叩かれて、あれはきつかった。それからは天津姫の監視の下、生活を送って更正させられたんだ。

そんな生活が数十年経ったころ、天津姫が『神様になる気はある？』って聞いてきた。私の妖力なら十分過ぎるほどだったらしい。私は今までの贖罪も含め、二つ返事で承諾した。狐火で焼き払った畑や田んぼを守りたいと思ったんだ。

「とまあ、こんな感じ。私も相当な悪だったわけ」

今でも滅ぼしてしまった村の人々に対する墓参りは欠かしていない。単なる自己満足に過ぎないだろうが、それでもやらすにはいられないのだ。

「蘭紗？」

話終わったが何の反応も見せない蘭紗をのぞきこむ。

「寝ちゃったか」

普段の無表情ではなく、あどけない顔で船をこいでいた。自分の荷物から上着を取り出し蘭紗にかけてやる。

「お休み、蘭紗」

そのまま静かに夜は更けていった。

第二十四話『思い出語り』（後書き）

読んでくださりありがとうございます！

うまい具合に早く書き上げることが出来ました。

今回は過去話ですね。

瑠璃が自分の身を省みずに人を助ける理由が明かされました。
いやあ、昔の瑠璃は悪ですね（汗）

それではまた次話で。

第二十五話『雪月花』

翌日。抜けるような青空の下、大きく伸びをする。

「ん〜、いい天気」

足に神気を集中的に回しながら休んだため、軽い違和感が残るものの痛みはなくなっていた。代わりに身体は疲労で少しだるい。

「……………お腹空いた」

伸びをする私の横で蘭紗はお腹に手を当てて訴えてきた。

「次の町に着いたら美味しいもの食べていいから、今はこれで我慢して」

そう言つて干し肉と乾燥させた果物を渡す。干し肉は私の分もなので若干割り増しだ。

「……………「コク」」

黙つて頷きモソモソと食べはじめる蘭紗。口一杯に頬張るその姿は狼にも関わらず小動物を彷彿とさせた。

簡単な朝食を終わらせ行路を再開する。といっても、特に何かがあるわけではない。延々と続く道を歩くだけだ。

無言で歩き続け、日が頂点よりわずかに傾いた頃、ようやく最初の町が見えた。

「やつと見えた」

それほど大きい町ではなさそうだ。村よりも少し大きい、そんな感じである。

「……………ご飯食べれる？」

「満腹になるまで食べていいよ」

「……………〔コク〕」

荷物を担ぎ直して意気揚々と歩を進めた。

天気とは裏腹にその町はずいぶんと寂れていた。というよりも、捨て去られていた。誰ひとりとしていない。あるとすれば、餓死したであろう家畜の骨が点々と散らばっているのと、触れれば倒壊してしまいそうな家屋だけだ。

「……………誰もいない」

「みただね。取り合えず中に入ってみよう。ここでじっとしててもしょうがないし」

私と蘭紗は半壊した門をくぐり町へと入った。

「静かだ……………」

町は静寂に包まれていた。人の声はおろか、動物の鳴き声すらしない。静寂を乱すのは風の音と私たちの歩く音だけだった。

「ん？」

しばらく歩いているとあるものが目に入った。半壊した家屋の壁についた人の手による引つ掻き傷だ。ところどころ血が付着したそれは無数にある。埃はたまっておらず、新しい物だということがわかる。

「何でこんなところに引つ掻き傷が？」

「……………瑠璃」

蘭紗の呼ぶ声に顔をあげる。通りの向こう側からユラユラと揺れながら歩いて来る一団がいた。

「町の住民？」

「……………腐った臭いがする」

「腐った？」

蘭紗の言葉はすぐに明らかになった。その一団とは。

「ゾンビー!？」

腐乱した肉をまとった人々だった。ところどころ白い骨が見えるのが生々しい。ご丁寧に両手を前に出しながら歩いて来る。数は優に五百は越えているだろう。通りはゾンビで埋め尽くされていた。

「・・・・・・・・・・ゾンビ？」

「えっとね、歩き回る死者って考えて・・・・・・・・・・じゃなくて！逃げるよ！」

こんな数とまともにやる気にはなれない。来た道を取って返そうとする。しかし、それは叶わなかった。後ろからも似た一団が来ていたのだ。といってもこっちは犬のゾンビだが。時折、普通よりも数倍は大きい三頭犬や双頭犬のゾンビまで混ざっている。

「・・・・・・・・・・うわぁ」

前門のゾンビ、後門のゾンビ犬。ついでに言えば脇道には何やら巨大な百足が這っているので無理である。倒壊した家屋よりも遥かに大きい。明らかにモンスターだ。

「蘭紗。ちょっと、しゃがんで」

「・・・・・・・・・・「コク」」

蘭紗は私の言う通りにすぐにしゃがんだ。私は龍月を眼前に構え、神気を流す。これから使う技は正直あまり使いたくない技だ。

『雪月花』。自分が傷を負う代わりに、潜在能力を引き出す技。『雪』が一番軽く、脱臼程度で済むが、『花』ともなると内臓に損傷を負ってしまう。以前に使った時は肺が潰れ死にかけた。

次に身体の奥底、核とも言えるところに意識を集中させる。すると身体がほのかに暖かな光に包まれ軽くなった気がした。それではないながら、頭は冷たく冴え渡っていく。

「第一の舞い『雪』」

次の瞬間、数多のゾンビたちが身体をバラバラにしながら宙へと舞った。

第二十五話『雪月花』（後書き）

お読みくださりありがとうございます！

今回は廃町での話ですね。

最初期に天津姫が治安が最悪と言った理由が次第に明らかになってきます。

それではまた次話で。

第二十六話『生ける屍と巨大百足』

瑠璃が縦横無尽に獅子奮迅の戦いをしている頃から少し遡って。

「離しなさいよ、この無礼者！」

暗い森の中、華蓮は目を釣り上げて男たちに怒鳴った。といっても、身体を縄でがんじがらめにされているためそれしか出来ないのだが。華音も同様に縄で拘束されている。

「うるさい女だな！」

華蓮の頬を別の男が殴った。殴られた華蓮はそれでも怯えた様子も見せずにキツと睨みつけ返す。

「態度を改めれば許してやろうと思つてたけどやめたわ。華音！あいつらを燃やし尽くしなさい！」

華蓮の命令に応じて華音は口を開いた。その喉奥で紅い炎がチリチリと集まっていく。

「逃げろ！」

華蓮と華音を抱えている男以外の九人がそれぞれ逃げようとするが、少し遅かった。華音の口から放たれる灼熱の獄炎。それは男たちを包み込んだ。男たちのすさまじい絶叫が森の静寂を乱す。

男たちの命はかろうじて助かっているものの、酷い火傷にうめくことしか出来ずにいた。

「この野郎！」

「私は女よ！」

殴ろうとした男の頭に強烈な頭突きをくらわせる華蓮。男は脳震盪でもおこしたのか、白目になり地面に倒れ伏せた。華蓮は華蓮で涙目で頭を押さえている。痛かったようだ。

「華音。縄を噛みちぎりなさい」

華音はまず自分の縄を噛み切ってから、華蓮を拘束していた縄を噛みちぎった。身体にまとわり付く縄を放り投げて立ち上がる華蓮。

「まったく。本当なら死刑にしてもいいのよ？」

転がった男たちは今にも死にそうで、このまま放って置かれたら獣、あるいはモンスターの餌食になるのは目に見えている。事実に死刑同然だ。

華蓮と華音は転がった自分を誘拐した男たちを一瞥して、その場を走り去った。

そして時は戻ってゾンビの大群との戦い。

私の『雪月花』の第一の舞い『雪』により打ち上げられた数多のゾンビが宙をうめつくす。天気予報なら晴れ時々ゾンビといったところだろうか。腐敗した身体の一部がビシャビシャと嫌な音をたてながら降りそそぐ。

「はっ！」

一振り。後ろから襲いかかろうとしていたゾンビ犬が上下に分かれながら吹き飛ぶ。その余波で後続も同様に吹き飛んだ。

端から見てもその光景は凄惨だったろう。飛び交う身体の一部。それでもバラバラになった身体を踏み越え立ち向かうゾンビの大群。死体から流れ出る体液。

『雪』の舞いをしている私にとっては時の止まった中で人形を破壊しているようなものだ。身体能力、特に速さに特化するのが『雪』である。天津姫によると、上手く使えば――

人で三千は倒せるらしい。私はそれを神気で補っている。

「おらー！」

鋭い突きで腹部に風穴を空ける。貫かれたゾンビたちは地面に腐った内臓をぶちまけながら倒れた。そのまま切っ先を返し、巨大百足に切り掛かる。

ゾンビとは異なり堅殻におおわれているため一撃で屠ることは出来なさそうだ。代わりに手数を多くして仕留めることにする。しかし、思った以上に固いようで弾かれてしまう。

百足が怒ったように頭を持ち上げた。そしてギィギィと奇妙な鳴き声を上げ、口から液体を吐き出す。横っ飛びにそれを避けると、私がいた場所は紫色の煙を出しながら溶けていった。

「溶解液か」

相当に強烈なようだ。これにあたったら終わりである。だが、

「当たらなければいいというもの!」

『雪』の舞いをしている私にはそうそう追いつけるものはいないと自負している。それは、このロンデステルテンの世界でも一緒だ。追いつけるとしたら天津姫、あるいはそれ以上に力のある者だけだ。

持ち前の速さで切り付け続ける。ただし、それは同じ箇所をだ。雨垂れが数百年かければ岩をも穿つうがのと同じ考えである。

はたしてそれは正しいようで繰り返すこと数十太刀目、堅殻に放射状のヒビが入る。さらに数度、斬撃を与えるとピシッと音がして

割れた。中から柔らかそうな肉の部分が現れる。

「終わりだ！」

背中に乗り思い切り突き刺した。巨大百足はギイイイイイと耳をつんざくような断末魔をあげ、地面を震わせながら倒れた。そのまま動く様子はない。

「ふう」

地面に降り、袖で顔に付着した体液を拭う。服はもうグシャグシヤになっていた。乾いて変色した血、旅をする中でついた旅塵、今の戦いでゾンビと百足の体液と肉片。正直言って気持ち悪い。

「まだ着替えあつたかなっ！？」

身体から嫌な音が聞こえた。『雪月花』のフィードバックが来たようだ。利き腕である左の肘間接あたりから力が入らない。というより動かない。無理に動かそうとすると激痛が走る。どうやら脱臼したようだった。

痛みを懸命に堪え関節をもとに戻す。切られたり、殴られたり、焼かれたりと外的要因の痛みには慣れているが内的痛みは何百年経っても慣れない。もっと上手く力を使えばフィードバックを抑えられるらしいのだが……。

はめた関節を軽く動かし問題がないか確かめる。違和感もないし大丈夫なようだった。

「蘭紗、私の着替えてまだある？」

私の問いに蘭紗は首を横に振る。

「じゃあ、蘭紗の貸して」

「……………」

蘭紗は荷物の中から自分の着替えを取り出し渡してくれた。私はその場で手早く服を着替えた。蘭紗の服は小さく丹田の辺りが出てしまったが、まあ許容範囲内だろう。脱いだ服を適当に丸め荷物に放りこむ。それを肩にかけ、

「先に行こう」

町を後にした。

「駿郁様^{しゅんいく}。移送中に華王朝の娘を取り逃がしたようです」

そこは薄暗い部屋だった。中心には人骨の玉座が鎮座している。それに一人の男が座っていた。現国王の駿郁である。その前にひざまずく別の男は関昂^{かんこう}。

「町の方はどうなった？」

「町人は殺してから上手くモンスターの生き血を飲ませ生ける屍とすることは出来ました。が、瑠璃に全滅させられました」

その報告に片眉を上げる駿郁。しかし新たな策を思いついたのかニヤリと笑った。手招きし関昂に耳打ちをする。

「わかりました。次こそは」

第二十六話『生ける屍と巨大百足』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

今回は町であったこととその裏で画策されたこと。

そして、華蓮が地味に脱出をしていることを書きました。
駿郁の思惑とは？

それではまた次話で。

第二十七話『嵐の前の静けさ』

「えっと、次の町は」

「・・・・・・・・町じゃなくて村」

私たちはすぐに奇妙な町を出て再び次の村までの行路を歩いていった。日は傾き夕方にさしかかっている。結局、ロクな休息も取れずに旅を続けなくてはなくなってしまうた。

「村？」

「・・・・・・・・大きく見えるけど小さい村が密集してるだけ」

「そうなんだ」

延々と広がる草原を二つに分けるかのような道を歩き、日がその草原の向こう側に隠れようかという頃に私たちは足を止めた。早めに休息を取るためだ。場所は例によって巨木の下である。

「ふう」

木の幹に背中を預けて一息つく。首を曲げるとポキポキと音がした。歩き通しもあって足が怠い。

「・・・・・・・・ご飯は？」

「悪いけど今日も干した肉と果物で我慢して？」

「・・・・・・・・〔コク〕」

荷物から食料を出し蘭紗に渡す。こんなに粗末でも顔をパアッとほころばせ、蘭紗は肉を口いっぱい頬張った。荷物をのぞくと食料は残りがわずかとなっていた。ギリギリまで節約しても五日が良いいところかもしれない。

「次の村で補給出来るといいけど・・・・・・・・」

明くる日の昼前、私たちは目的地だった村に到着した。

「へえ、活気があるね」

「・・・・・・・・村同士の交流があるから」

市場は活気にあふれ、人の行き交いが激しかった。油断していると蘭紗とすぐに離れ離れになってしまいそうだ。人の頭が見えるだけで他は何も見えない。ひょいと蘭紗を持ち上げ肩車をした。

「蘭紗、宿屋がどこに見えない？」

「・・・・・・・・真っ直ぐ行くと赤色の屋根の建物がある」

人の流れに従って真っ直ぐに進む。すると蘭紗の言っていた建物

が右手に見えてきた。

「あれ？」

「・・・・・・・・・・〔コク〕」

私は上手く流れから抜けて、建物の前に出る。宿屋と看板に書かれ、入口のわきに料金表があった。

「・・・・・・・・・・よし、別の所を探そう」

料金が異様なほど高かった。前回の五千ガルドではないがそれに近い。再び人の波に戻る。しばらくウロウロと探してみるものの村の中にある宿屋は先ほどの一件しかなかった。別の村も回ってみるものの、同様に、もう結託してるのかと聞きたくなるほどに高かった。

「どうしよつか？」

「・・・・・・・・・・〔フルフル〕」

首を横に振ってわからないと意思表示する蘭紗。このままでは村に着いたにもかかわらず野宿することになってしまいそうだ。

「そのの二人！」

途方に暮れている私たちは後ろからかけられた声に振り返る。そこにいたのは鎧を身につけた青年だった。その手には正規兵に支給される槍。恐らくは、この村の警備兵だろう。

「私たちですか？」

「間違っていたらすみません。もしや瑠璃さんと蘭紗さんですか？」

「そうですが……何か？」

「私はこの村の警備兵です。劉さんから連絡がありまして、可能な限り瑠璃さんたちに協力をしとろと」

「はあ」

私たちとしては曖昧にうなずくしかない。何で今頃になって劉仙がという思いもある。

「どうぞこちらへ」

しかし答えが出る前に青年に先導され、誘^{いざな}われるままに私と蘭紗は後について行った。

着いたのは村外れにある一つの大きな建物だった。私が寝泊まりしていた警備兵用の宿舎に似ている。というかそのものだった。

「こちらです。知ってはいりますが警備兵用の宿舎です。」

本日はこちらにお泊りください。必要になるでしょう物資はありませんか？ あれば後から持って来させますが」

矢継ぎ早に言われたことに、私は厚かましいかもしれない思いつつも取り合えずと、当面の食料と路銀を頼んだ。頼むだけならタダだし、無理なら無理と先方も言うはずだろう。しかし青年はあっさりとそれを了承する。

「それではこの部屋をお使いください。用があれば一階にいる者におっしゃって頂ければ大丈夫ですので」

ある部屋の前まで案内すると青年は一礼をしてから去った。私と蘭紗は案内されたその一室に入る。部屋の造りは机とベッド、箆笥が二つずつ置いてあるだけの簡素なものだった。私が使っていたものとさして変わりはなかった。

「運が良かったのかな？」

ベッドに腰をかけて一息つく。怪しいところはあるものの、宿代わりになる場所が提供されたのは幸運だったのかもしれない。ロクに休みを取らずに旅を続けていたせいで身体のアちこちが筋肉痛になっている。この村に着くまでにも魔狼や山賊のような小物の相手をしていたせいだ。もし、あのまま宿が取れずに野宿をしていたら近いうちに限界がきていたのは確実だ。

「まあ、使ってもいいと言っていたことだし言葉に甘えさせてもらおう」

気を研ぎ澄ませつつも、身体を休めるためにベッドに寝転んだ。久々のその感触に急激な眠気が襲う。まぶたがシャッターを閉じる

かのようにナリていった。

第二十七話『嵐の前の静けさ』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

今回はどうだったでしょうか？

再びスランプになり、何度も書き直すハメに。

なるべく変にならないように気を付けはしましたが、もし気になる点がございましたら感想欄、あるいはメッセージをお送りください。あ、もちろん普通の感想もお待ちしております。励みになりますので。

つぎはもう少し早く書きあがるといいなあ。

それではまた次話に。

第二十八話『逃走そして邂逅』

ふと目を覚ます。廊下の方から忍び足で誰かが近づいて来る気配がした。隠し切れていない殺気をヒシヒシ感じる。

「十人が・・・・・・・・」

隣を見ると蘭紗も気がついたらしくすでに起きていた。アイコンタクトでお互いに音を立てずに扉の前に移動する。私は龍月を、そして蘭紗はナイフをそれぞれ構えた。案の定、扉の前で気配が止まる。

ガシヤアアン。

窓が突然割れる音がした。驚き、そちらに注意を向ける。

「な!？」

割れた窓から入ってくるわ入ってくるわ、それぞれに得物を持った村人たちと警備兵。先頭は昼間の青年だ。割れる音を合図としたのだろう、扉の方からも十人の男が入って来た。あっという間に囲まれてしまう。

「瑠璃と蘭紗。国家反逆の罪で拘束させてもらっ」

青年が堂々とした態度で言う。

「国家反逆？」

「しらばつくれるな！ 都からお前の手配書が回ってきた。駿王朝を転覆させる計画をしていたのだろう？」

「違う！ 私はただ……………」

そこでふと思う。ただ、何なのだろう？

この世界に来て、華蓮と出会って、一緒に旅をして、村や町の現状を見て。

私は何を思った？ 何を考えた？

「私は……………困っている人を助けたい。一人でもその苦しみから解放する。それが私のしたいことだ」

「そのためなら王朝を敵に回すと？」

「今の王朝なんか上っ面だけだ。力を持つものが弱き者を虐げる、邪神の復活のために誘拐までする。そんな腐った王朝に組するつもりは毛頭ない！」

痛烈な批判。十分に国家反逆の意思を汲み取られる言葉。しかし、私には微塵の後悔はない。正義をねじまげてまで生きようとは思わない。

「言いたいことはわかった。だが、それでも王朝に仕える者として見過ごすことは出来ない。瑠璃と蘭紗を逮捕する」

その言葉に囲んでいた人々が一斉に飛び掛かってきた。

「蘭紗！」

「……………」

私たちはそれぞれの武器を納め、徒手空拳で突破をすることにす
る。この村人たちに罪はない。むやみな殺生は私の信義に反すると
ころだ。それは蘭紗もわかっているのだろっ、素手で次々と無力化
していった。

相手の槍を奪って数人の足を払う。その上を飛び越え、目の前に
いた巨体の男を背負い投げをする。村人と警備兵が悲鳴を上げて押
し潰された。その脇をすり抜け窓へと向かう。

窓の外には多くの人々がたむろっていた。下が駄目なら上だ。蘭紗、
私の順で逆上がり要領で屋根上に移る。そのまま怪盗よろしく、
屋根から屋根へと跳び移って逃走を図った。

さすがについて来ることは出来ないようで、下の通路を使って何
事かを叫びながら追ってくる。さして大きい村ではない。このまま
では追い詰められるのも時間の問題だろう。

跳び移れそうな建物もなくなり、囲まれる前に路地裏へと飛び降
りる。なるべく細い道を選んで、隠れるように走った。

しかし追跡側の数が余りにも多すぎる。上手いこと目を避けたつ
もりでも見つかってしまった。

「やばっ！」

目の前にはそびえ立つ壁。他に通れそうなところもなく、壁は余りにも高いため乗り越えられそうになかった。

遠くから「こっちに逃げ込んだぞ！」と叫んでいるのが聞こえた。続いてバタバタと複数の足音。

「どこか隠れる場所は……うおっ!？」

隙間がないかグルリと見回していると、後ろから誰かに急に手を引かれた。バランスを崩し倒れたところでそのまま引きずり込まれる。私の服の裾をつかんでいた蘭紗も同様にされるがままだに引きずり込まれた。

「な、何？」

「静かに!」

鋭い声。見上げると若い男だった。歳の頃は二十代前半くらい。私と蘭紗の口を手でふさぎ、扉の向こう側に意識を集中させていた。

「いたか!？」

「いや、いない」

「近くの家を調べよう」

「そうだな」

手当たり次第に家の扉を叩く音がし始めた。その音が近づいてく

る。

「その物置に入ってて」

若い男は部屋の一角を指した。一瞬躊躇するものの背に腹は代えられない。少し狭かったが何とか入ることができた。私が物置の扉が閉めるのと家の扉が開くのはほとんど同時だった。

「ここに二人組の女が来なかったか？」

「いえ、来てませんけど……何かあったんですか？」

「国家反逆の疑いがある。それがこの村に来たので捕らえようとしたんだが逃げられた。今はその追跡中だ」

その後、一言二言ほど話をしてから扉の閉まる音がした。

「もう出てきていいよ」

私と蘭紗は辺りをうかがいながらそろそろと出てきた。気配を探ってみたが大丈夫なようだ。

「危ないところをありがとうございます。えっと……」

「驚羽しゅうは」

「驚羽さん、ありがとうございます。でも……」

「俺も駿郁を倒したいから、だよ」

私の疑問に先回りして答える鷺羽。

「君たちのことは聞き及んでいる。仁義に厚いと名高い劉仙さんの村にいた瑠璃さんと蘭紗さんだろ？ 盗賊の大群を二人で追い返した」

「はい」

「俺達は暴虐の限りを尽くす駿郁が許せない。重税に民を喘がせ、兵を使つて村や町を破壊し、人体実験までするやつを。やつを倒すための力も集まってきた。君たちの仲間と君たちが加わってくれば勝てると思うのだがどうだろう？」

嘘を言っているようには見えなかった。頼んでいる姿は真摯そのものだ。鷺羽の瞳に邪な濁りみじみじもない。

「……わかりました。取り合えず美羽という女性に連絡を取って頂けますか？ 私は組織に属しているわけではないので。ここの町に向かっているはずですよ」

地図を取りだし、美羽が行くと告げていた村を示す。

「組織の者をすぐに行かせよう」

鷺羽は紙に何事かを書き付け、籠の中にいた鳥の足に結び付けた。そして、その鳥を窓から放つ。

「今日はこっちの寝室で休んでくれ。物音はなるべく立てないよ。うに。まあ、君たちなら心配ないだろうが」

「何から何までありがとございます」

「駿郁を倒すためなら安いものだ」

鷺羽の言葉に甘え隣の部屋で休ませてもらうことにする。窓もない、簡素なベッドが一つ置いてあるだけの部屋だった。蘭紗とともに身体を横たえ、深い息を一つつく。

明らかかな起るであろう波乱の予兆。その中で自分は何をすべきなのか？ 頭の中を様々な考えが駆け巡らせながら私は眠りについた。

第二十八話『逃走そして邂逅』（後書き）

お読みくださりありがとうございます！

前回は一週間。今回は六日間。何とか一日短縮して更新することができました。

約束を守れて一安心ですw

今回は瑠璃と蘭紗に仲間ができました。

正義に燃える鷺羽とこれから頑張ってもらいます。

感想や批評、指摘、なんでもかまいません。何かあれば感想欄へどうぞ。

それではまた一週間以内に次話で。

第二十九話『再会』

「ん・・・・・・・・うん」

目を覚ますと辺りは暗かった。燭台の火はすでに消えていて、扉の隙間からわずかに入ってくる明かりが唯一のたよりである。隣の部屋では鷺羽が朝食の支度をしていた。

「おはようございます、鷺羽さん」

「おはよう。もうすぐで朝食が出来るから、それを食べた後に話をしよう。身体を拭く布ならその筆筭にあるからどれでも好きなのを取ってくれ」

「わかりました」

数枚の濡らした布を持って、隣の部屋に戻り蘭紗を起こす。蘭紗は寝ぼけ眼だったが、朝食の匂いにつられて目をこすりながら起き上がった。

「おはよう。良く眠れた？」

「・・・・・・・・〔コク〕」

「身体を拭くからちよつと服を脱いで」

蘭紗は躊躇いなくパツパと全てを脱ぎ散らかし全裸になった。埃と汗で薄く汚れた箇所を丁寧拭う。

「サッパリした？」

「……………」

「じゃあ隣に先に行つといて。ご飯が出来てるはずだから」

「ご飯という言葉に目を輝かせた蘭紗は全裸のまま行こうとした。慌ててその腕をつかむ。」

「服を着てからね？」

とまあ、朝からちよつとドタバタしたが、今は落ち着いて、私と蘭紗は鷺羽と向かい合つて椅子に着いていた。

「まずこれを見てくれ」

そう言つて鷺羽は一枚の紙を取り出した。細かく数字や、文字が書き連ねてある。

「これは？」

「駿郁の軍勢と俺達の戦力差だ」

「五十倍もの差があるように見えるのですが？」

紙に書いてあるのは駿郁軍が十万人。対する私たちは二千人。どう足掻いても勝てるはずはない。戦いにおいて勝つためには、相手より多くの数をそろえるのが基本だ。

「小部隊で敵軍を攪乱する役割と、少数精鋭で城に侵入する二つに分けるつもりだ。城がここだから、その三方面から仕掛けるんだ」

鷲羽はそう言って地図の東、南、北の順に指した。良くある陽動作戦だ。

「西はどうするんですか？」

「そこは切り立った崖になっているから必要ない。それに、城に侵入する経路だしな」

「実際に行くのは誰です？」

「返信がきていないから具体的には言えないが、取り合えずは瑠璃さん、蘭紗さん、劉仙さん、美羽さん、俺。それと俺の副官をしている趙星ていせいの六人を予定している。っと、丁度返事が来たようだ」

窓から昨晚放った鳥が入って来た。その足には紙が結ばれている。この世界では送るときは右足、返すときは左足にそれぞれ結ぶと決まっているのだ。今回はきちんと左足に結ばれていた。

「よし！ 協力してくれるそうだ」

しばらく黙読していた鷲羽はそう言った。文面から上げたその顔

は若干嬉しそうだ。

「それじゃあ、計画はだいぶ進みそうですね」

「ああ！ それに、美羽さんたちは総勢三千もいるらしい。これなら成功率がずいぶんと上がるはずだ」

明後日には美羽と劉仙がここに来てくれるらしい。そのために、出来る限り計画を細かく詰めることにした。私の経験、知る知識を総動員する。

「それじゃあ、こっちの部隊が挟まれて動けなくなってしまいます。だから右の部隊をこちらに迂回させて城に対して正面に回すと不意をつけるはずです。そうすれば撤退戦も支障なく出来ます」

「だが、ここを撃破すれば他の部隊がかなり楽になるはずだ。出来るなら潰したい。ここに戦力の三分の二を投入すれば出来るしな」

「私たちの目的は駿郁だけを潰すことのはずです。多くの死者を出すことではありません。あくまでも陽動をしてみらうという話だったでしょう！？」

その後の議論は夜まで続いた。鷺羽の意見を私の経験で修正していくという形でだ。蘭紗はというと、暇そうにしながらも、たまに鋭いことを言って助言をくれていた。

そして少しの時間が経つ。私の目の前には美羽と劉仙が立っていた。

「久しぶり、美羽」

「お久しぶりですな瑠璃さん。お変わりないようで」

美羽がいつもの含みがあるような微笑みを浮かべながら言う。

「劉仙も」

「元気そうだなによりだ。蘭紗も少し大きくなったな」

劉仙は笑いながら蘭紗の頭をなでた。

「韓星はどうしたの？」

「韓星には手勢をまとめてもらっている。小分けにしてこちらに來させるから、一週間くらいはかかるかもしれないな。北の村も度重なるモンスターの襲撃で少々人員は減っていたが、早急にこちらに來させている」

「モンスターの襲撃……」

「なに、作戦に影響は出ない程度だ」

劉仙はそう言って鷺羽の所に行ってしまった。美羽も劉仙につい

て行ってしまう。そんな二人を見ながら私は何となく嫌な予感がしていた。

第二十九話『再会』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

今回は今までの登場人物が協力関係を結びました。

駿郁という強大な敵に立ち向かうために策も練っています。

これらの策が上手く機能するのか？

伏線を回収しつつ話を進めていきます。

感想、批評、批判、アドバイス等よろしければお願いします（否定はご遠慮願います）。

それではまた次話で。

第三十話『そして時は満ちていく』

「それじゃあ、これで決定ですね」

作戦会議はあれから一週間近く続けられ、そしてついに今日まとまった。おおまかな方針は決めていたので、細かいところを詰めていたのだ。

「そう言えば、華蓮の足取りはつかめました？」

鷲羽たちの情報網は広く、華蓮がすでに独力で脱出をしていることがわかっていた。しかし、その後の行方が全くわからない。モンスターに殺されたか、どこかの村に逗留しているのか、私たちを探して旅をしているのか。搜索には小部隊を交代で当たらせている。

「いや、まだわかっていない。是非とも旗揚げまでには見つけて差し上げたいものだ」

何故かはわからないが、この世界では貴族や王族はほぼ無条件で尊敬されるらしい。良き王であればそれはなおさらだ。

華王朝は官吏の取り締まりを厳しくし、税金や兵役を減らしていたため民からは人気の高い王朝だったらしい。血族の華蓮がいれば仲間になってくれる者も出てくれるかもしれないそうだ。

「旗揚げは三日後ですよ。部隊も集結し終わってますし」

美羽が確認するように尋ねる。

「話し合いで決めた通りだ。韓星^{かんせい}と趙星^{ちようせい}に小部隊の指揮をしてもらう。城に潜入するのは瑠璃さん、蘭紗さん、劉仙さん、美羽さん、そして俺の五人だ。華蓮さまを搜索している部隊が戻ってきて一日の休息を入れたら出撃だ」

「華蓮さまの搜索はそれまでどうするんです?」

「大丈夫だ。五名ほどそのための人員は抜いてある。鷺羽にも同意を得ている」

劉仙が美羽の疑問に答えた。さすがと言うか何と言うか気配りが良い。人数的にも丁度いい感じだ。

「わかりました。それじゃあ、三日後にここの平野で落ち合いましょう」

美羽と劉仙、韓星、趙星がそれぞれに挨拶をして部屋から出て行った。

その頃、華蓮は……………。

「うゝん、美味しい!」

金にあかせて豪華な料理を頼張っていた。隣では華音も漫画に出

てくるような肉の塊をかじっている。

逃れて以来、華蓮は華音を引き連れ各地域を旅していた。もちろん華音に乗ってだ。華音の大きさは今や二メートル強ある。護衛としてはこれ以上ないほど心強いだろう。

「瑠璃たちは何をしてるのかしら？　こんなに長い間、主を見つけて出せないなんて家臣として失格よね」

華音も同意するようにうなづく。

「まあ、いいわ。これを食べたら情報集めをしましょう。きっと見つけられるはずだわ」

華蓮は残った物を口に放り込み、席を立ち上がる。

「勘定はここに置いておくわ」

そう言って華蓮は店を出た。華音は肉の塊を口にくわえて華蓮の後を追う。

「さてと。今までの情報によると、この付近にいないのは確かなのよね。私が逃げだしたのはここだから今はこの村のはず。……・……もう！　村や町に名前がついてないのが腹立つわね！」

この世界では民の移転は自由とされている。そのため村や町が際限なく増えるので、村や町には名前をつけないという慣習があるのだ。だから地図には位置は描かれていても、それがどういった所なのかは一切わからないのだ。

「とにかく、ここに向かってから足取りを追えばいいわね。華音
！」

華蓮の掛け声に華音は頭を低くした。華蓮はその背中に飛び乗る。

「西に向かって飛びなさい！」

華音は少し野太くなった鳴き声で返事をし、大きな翼を羽ばたかせ飛び上がった。

第三十話『そして時は満ちていく』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

今回は少々短かったかもしれませんが。

ですが、ここで区切らないと延々と長くなってしまうので切らせていただきました。

さて、革命軍対王朝の戦いの火ぶたが切られる目前まで来ました。どちらが勝つのか？ 華蓮は瑠璃たちと再会できるのか？ 邪神の封印はどうなるのか？

それではまた次話で。

感想、批評、誤字脱字報告、アドバイスなどお待ちしてます。

第三十一話『火蓋は切って落とされる』

私たちは平野にいた。所々に木々がはえているだけの平野。そこの一部は人で覆いつくされている。

「それでは作戦を開始する。韓星は北側の三部隊を、趙星は南側の三部隊を指揮しろ！ 東側にはそれぞれの部隊から足の速い者を選抜し攪乱するように動かせ！ 相手の部隊が出てきてもまともに相手をするな。必ず二人一組で敵に当たって、ジワジワと削っていくんだ！ そのまま城から引き離し、狭いところで一对一の形式を作るように動け！ 以上！」

鷺羽が大声で言うと、大気を震わせるような関ときの声が上がった。士気は上々。雰囲気的には期待以上の働きをしてくれそうだ。

作戦は少人数で大人数に当たる時では鉄板といっても良い作戦だ。各地で騒ぎを起こして相手の戦力を分散させる計画もあったのだが、私がそれを却下した。勝つために周りに迷惑をかけるのはテロリストのすることだ。

「それじゃあ急いで行こう」

鷺羽は細かい指示や緊急事態が起きたときの対処方法が書かれている紙を、韓星と趙星の二人に渡しながら言う。私たちはその言葉にうなずいた。

「歩きづらいな……………」

崖の下は森が広がっていた。日光が入ってくる余地がないほど木々は繁り、水捌けが悪いのか足元はぬかるんでいる。

「俺が歩いた場所を通ってくれ。踏み外したら抜けなくなる」

劉仙いわく、ここは一度はまると抜けられなくなる底無しの沼らしい。その沼の中にはまった獲物を喰らうモンスターもいるそうだ。

従軍してただけあって、慣れた様子で劉仙は岩や倒木を選びながら歩いていった。しかし蘭紗の歩幅では届かない箇所が多々あったため、今は私が抱き上げている。

しばらく歩いていると劉仙が急に止まった。目を細め、行く先をじっと見つめている。

「どうした？」

「……………モンスターだ」

私も目をこらして見てみる。確かに蚯蚓みみずが巨大化したようなモンスターが、とぐろを巻いて行く先をふさいでいた。粘液に光る肌が生々しく見ていて気分が悪い。たまに開かれる口には鋭い牙がビッシリと並んでいた。

「俺が引き付けるからその間に横をすり抜ける」

矢筒から矢を取り出し弓につがえながら劉仙が言った。

「五人でやったほうがいいんじゃない？」

「あの粘液は物を溶かす。武器を溶かしたくはないだろ？ その点、俺の弓なら問題はないからな」

私は他の三人に目配せをした。三人は黙ってうなずく。

「わかった、劉仙に任せる。後からちゃんと追いついて来てよ？」

劉仙はニヤツと笑い、任せろと言った。

「いいか？ 俺が矢を放つ。それと同時に走り出せ。……………」

三、二、一、今だ！」

私たちは掛け声に合わせて走り出す。矢の飛んできた方向をモンスターは向いていて、私たちは無事に横を通り抜けられた。

走って走って息が切れそうになってから、ようやく止まる。振り返ってもモンスターの姿は見えない。劉仙の姿も見えない。

「大丈夫かな……………」

そんな私のつぶやきに美羽が応える。

「劉仙さんなら平気だと思います。剣技にも長けてますが、弓の

扱いで言えば恐らくこの国の中でも随一ですし」

後ろ髪を引かれるが立ち止まっても意味がない。後から追いついてくれることを信じながら先を急いだ。この作戦は迅速さが肝なのである。

「見えた。あれだ」

先頭を歩いていた鷺羽がこちらに振り返って言った。指で示している遥か上空に巨大な城が見える。

「これを登るのか……」

目の前にはほぼ直角の切り立った崖がそびえていた。高さは五十メートルくらいだろうか。私と蘭紗は問題ないにしても美羽と鷺羽が登れるかどうか。それに途中でモンスターに襲われる可能性もある。

「美羽はこの崖登れる？」

「これは……ちょっと無理ですね。もう少し緩やかなら出来そうなんですが」

「鷺羽さんは？」

「この程度なら問題はないな。これ以上にきついものを登ったことがある」

それを聞いていた蘭紗が無言で美羽をその小さな肩でかつぎあげた。

「な、何をするんです蘭紗さん!？」

「……………運ぶ」

そう言って蘭紗は顔を赤くする美羽には構わず、岩のわずかな出っ張りを使って器用に登りはじめた。私と鷺羽もそれに倣って登る。

中腹に差し掛かったところで、辺りに耳障りな甲高い鳴き声が響き渡る。振り向くとプテラノドンに良く似た鳥竜型のモンスターが、鋭い足の爪を向けてこちらに突っ込んでくるところだった。懸念していたことが現実となってしまったのだ。

「鷺羽さん!　ここは私が引き受けるので先に行ってください!」

「わかった。上で待ってるからな!」

「わかりました!」

私は龍月を引き抜きモンスターに飛び掛かっていった。

第三十一話『火蓋は切って落とされる』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

最近はやたらと調子が良く、当初の目標である三日に一回の更新が出来ています。

ただ、調子に乗りすぎて変に書いてしまったところがあるかもしれません。

もし、お気づきになられた方がいらっしゃればご指摘をお願いします。

さて今回、革命の火蓋が切って落とされました。

最終目標である駿郁の捕縛は出来るのでしょうか？

初心を忘れず、わかりやすく難しい言い回しをしないように書いていきたいと思っています。

それではまた次話で。

第三十二話『空からの助け』

崖から飛び降りた私は落下しながらモンスターの足をつかんだ。モンスターは振り落とそうと巨体を上下左右に激しく揺さぶるが、私も振り落とされまいとしがみつく。

「大人しくしろ！」

龍月を下から突き上げた。しかし、モンスターの激しい動きになかなか狙いが定まらず空振りになってしまう。動きが収まってきたところで、私は振り子のように勢いをつけ、逆上がりの要領でモンスターの背中に跳び移った。

「これなら外さない」

モンスターの首筋に狙いを定めて一気に振り下ろす。モンスターの首と胴体は永久に別れる。……はずだった。

ふと殺気を背中に感じ振り向く。するともう一匹の別のモンスターが私に向かって滑空してくるところだった。龍月を咄嗟に盾にするが、衝突の勢いは殺しきれない。

「あ、あ、あわわわわ！」

何かをつかもうとするもその手は虚空をつかむばかりだった。私の身体は重力に引かれ地面へと落ちていく。約二十メートルからの落下。いくら私でも自然の摂理には抗えない。このままでは確実に死あるのみだ。

何かつかめるところはないかと思渡すも崖から離れ過ぎているし、運の悪いことに下はゴツゴツした岩場が森から突き出ている。落ちる寸前に木につかまるといった芸当も出来なさそうだ。

「う、うわあああああ！」

グングンと迫る岩。私は生まれてから三度目の死の覚悟をした。一度目は幼い頃に人間に追われたとき。二度目は天津姫に返り討ちにされたとき。そして今だ。

もう眼前にまで岩が迫って私は目を閉じた。最後の悪あがきに顔を腕でかばったりもしているが、まあ無駄に終わるだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

思っていた衝撃がいつまでも来ない。恐る恐る目を開くと私は宙に浮いていた。正確に言えば何かにつかまれて宙に浮かされていた。

「何やってるのよ？」

聞き覚えのある声。そしてそれに同調するように『キュ』と鳴く声。振り向くとそこには・・・・・・・・。。

「華蓮!？」

「久しぶりね。いつまでも迎えに来ないから来てあげたわよ」

「何でここに？」

「私をさらった馬鹿者達から逃げ出した場所と、山の位置から自分の場所を割り出したのよ。それで、出来る限り集めた情報でここにいてることがわかったから来たのよ」

華蓮が地理関係に詳しくったことを思い出す。

「ところで何してるの？」

「モンスターに襲われて、何だかんだあって落下しそうになった」

「私がいないと駄目ね。華音！あの程度のモンスター燃やし尽くさない！」

華蓮の命令に応じて華音は口から炎弾を二つ飛ばした。それぞれが高速で移動するモンスターに命中し、燃やしながら地面にはいつくばらせる。

「いい子ね」

華蓮が華音の頭をよしよしと撫でる。華音は猫のように喉をゴロゴロと鳴らした。

「助けてくれたついでに崖の上に連れてってくれない？」

先程、モンスターの背中に飛び乗った要領で華音の背中に乗りながら言った。

「いいわよ」

華蓮は二つ返事で華音に命じる。華音はその大きな翼を羽ばたかせ崖の頂上まで一瞬で昇った。頂上では蘭紗、美羽、鷺羽、劉仙の四人が待っていた。劉仙と蘭紗を除く二人は突然現れた華音に驚いてはいたが。

「華蓮様が助けてくださったんだ。絶体絶命というときに」

劉仙に何故いるのかを尋ねるとそう答えた。沼蛇、蚯蚓のようなモンスターの名前だ、が仲間を呼んで十数匹に囲まれてしまったそうだ。二匹は何とか倒せたものの弓が溶かされ、もう手だてがなくなったときに助けてもらったらしい。

「お父様と一緒に出た式典で一回見たことがあったからよ。それよりもこっちは誰？」

華蓮が鷺羽を指差しながら聞いてきた。私は華蓮に人を指差ししてはいけないと言ってから答える。

「鷺羽といって革命の首謀者。駿郁を倒すために立ち上がってくれたんだよ」

「私は華蓮。華王朝の一人娘よ。卑劣な方法で我が両親を亡き者にした駿郁を倒そうと立ち上がってくれたことに感謝するわ」

その堂々とした物言いからは華蓮が王族であることを十分に察することができた。鷺羽は深々と頭を下げ、恐縮ですとだけ言った。

「これからどうする？　華蓮も一緒に来る？」

華音の戦力は期待できるし、華蓮も近くにいた方が護りやすい。この先がどうなっているかわからないという不安もあるにはあるが、それでも一緒に来る方がいいと私は思う。

「もちろんよ。自由に動けるけど一人って結構退屈だったし」

「よし。なら早速だけどこの全員を華音で城壁の向こう側に運んでもらってもいい？」

「楽勝よ。華音！」

華音は、さすがに全員は少し重そうによるめいたが、城壁の内へと運んだ。これで第一段階の潜入は成功だ。後は時間との勝負である。外で陽動してくれている仲間のためにも急がなくてはならない。

「行こう！」

私、蘭紗、美羽、劉仙、鷺羽。そして新たに加わった華蓮と華音の六人と一匹は城内へと向かった。

第三十二話『空からの助け』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

やたらと調子が良く、連日投稿出来ましたw

さて今回、華蓮が舞い戻ってきました。

成長した華音も戦力として期待できそうです。

これからどうなるのか？

華蓮のアホの子ぶりを発揮しながら書いていこうと思います。

それではまた次話で。

第三十三話『潜入』

城内に潜入したはいいものの、私は華蓮と華音を連れて行く提案をしたことに少し後悔を覚えていた。なぜなら……………。

「いたぞ！ あそこだ！」

「またバレたあああああ！」

六人という潜入には向かない大所帯に華音という巨大生物がいるせいで、衛兵に見つかる見つかる。その度に警備は増えて行動も取りづらくなっていく。

「こうなったら仕方ない。二手に別れよう！ 蘭紗と華蓮は私について来い！」

「私に命令しなひやあ！？」

これならどちらか片方が捕まっても、もう片方が保険となる。というか、むしろ最初からこうしていれば良かったかもしれない。ゴチャゴチャ言う華蓮を抱え上げ私たちは美羽たち三人と別れた。

「やっと振り切れた……………」

美羽たちと別れて十数分。私たちはかび臭い倉庫にいた。華音の身体が大きいため、なかなか衛兵を振り切れずにいたのだ。

「華音は私が呼ぶまでここで待ってなさいね。私たち以外の誰かが来たら遠慮なく踏んでいいから」

呼び子を懐から取り出して見せる華蓮の言葉にうなづく華音。華蓮は最初、華音を置いていくことに不満の色をあらわにした。しかし、華音を連れ回すことのリスクを説明すると、渋々ながら承諾してくれたのだ。私たちは華音を残し倉庫を出た。

「華蓮はこの城の構造わかる？」

「私が住んでいたときと変わってないから大丈夫だと思うわよ」

華蓮の案内に従って、柱の影に隠れたり、時には部屋の中に隠れたりしながら王室の間へと私たちは進んでいった。近づくに連れて衛兵が増えていき、動きづらくなっていく。

「さすがにもう無理か？」

「みたいね。私の部屋に行くわよ」

「何で？」

「王室の間が続く通路があるのよ」

「最初からそれを使わせろよ！」

そんな便利なものがあるなら、こんなに苦労して近づく必要性はなかっただろう。通路の大きさにもよるが、華音をあんなかび臭い倉庫に置いていくこともなかったかもしれない。

「今思い出したのよ。こっちよ」

苦労して進んだ道を再び苦労しながら戻っていく私たち。端から見れば滑稽なことこの上ないだろう。だが、運のいいことに華蓮の部屋は存外に近かった。

「ここよ」

そう言つて華蓮は扉を開いた。中は質素な造りとなっている。恐らく華蓮の親の影響が強く表れているのだろう。

「たしか、ここの壁を押して…………上から三つ目、左から三つ目の本を抜いて…………この壺をこっちの棚に移して…………最後に天井の燭台を下ろせば」

華蓮がグツと燭台を下ろすとカチツと音がした。すると隅にあった暖炉の奥の壁が埃を舞い上げながら開き、小さな通路が表れた。

「何この仕掛け？」

「この城を設計するときに、ある女の人が遊び心で手を加えたらこうなつたんだって。他にも色んな仕掛けがあるわよ」

そう言つて華蓮はその通路へと潜った。私と蘭紗もそれに続く。私と蘭紗が入ったのを確認すると、華蓮は入口付近に垂らしてあつ

た紐を引っ張った。再びカチツと音がして入口が閉まっていく。ずいぶんとハイテクだ。

「行くわよ」

「私が先頭になる。蘭紗は殿しんがりを頼む。華蓮は私か蘭紗のどちらでもいいから離れないように」

「わかったわ」

私たちは薄暗く、狭い通路を進んで行った。

「・・・・・・・・どっちだ？」

しばらく進むと通路が二つに別れていた。右には下矢印付きで『えいさちねも』、左には上矢印付きで『すらなさた』と書かれている。

「華蓮は分かる？」

「もちろん忘れたわ」

胸を張って自信満々に言う華蓮を見て嘆息する。どちらに行こうか決めかねていると蘭紗がボソリと言った。

「・・・・・・・・『王室の間』と『城の外』」

「え？」

「・・・・・・・・五十音表で上と下に一個ずつずらす」

頭の中で五十音表を思い浮かべずらしてみる。『え』が『お』になつて、『い』が『う』になつて・・・・・・・・。

「ああ、それで『王室の間』と『城の外』なわけね」

「どういうことよ？」

「五十音表を思い浮かべればわかるよ」

「だから『ごじゅうおんひょう』って何よ？」

そういえばこの世界の文字は組み合わせだつたつけ。この世界の文字は元の世界で言う母音と数字を組み合わせた感じである。なら五十音表を知らなくても仕方はないだろう。

「そういうのがあるんだよ。とにかく今は先を急ごう」

右に曲がつて少しの所に扉があった。その傍らには入口にあったのと同様、紐がぶら下がっている。私は華蓮に向き直った。

「華蓮はここで待っていること」

「どうしてよ？」

「この先、何かあるかわからない。もしかしたら私たちが対処し切れないことがあるかもしれない。その時に備えて華音をいつでも呼び出せるように準備しておいて欲しい」

「わかったわ」

「よし、それじゃあ行くぞ蘭紗！」

私は紐をグッと引っ張り、埃を舞い上げながら開いた扉から王室の間へと蘭紗とともに飛び出した。

第三十三話『潜入』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。
いかがでしたでしょうか？

今回は城に潜入。そして城の内部について書きました。

伏線張るのはいいけど回収しきれるかなあ……いや、回収しきって
見せましょう！

次回はついに駿郁と対面します。

それではまた次話で。

第三十四話『駿郁』

王室の間は天井が高く、そして広かった。華音が五十匹は優に入りそうと言えば推して測れるだろう。目の前には玉座の横の部分が見える。そこには誰かが座っていた。いや、誰かはわかりきっている。

「駿郁・・・・・・・・」

「ようこそ王室の間に。あれだけの衛兵をくぐり抜けるとは、かん昂こつのモンスターを撃退しただけはあるな」

駿郁は組んでいた足を解き立ち上がった。その姿は王者の貫禄とでもいうのだろうか、風格に満ちていた。腰には一振りの豪華な剣を佩はいている。

「好き勝手も今日で終わりだ」

「好き勝手した覚えはないがな。この中にいるやつの力を使って世界統治をしたかっただけだ」

そう言つて駿郁は懷から、町の地下で見た魔石を取り出して見せた。相も変わらず神秘的な輝きを帯びている。

「今すぐ行為を改め、その魔石を渡してくれるなら危害は加えない」

「しないなら？」

駿郁は不適な笑みを浮かべた。

「力づくで改めさせる」

「お前ごときに出来るかなっ！」

駿郁は剣を引き抜き、鋭い一閃を繰り出した。目の前で風を切る音がする。龍月を抜き放ちながらバック転で距離を取った。体勢を立て直しすぐさま剣を構える。

「死体は何も語らない。うるさい奴を黙らせるには最良の手段だ。……っ。危ない危ない」

蘭紗が横から飛び掛かるが難なく防がれてしまう。化け物地味た瞬発力だ。

「卑怯かも知れないが二人でいかせてもらう！」

蘭紗とアイコンタクトを取り、絶妙なタイミングで剣撃を打ち出す。駿郁は蘭紗の攻撃を剣で受け、逆に弾き飛ばした。私の攻撃は軽く体重を移動させ避けると、空いている左手で私の右手を絡め取った。そのまま一本背負いの要領で投げられる。

空中で一回転して足から着地すると駿郁はすでに間合いを詰めてきている。ほとんど直感でしゃがむと一瞬前まで私の頭があった所を剣が通り過ぎていった。冷たい石の床を転がって距離をもう一度取る。

「なかなかの使い手だな。殺すには惜しい。どうだ、俺の下で働く気はないか？」

「断る」

「そっちの小さいのはどうだ？」

「・・・・・・・・フルフル」

蘭紗が黙って拒絶の意を示す。

「なら仕方ないな。ここらで舞台から退場してもらおう」

駿郁は今度は蘭紗へと飛び掛かっていく。小さな身体を活かし蘭紗は斬撃を避けると後ろへ回り込みナイフを振り下ろした。しかし、それでさえも後ろに目が付いているかのような動きで避けてしまう。

標的を失った蘭紗は前へ移ってしまった重心を利用し、そのまま素早く数回転して立ち上がった。駿郁はその数回転の間に構えなおしている。常人なら為し得ない、それだけ上手い蘭紗の体捌きにも関わらず駿郁は何でもないことかのように振る舞う。

蘭紗は負けじと振り下ろしたナイフの切っ先を急に止めて逆の手に握っているナイフを振り下ろすといったフェイントを混じえながら駿郁の体勢を崩そうとする。私はその隙に『雪月花』の『雪』を舞うために集中した。

身体がほのかに暖かい光に包まれ、頭の中が冷たく冴え渡っていく。

「蘭紗、離れて！ 第一の舞い『雪』！」

蘭紗が駿郁から離れたのを確認し、『雪』を舞い始める。止まっているも同然の世界で剣を振るった。駿郁の剣を弾き飛ばし、両足のアキレス腱だけを狙って斬る。いや、そうしとよく見えた。

「その程度か……」

「え？ うぐっ!？」

舞いの最中にも関わらず後ろから殴りつけられた。頭の中が直接揺さぶられるような感覚がするとともに、私の身体が宙に浮く。舞いを強制的に中断させられ、舞いのフィードバックが私を襲った。今回は右足の関節が外れ、利き腕である左腕の筋を傷めたようだ。

「なん……で雪の、動、きに？」

頭がグワングワンして途切れがちの言葉になってしまう。

「遅いからだよ。俺の半分以下の速さじゃないか。もしかして、それが全力の速さだったか？」

駿郁は嘲笑するような笑みを浮かべた。蘭紗が私の元に駆け寄り起こしてくれる。

「種明かしをしてやろう。俺はな、半分人間、半分モンスターなんだよ」

「…………忌み子!」

「そういう呼ばれかたもしたな」

蘭紗のつぶやきに苦々しそうな表情になる駿郁。心の中にどす黒い感情が渦巻いているのが手に取るようにわかる。

「母は人間だが、父が人間ではなかった。そして、その父は今はこの魔石に封印されている」

駿郁は懷から光り輝く魔石を取り出した。それを見つめながら再び口を開く。

「人間たちは勝手過ぎる。危害を加えたわけでもないのに、忌み子だ怪物だと石を投げつけてくる。俺達は村外れの家でただ静かに暮らしていただけなのに」

魔石から視線を外し私たちに向ける。その目は怒りや憎しみに満ちていた。

「俺達は我慢した。いつか人間の方もわかってくれるだろうと思っていたからだ。しかし、そんな願いも簡単に破られた。やつらは父がいなときに俺の母を殺したんだ。化け物と関係を結んだ人間の裏切り者として」

駿郁はギリギリと音がするほど歯を食いしばった。手の平に爪が食い込み赤い血が指を伝っている。

「父は怒り狂った。人間を憎んだ。母を殺した村のやつらを皆殺しにした。隣の村、隣の村と破壊し殺していった。この国土の半分以上を殺し尽くした。それでも怒りはおさまらない。このような事態を招いた王朝にもその怒りの矛先を向けた。父の強大な力の前ではいくら王朝といえども歯が立たず全滅の一手手前まで行った」

そこまで聞いてようやく思い出した。地下迷宮で美羽から話を聞いた時からずっと引つ掛かっていたことだ。駿郁が言っていたことは天津姫からずいぶん昔に聞いたことがある。

「全滅しなかったのは一人の奇妙な出で立ちの少女に父親がやられたから。……違う？」

「ああ。華王朝の初代がその少女と、残った民とともに立ち上がった。何日もの戦いが続き、ついに父は敗れ華王朝の初代の血を持つてこの魔石に封じられた」

「その魔石から父親を解放するつもりか？」

「父の力を借りて俺達のような存在がなくなるよう俺達が支配するんだ！」

確かに駿郁の身の上は憐れである。異種間の子供というだけで迫害を受ける。しかし、それを理由に民に苦しみを課していいわけではない。私も似たような境遇だったが、天津姫に諭され自分の行いが間違이었다ことに気づかされている。今度は私が誰かを止めてやる番だ。

「それは間違っている。話し合い、理解し合いながらでなければ本当の共存は出来ない。だから私はお前を止める」

話している間に関節をはめなおし、神気で出来るかぎりの傷を癒した。立ち上がって龍月を握り直し、駿郁と対峙する。どちらにとっても負けられない戦いが幕を開けた。

第三十四話『駿郁』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

だいぶ終盤に近付いてきました。

伏線のつもりで張っていたものはほとんど回収していたのですがいかがでしたでしょうか？

もしわからない点や疑問点がありましたら、遠慮なく連絡をどうぞ。

それではまた次話で。

第三十五話『決着……そして』

「第二の舞い『月』！」

駿郁の力を知った今となつては出し惜しみはしてられない。第二の舞い『月』は自らの知覚能力を極限まで引き上げ、さらに『雪』の能力を加えたものである。これならば、駿郁の超人的速さに対処出来るはずだ。

『雪』のときと異なり、全身は煮えたぎったような感覚に襲われ暑いくらいだ。逆に頭の中は脳が氷に変わってしまったかのように冷え切り、研ぎ澄まされている。

蘭紗には華蓮の所まで下がってもらった。私に万が一のことがあった場合、華蓮を連れて逃げてもらうためだ。天津姫には及ばずともそれに近い力を駿郁は持っている気がする。絶対に勝てるとは正直言い難い。

「何をしても同じだと思うがな」

「私がお前を止めるという意志が有る限り結果は変わり続けるさ」

場が静まり、緊張が高まっていく。私は龍月を鞘に一度閉まった。柄に手をかけ、いつでも抜けるようにする。抜刀術の構えだ。神速の抜き撃ちで全てを切り払う。それが抜刀術の極意。そして私が最も得意とする技。駿郁が仕掛けてきたところをカウンターで切り返す！

「何だその構えは？」

駿郁は抜刀術を知らないようで、いぶかしむように私を見る。確かに初めて見るならば奇異に見えるかもしれない。恐らくこの世界には抜刀術というものはないのだろう。しかし、駿郁はすぐに興味をなくしたように私の構えから視線を外し、自らの剣を肩に担ぐように持ち上げた。

それを見て私は目を閉じた。視覚情報を完全に遮断し、感覚のみを研ぎ澄ませる。これなら駿郁の速さに惑わされることもない。この勝負、勝つにせよ負けるにせよ、片が付くのは一瞬だろう。

「行くぞ!」

私の『雪』以上の速さで肉薄する駿郁。私はまだ動かない。本当にギリギリというところまで引き付け……。

「今!」

完璧なタイミング。腕に神気を纏わせ、限界を超えての抜刀。金属と金属がぶつかる音が王室の間に響き渡った。すれ違った後は互いに背中を向け身動きをしない。

「ぐっ!」

私の足から鮮血が散った。脈をやられたのか出血がひどく、思わず膝をついてしまう。そして後ろの駿郁は……。物も言わずに倒れる。剣が床に落ちる音と、床に崩れ落ちる音がした。太ももの傷を押さえながら振り返る。

「言っただろ? お前を止めるって」

私は鞘を付けたままの龍月を腰に差した。

「峰打ちならぬ、鞘打ちってね」

駿郁は何も言わない。いや、言えない。鳩尾の辺りを全力で叩いたため気絶しているのだ。肋骨の何本かは折ってしまったているかもしれない。しかし、そうでもしなければ止められなかったのもまた事実だ。私は駿郁の懷から魔石が転がり出たので拾いあげた。服越しとは言え、私の全力の抜刀を受けたにも関わらずヒビ一つ入っていない。それだけこの石の持つ力が強いのだろう。

「駿郁の父親か……天津姫に帰ったら相談してみるかな」

私はこの石に封印されているという駿郁の父親のことを思った。王朝を崩壊手前まで追い込んだ強大な力を持つ者。ここまで関わったのなら、駿郁の父親のことも何とかしてやりたい。

「瑠璃！」

「うわっ!？」

これからどうしようか考えていると華蓮と蘭紗が飛びついてきた。私は足の傷で踏ん張り切れず転んでしまう。

「ちゃんと支えなさいよね！」

「足に傷を負ったんだよ！」

「そんなの舐めてれば治るわよ」

「治るか！」

傷が足にきているのは本当だ。少し動かすだけで激痛が走る。回復に専念しても半分切れ落ちかけてるから、完治までに数日は必要だと思う。

「あら？ これって……」

華蓮が足元に落ちている何かを拾い上げた。華蓮が拾ったものに視線を向ける。思わず顔が引き攣るのを止められなかった。

「華蓮のバカアアアアアアアア！」

そう。全てが終わったと思ったこの時に華蓮が拾ったもの。それは私が飛びつかれたときに落としてしまった魔石だった。

第三十五話『決着……そして』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

今回は少し短めです。

でないと中途半端になりそうだったので（汗）

はい、今回は今話で分かる通り邪神と呼ばれた駿郁の父親の復活です。

その力はどの程度のものか？

瑠璃たちは対処しきれるのか？

話が少し大規模になってきて上手く描写しきれかわかりませんが、精一杯書かせていただきます。

感想、批評、アドバイス、誤字脱字報告お待ちしております。
それではまた次話で。

第三十六話『復活』

華蓮の手にした魔石は強烈な光を放った。一筋だった光が次第にその数を増し、やがて目も開けてられないほどとなる。

「な、なに!？」

華蓮が驚いたような、それでいて脅えたような声をあげる。手に取った石が急に発光し始めれば当たり前だが。

「華蓮! その魔石を放せ!」

「わ、わかったわ」

私の叫びに華蓮は慌てて魔石を放り投げる。魔石はカランカランと乾いた音をたてながら床を転がった。その間にも発光を続ける魔石。

「な、なんだあ!？」

扉が大きな音を立てて開かれた。振り返ると美羽、鷺羽、劉仙の三人がいた。その後ろには倒れ伏している衛兵がいる。どうやら強行突破してきたようだ。

「瑠璃さん! 一体何が……?」

「魔石の封印が解かれた」

「えっ!？　じゃ、じゃあ逃げないとまずいですよ!」

美羽がやたらと慌てている。

「へ？ 何で？」

「口伝でこう言われてるんです。『これが竜というものか。見上げても全体が見えない。雷鳴が轟き、風雨が吹き荒れる。知能も高いようで我々の罠をことごとく突破されてしまった。民も半分以上が殺された。迎え撃とうにも兵の数が足りない。我々にはもう打つ手がないのか』。ここで封印が解けたら城が一気に崩れてしまいます！」

「まじ！？」

「早いとこ撤収しましょう！」

そう言うや否や倒れている衛兵達を可能なかぎり人形を操るのに使っていた糸、心糸しんしで縛り上げた。

「全員その窓から飛び降りてください！ この高さなら着地に失敗しても骨にヒビが入る程度で済みます！」

美羽は衛兵達を引きずりながら飛び降りた。鷺羽、劉仙、蘭紗がそれに続く。私も呼び子を鳴らす華蓮と気絶した駿郁を抱えて飛び降りた。着地時に痛みで踏ん張り切れず、わずかにバランスを崩したものの、ひとまず無事に城から脱出に成功する。振り返ると華音が崩れる城から飛び出すのが見えた。どうやら華蓮の笛が聞こえ、脱出することが出来たようだ。こうしてみると随分と華音の知能は高いように思える。

「これからどうする？」

鷺羽が曇った表情で尋ねる。私はしばらく黙考して、それから口を開いた。

「まずは駿郁軍と私たちの仲間の戦いを止めよう。それから状況説明して協力をあおいでみよう。今はそれくらいしか出来ない」

「そいつはどうする？」

劉仙が顎で駿郁を示した。その視線は親の敵を見るかのような。
纏まとう雰囲気も重々しい。確かに劉仙の気持ちもわからないでもない。

「後で説明するが、そいつにも事情がある。処断の有無はそれから決めてくれ」

「わかった」

「鷺羽と劉仙、蘭紗は停戦に向かってくれ。美羽は残ってくれ。やってもらうことがある。華蓮は華音の背中に乗っていつでも逃げられるよう準備しといてくれ。説教は後でする」

「何で私が説教されなきゃ……!!」

華蓮が文句を言おうとするがそれは無視してそれぞれに指示を出す。蘭紗たちは三者三様にうなずき急いで平野に戻って行った。

「それじゃあ美羽。衛兵達はその大木に括りつけといて。暴れたら面倒だから。それと駿郁を後ろ手に縛って」

「わかりました」

美羽は心糸を巧みに操り、あっという間に作業を終えた。私にはとても真似が出来そうにない芸当だと思わず感心する。

「さてと」

私は駿郁の頬を軽く叩いて意識を戻させた。もちろん一発では起きなかったため数発叩く。手形が軽く残ったのはご愛敬ということにしておく。

「・・・・・・・・うう」

「お？」

うめき声をあげたかと思うと駿郁が顔をしかめた。そしてゆっくりと目を開く。

「うお!？」

「ぶっ!？」

慌てて起き上がった駿郁の頭と私と鼻が衝突事故を起こす。あまりの痛みに軽く涙目になる私。駿郁は駿郁でのたうち回っていた。

「お、起きたか」

私は鼻血を止めるために鼻を押さえながら駿郁に向き直った。駿郁はのたうちまわるのを止めて寝転んだまま私の方を見た。

「…………俺は負けたのか」

「ああ」

「好きにしろ。負けた以上、無様に抵抗するつもりはない」

状況を把握した駿郁は身体を起こし地面に正座で座った。その姿は切腹する前の武士のようだ。もう少し抵抗なり何なりするかと思っていたが、ずいぶんと潔い人物のようだ。プライドが高いとも言えるかもしれない。

「なら協力してくれないか？」

「協力？」

駿郁がいぶかし気に私を見上げる。

「うちの馬鹿なお姫様が魔石の封印を解いてしまつてね」

華蓮が「馬鹿とは何よ！」と後ろで騒いでいたが当然これも無視する。

「まずはお前の軍勢の攻撃を直ちに止めること。私達から仕掛けたものだけど、無駄に犠牲を出すのは私達の本意じゃない」

そこで一旦言葉を切り、駿郁の顔をうかがう。しかし、駿郁の顔には否定する色は見えなかった。それを見て取った私は言葉を続けることにする。

「次に駿郁の父親がどういう人物なのかを教えて欲しい。性格と

かだとなお良い」

封印された当時の感情を今だに持っているのだとすれば、かなり危険な存在だろう。復活を遂げたと同時に暴れだしてもおかしくはない。その感情が薄れているのだとすれば良いが、樂觀は出来ない。

「恐らく父は．．．．．父はまだ人を憎んでいるはずだ」

しばらくの沈黙の後、駿郁はそう言った。

「父と母はかなり仲が良かった。人間と人間ではないもの同士だったが、本人たちは構わないと関係を結んだ。元々、父は風雨を司っていたらしい」

「ちよつと待った。風雨だって？ モンスターがそんなこと出来るのか？」

「父はモンスターなどではない。俺の父は．．．．．」

そこまで駿郁が言うと、背後にあった城がまばゆい光につつまれながら大きな音を立てて崩れ落ちた。瓦礫になった城の上に浮かぶその姿。それは．．．．．。

「黒龍．．．．．」

巨大な龍の姿だった。

第三十六話『復活』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

いかがでしたでしょうか？

終盤に近付いてついに駿郁の父親が魔石から復活を遂げました。

天津姫が封印した駿郁の父親を瑠璃達は止めることが出来るのか？
憎しみが勝つか？ それとも仲間との絆で憎しみの連鎖を止められるのか？

最近の湿気と暑さに負けずに書いていきたいと思います。

それではまた次話で。

感想、批評、アドバイス、誤字脱字報告、お待ちしております。

第三十七話『駿嵐』

城の上に浮かぶ黒龍。その姿は日本古来の竜の姿に似ていた。細長い流麗な漆黒の身体が美しい。違う点といえば鰭ひれが付いていることくらいだろうか。そのため宙を泳いでいるようにみえる。

さっきまで晴天だった空は見る見る内に曇天となり、やがて嵐となった。これが駿郁の父親の風雨を操る力というやつなのだろう。

「ようやく……ようやく現し世に戻って来れたか」

重々しい威厳に満ちた声。それはまさに龍に相応しい声だった。しかし、それは厳しい視線とともに彼の息子に向けられている。

「駿郁」

「何だ？」

「何故、我を封印した天津姫の手の者に負けた？」

「力が足らなかったからだ。だが、俺は負けたことに言い訳はない。強いものが正しいという父上の教えに従うだけだ。俺は瑠璃の言うやり方で共存の道を開こうと思う」

駿郁は震え上がりそんな視線にも怖じけずにそう言い切った。黒龍はその言葉を聞き、怒気を纏った。それに呼応するように嵐がいつそう強くなる。

「人間と共存？ 笑わせるな。出来たら苦勞などしない。人間は

どこまでも自己中心的だ。自分に仇なす可能性が微塵でも見つければ容赦なく滅ぼしにかかる」

「だが！」

「共存など生温い理想だ。お前なんぞ、どうでもいい。我が一部だった幽羅いっしやの方がまだ役に立ったと言えよう」

駿郁は言い募ろうとしたのを遮り、そう言い捨てた。そして私に向き直る。

「お前が瑠璃か」

「そうだ」

「我は今より貴様を倒し、この世界を手中に収める」

「話し合いで解決というわけにはいかないか？」

駿郁にも言ったことだが、できることなら血は流したくないのだ。対話で解決出来るならそれに越したことはない。話を聞いたかぎりでは、黒龍も静かな生活を送りたがっていたはずだ。

「何事にも引き際というものがある。それを踏み破り、我々に危害を与え続けたのは人間どもだ。それだけなら耐えられたものの、妻を亡き者にまでされたのだ。到底許せるものではない！」

そう言つと黒龍は天に向かって轟いた。嵐の勢いはさらに増し、立っているのもやっとというほどになる。

「華蓮！ 美羽と駿郁を連れて行ってくれ！ それから蘭紗をここへ！」

「私に命令をしないで！ 華音、行くわよ！」

華音は華蓮を背に乗せると右足で美羽を、左足で駿郁をつかみ宙へ羽ばたいた。この荒れ狂う嵐にも関わらず力強く飛ぶ華音。あつという間にこの嵐から抜け出た。その場に残ったのは私と黒龍のみ。

「今さら一人二人増えたところでなにも変わらぬ」

「やってみなければわからないさ」

「墓の中で後悔するといい。この駿嵐しゅんらんを止められるなら止めてみよ！」

「だあああああつ！」

足の痛みを極力無視しながら龍月を振るう。柔らかそつに見えた鰭は異様に堅く、幾度となく振るった私の攻撃をことごとく弾き返す。

「何だそれは？ 攻撃でもしているつもりか？」

私の斬撃を一笑に付す駿嵐。

「攻撃とはこうやるのだ！」

駿嵐が巨大な尾を風車のように振り回した。巨体には釣り合わない速さ。咄嗟に龍月で防ぐも絶対的な質量には敵わない。トラックにぶつかられたようなものだ。私の身体はちり紙のように軽々と吹き飛ばされてしまった。

「ぐうう……」

近くの木に背中から突っ込み、ビキッと肩の辺りから嫌な音が響いた。それと同時に血を吐く。

「がふっ!？」

駿郁相手に舞った『月』のフィードバックが今さらになって来たらしい。右肺に潰れるような激痛が襲った。最悪な運の巡り合わせ。肩の骨は折れ、右肺は潰れ、足には立つのですらきつい大きな切り傷。目の前には国土の半分を壊滅させられる力を持った敵。一瞬で窮地に陥ってしまった。

「ここで終わりなのか？」

自嘲するように笑う。だがそれも肺が潰れているせいですぐに呼吸が上がってしまう。実際の戦いなんてこんなものだ。ゲームや小説みたいに長々と続くことなんてない。力の差があれば一瞬で片が付いてしまう。奇跡が起きて新たな力に目覚めることなんて現実ではありえない。

「天津姫の若かりし頃の方が遥かに強いな。今の貴様の技量では我に傷一つ付けることすら出来まい」

駿嵐は宙を舞いながら嘲笑する。そう、それは発狂しているような、聞くだけで絶望しそうな笑いだった。ひとしきり笑った後、駿嵐は思わぬことを言う。

「例え、その剣が我の牙から出来ていたとしてもな」

「……………え？」

一瞬何を言われたのかわからなかった。

「天津姫は我を封印するため戦いを挑んできた。その卓抜した力で我が牙を折り武器を作った。それを以って我を討ち果たし、封印したのだ」

駿嵐は苦々しい表情を一瞬作ったが、すぐにそれを打ち消す。

「まあ、お前にはすぐに関係がなくなることだ。これで終わりにしてやるう」

長い身体を縦に起こし、風が駿嵐を中心に集まりはじめた。竜巻と同じ原理で、私の身体が引き込まれそうになる。巻き込まれたら最後。上空高くに舞い上げられ、地面に血の花を咲かすことになるだろう。

何とか逃れようと身体を起こそうとするが激痛で身動きもままならない。それでも龍月を杖代わりにしながらも、何とか身を起こした。手近な木の枝に残った力を振り絞ってつかまり飛ばされないよ

うにする。

「ふん、無駄なことよ」

つかんでいた枝の部分がミシミシと音を立てはじめた。それでも風に引き込まれないようつかんでいると、耐え切れなかった枝が根本から折れた。風に引き込まれ、はるか上空に身体が投げ出される。もう叫ぶ気力もない。叫んだところで口から出てくるのは潰れた肺から流れ出る血だけだろう。

ある程度まで上昇した身体は当然のように落下を始める。近づいて来る地面。不思議と恐怖は感じなかった。ただ「これまでの過去を清算する時が来たんだな」と、そう思った。

脳裏に浮かぶのは無邪気に笑う華蓮。食べ物をおいっぱいに頬張る嬉しそうな蘭紗。微笑みを絶やさない美羽。豪快に大口を開けて笑う劉仙。戦いの前に仲間と肩を組んで楽しそうに笑う鷺羽。仲間達の笑顔だった。

「・・・・・・・・みんな」

風を切って落下する中で私はゆっくりと目を閉じた。

第三十七話『駿嵐』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

さて、いかがでしたでしょうか？

黒龍の強さの片鱗を少しでも感じ取っていただけたらなと思います。
ピンチに陥った瑠璃がこれからどうするのか？

仲間たちはどう動くのか？

終盤に近付いていますが、最後までお付き合いいただけたらなと思います。

それではまた次話で。

第三十八話『天津姫』

覚悟していた衝撃はいつまで経っても来ない。目を開くとそこには懐かしい顔があった。それは私をこの世界に送った張本人。

「天津姫!？」

「久しぶりね。元気にしてた？」

「何でこんなところに……………」

状況が上手くつかみきれず混乱する私。天津姫はそんな私を見て笑った。そして、いい顔をして言う。

「そろそろかなって思ったからよ」

意味がわからない。何がそろそろなのだろう？

「真打ちは遅れて登場するものでしょ？」

「……………」

「いや、本当は天狐が心配で来たのよ？」

黙った私に対して焦って言い訳をする天津姫。こんな状況にも関わらず笑みがこぼれてしまう。だが、そのため緊張の糸が切れてしまった。思わず涙がこぼれるのを止められない。

「え？ え？ どうしたのよ？」

「な、なんでも………ない、です」

「とにかく、その怪我を」

「……………瑠璃！」

天津姫の言葉を遮り、鈴を転がすような幼い少女の声が聞こえた。声がした方に顔を向ける。そこには少し慌てたような表情の蘭紗がいた。

「あら蘭紗」

天津姫が一目見て懐かしい旧友に出会ったかのように言った。しかし、蘭紗は天津姫や駿嵐には見向きもせず私に元へ一直線に駆けてきた。

「……………大丈夫？」

心配そうに蘭紗が覗き込んできた。私は急いで涙を拭い、笑って見せる。「大丈夫」と言うと蘭紗は安心したような表情を見せた。だが、それもすぐに掻き消えてしまう。蘭紗の視線は私の足に向けられていた。

「……………血、いっぱい」

「これくらいなら大丈夫。治せるよ」

「……………」

蘭紗が唸りながら頭を抱えた。しばらくそうしたかと思うと顔を上げた。その目は虚ろで、何かを見ているようで何も見ていないあの目となっていた。頭から狼の耳が、腰骨の辺りからは綺麗な毛並みの尻尾が生えてきた。そして最後に突如として身体が膨れ上がり、着物の内側からは漆黒の毛が溢れ出てきた。見るのは二度目になる蘭紗の本性。

「血を見たからね」

天津姫が冷静にそう言う。名前を呼んでいたことといい、本性が現れる原因を見抜いたことといい、天津姫は蘭紗のことを知っているのだろうか？

「その漆黒の毛……天津姫とともに我を封印した神狼が！」

駿嵐の言葉を聞き、天津姫に振り返る。天津姫は黙ってうなずいた。

「蘭紗！ 天狐を治癒する時間を稼いで！」

蘭紗は喉を鳴らしながら首肯すると、駿嵐に向かって飛び掛かった。黒龍と神狼のぶつかり合い。それはある神話的一幕を見ているようだった。

「ほら天狐。身体に神気を回しなさい」

私は言われた通りに神気を身体に巡らせた。天津姫はそれを見て、私に手をかざした。身体が暖かな淡い青色の光に包まれ始める。だが、天津姫は表情をすぐに曇らせた。

「どうしました？」

「治りが遅い。この刺は？」

「駿嵐の尾に殴りつけられたときに刺さったものかと」

私の脇腹に刺さった数本の細長い刺を見て、天津姫は思案顔になった。しばらく腕を組んで何事か考えている。

「これのせい……なのか？」

天津姫は脇腹の刺をわしづかみにし、一気に引き抜いた。灼熱のような熱さが身体を駆け抜ける。それと同時に身体が急速に痺れはじめた。傷口から手足へと広まり、身体を中心、つまり心臓の方へと侵食していく感じがする。

「……………」

声を出そうとするが、鯉のように口をパクパクとただけで終わる。

「毒か！」

いつもは余裕風を吹かしている天津姫が本当に焦ったようになってた。刺を放り投げ、両手を私にかざす。治癒に全力を回しているようだった。痺れの侵食は少し遅くなったものの、それでもじわりじわりと僅かずつ進んでくる。

「抜いたら毒が出るなんて……………」

天津姫はさらに真剣な表情になった。私を覆う光が一層強まる。しばらくして、僅かずつ進んでいた侵食が止まった。私の体内で毒と天津姫の力がぶつかり合っているのが感じられる。

「天狐！ この丸薬を飲んどきなさい！」

そう言って天津姫は鮮やかな青色の丸薬を水と一緒に私の口へと押し込んだ。涙目になりながらも、何とか飲み込むことに成功すると、温かった身体が、むしろ暑いほどになった。それに応じて痺れも引き始める。

「効いたみたいね」

「天津姫……今のは？」

口はまだ若干痺れていて上手く話せない。だが、手足の痺れはもう大丈夫なようだった。軽く手を握ったり開いたりする。

「風邪、捻挫、青酸カリ、インフルエンザ、麻疹、黒死病、深爪。なんにでも効く特製の薬」

「青酸カリにも効くんですね」

「死人を生き返らせること以外ならほとんど治せるかな」

そういう天津姫の額には汗が浮いている。見るからに辛そうだ。それに引き換え、私の体調は万全なものになっていく。痺れは抜け、足の裂傷は塞がり、肩の骨も元通りになっている。潰れていた肺もだ。

「だ、大丈夫ですか？」

「神氣を使い過ぎたかも。駿嵐を止めるのは任せていい？」

息を切らせながら天津姫は言った。

「大丈夫です」

「いい？ 駿嵐は風雨を操るといった強大な力を持つ者だけど、元は天狐と同じ農業に携わっていた神よ。戦いに関しては天狐の方に長があるはず。一撃で終わらせることばかりを考えずに、私が教えたことを忠実に守ってみせなさい。きっと、勝てるから」

「天津姫はどうやって勝ったんです？」

「私が得意としていたことを天狐はそのまま真似られないでしょう？ 自分の出来ることを活かしてみなさい。今ならきっと倒せるはず」

そう言っただけで天津姫はスッと立ち上がった。苦しげではあったもののその姿は私よりも遥かに大人びて見える。

「華森かしんの先祖を連れて来るわ。どこにいる？」

「華蓮のことですか？ だったら城の東側で飛竜に乗っているはずですよ」

「わかった。それじゃあ頑張つて」

天津姫は軽く跳躍し、城の瓦礫の向こう側へと跳んで行った。

「私の出来ることか……………」

最初に思い付いたのは抜刀術だ。だが、あれは対人間用に特化したもので駿嵐のように巨大なものを相手にするものではない。次に思い付いたのは、妖狐の頃に使っていた狐火だ。しかし、やはりこれも村を焼き払うのに主に使っていたに過ぎず、手数が多いだけで威力は低い。

「となると…………『雪月花』か」

おそらく使うとなれば『花』だろう。『雪月花』の中で最も強力な舞い…………だが。

「私の身体はもつのか？」

『花』の舞いを最後に舞ったのは天津姫に稽古を付けてもらっていた頃だ。その時も体内中がズタズタになった。『月』の舞いで肺が潰れたのが可愛く見えるほどである。

「…………いや、やるしかない」

葛藤を振り払い覚悟を決める。天津姫が私を止めてくれたときに言った。「私に恩返しをしようとは思わないように。もし、したいと思うなら私がしたことを他の人にもしてあげなさい」と。駿郁を止めたように、駿嵐も私が止める。そのためには全力を尽くすべきだ。それに、『花』を舞ったからといって死ぬというわけではない。

「蘭紗！」

私の呼び声に蘭紗は駿嵐から距離を取った。所々怪我はあるようだが、そのどれもが軽傷だ。さすがは神狼といったところか。

「私の足になつてくれるか？」

私の問いに黙ってうなずく蘭紗。私はその頭を一撫でして、蘭紗の背に飛び乗った。

「我が毒を受けても無事とはな」

「天津姫のおかげだ」

「天津姫も老いたものだ。毒を打ち消すだけで精一杯とはな。昔に比べてずいぶんと覇気が衰えている。あの頃の力強さが見えない」

駿嵐は鼻で笑った。そして未だ健在である自らの力を誇示するかのように嵐の勢いを強める。

「人間を庇う愚か者。我が完膚無きまでに叩き潰して見せよう！」

第三十八話『天津姫』（後書き）

お読みくださいありがとうございます。

ようやく天津姫を表舞台に出すことが出来ました。

ここで瑠璃を助けることは決めていました。

おかげで瑠璃の体調も万全、蘭紗も神狼の姿になり戦力としても万全。

ここから一気に畳み掛けをしていきます。

それではまた次話で。

第三十九話『花』

駿嵐は再び身体を縦に起こした。駿嵐を中心に風が集まりはじめる。さつき私を引き込んだものよりも力が強い。蘭紗もそれがわかつているのだろう。全力でその場から離れた。力強い四肢は竜巻の引き込もうとする力を物ともせず振り切る。

「小癪な」

駿嵐は効かないとわかると、すぐさま手段を切り替えてきた。宙を旋回しながら飛び、空に向かって咆えたと頭上に厚い雲が集まってきた。

「我が稲妻を受け灰塵となれ」

重々しい雷鳴が響き渡る。幾筋もの雷が目の前に落ちてきた。蘭紗はそれを軽やかなステップで避ける。右、左、少し立ち止まり斜め前。それは舞踊を舞っているようだった。しかし避けることは出来ても、近づくことは出来ない。稲妻が私たちを狙うようにして降り注ぐのだ。

「しばらく避けられる？」

私が尋ねると蘭紗は首肯した。

「……………平気」

避けることは蘭紗に任せ、私は目を閉じ意識を集中させた。『雪月花』の『花』はこれまでの二つとは異なる。神気を練り上げる必

要があるのだ。練り上げ、濃密度となった神気を身体を中心へと流し込む。身体中が神経になったようになった。風の流れ、雨粒の一粒一粒の動き。全てが手に取るように把握出来る。それに何より身体が軽い。今なら予備動作無しに行動が出来そうだ。

「よし」

『雪月花』の『花』は上手くいったようだ。天津姫が教えてくれた通りの状態になっている。

次に私は龍月を抜き払った。『花』の状態を維持したまま龍月に神気を纏わせる。刀身が私の神気の色、紅蓮に染まった。より高密度になるようにさらに集中させる。龍月に纏わせた神気が輝きを増した。

「これでよしと。蘭紗、私を降ろして少し離れてて」

蘭紗は駿嵐の稲妻が止むと、指示通りに私を背から降ろし、素早くその場を離れた。

「何のつもりだ？」

「お前を止める準備が終わったからな」

「天津姫よりも弱く、我に傷一つ負わせることが出来なかったお前が何を言う」

駿嵐は私のことを脅威とは思っていないようだった。それは私にとって勝因となり、駿嵐にとって敗因となり得る。

「そんなことを言っていられるのも今のうちだ。すぐに結果が出る」

『花』を維持出来るのは長くて十分程度。残り時間は既に八分を切っている。しかし、ここで焦っては意味がなくなる。冷静に、慎重に、確実に行動しなければならない。

一瞬の静寂。聞こえるのは嵐が奏でる自然の音のみ。私と駿嵐は同時に動いた。駿嵐の長い尾がたたき付けようと横殴りに振られた。私はそれを一瞥すらせずに跳躍して避ける。駿嵐は直ぐさま身を翻して距離を取ると、水弾を連発してきた。当たれば吹き飛ぶのは必至である。だが、私はそれを龍月で引き裂きながら駆け続ける。一瞬の隙を見逃してはならない。

「逃げ足の早い虫けらめ！」

駿嵐は水弾を連発しながら稲妻を降り注がせた。至るところに落雷し、木々が燃え落ちていく。私は水弾を切り伏せ、目の前に落ちてきた稲妻を切り裂いた。

「な!？」

駿嵐が驚愕の表情を浮かべる。未だかつて稲妻を切り裂いた者を見たことがなかったのだろう。しかし、私は稲荷だ。農業の管理をしていたため同系統のことが出来る。つまり、風雨を操ることが多少は出来るのだ。稲妻を切り裂く術もそこで手に入れた。さらに『花』を舞っている今なら全ての能力が極限まで引き上げられている。稲妻を切り伏せることくらい朝飯前だ。

駿嵐は私が稲妻を切り裂くと思っていなかったため驚愕に身を固

くした。そこで出来た隙を今の私が見逃すはずはない。全力で駿嵐に向かつて跳躍する。弾丸のように突き進み、一瞬交差した。着地し、鞘に龍月を納めた。チンと涼やかな音がする。それと同時に嵐は止み、西の空に美しい夕焼けが見えた。

「玉が……………」

駿嵐が呆然とした口調で言う。私が切ったもの。それは駿嵐が握っていた玉だった。

いくら風雨を司ると力があるといっても独力で普通出来ない。それは私も同様で、操ろうとしても強すぎたり弱すぎたりで安定しない。私の場合は神社を媒介にしていた。なら駿嵐は？ そう考えると必然的に一つの答えに行き着いた。

「お前はもう風雨は操れない。その巨体で、風雨の庇護もなしにどう戦う？」

私の問いに沈黙で応える駿嵐。しばらく沈黙が続き、駿嵐は肩を振るわせていた。泣いているのではない。声を押し殺して笑っていたのだ。

「どう？ 我はどうとでも戦える。玉など単なる安定装置に過ぎん。我が身一つあれば、世界を壊滅に追いやることなぞ容易い！」

再び嵐が起こる。それは際限なく強まっていった。しかし、安定したものではない。無秩序な暴力となってそれは吹き荒れていた。

「玉を破壊すれば我が諦めるとでも思ったか？ 否！ 我が身が滅びるその時まで人間に復讐すると駿恋しゅんれんに誓った！」

「お前は愛するものを奪った者と同じ所まで落ちたいのか！ 関係のない、罪のない人を殺してお前は何を心得る！？」

駿嵐は応えない。遙か上空に飛び上がり、どの巨体に風を纏わせた。私のことは復讐の邪魔をする者としてしか認識していないようだ。

「天狐！」

「放しなさいよ！ この無礼者！」

声のした方に顔を向けると華蓮を抱えて華音に乗る天津姫がいた。華蓮は何やら怒り心頭のように、ジタバタと暴れている。

「天津姫！ 華蓮！」

「賢帝だった華森の子孫がこんなに馬鹿とは思わなかったわ」

「誰が馬鹿よ！」

「お前だ！ この馬華蓮！」

「略すな！」

何やら不毛な言い争いをしているようだ。華音はそんな背中での言い争いは気にせず私の目の前に降り立った。そして天津姫は私に耳打ちする。

「四方の陣は知ってるかしら？」

「四つの方角に神気を扱えるものがそれぞれ立って行つ強力な封印ですよ？ 私、天津姫、蘭紗はともかく華蓮はどうするんです？」

「これを使うわ」

天津姫は懷から砕けた赤い石を取り出した。駿嵐が封印されていた魔石だ。

「私が以前にやつを封印するときに使った物よ。砕けているけど、神気が残っているからこれを使わせるわ。魔石だから華一族の血が必要だし」

「私の役目は弱らせることですね」

「そう。頼んだわよ」

私は封印する際に条件を言った。天津姫は少し怪訝そうな顔をしたが、すぐに私の意図に気づきに了承してくれた。

「誰かと思えば、華森の子孫に天津姫か。四人と一匹で戦おうというのか？」

「いや、お前の相手は私一人だ」

『花』を舞っていられる時間は残り五分程。その時間内で駿嵐を戦闘不能にし、『御影降ろし』^{みかげお}を行う。今までにないほど濃密度の五分となるのは必至だ。だが、こうでもしなければ事態は収まらないのも事実である。

「絶対に
お前の心の闇を払ってやる」

第三十九話『花』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

いかがでしたでしょうか？

今回はちょっとした戦闘とこれからの策を書きました。

終わりに近づいてますが、それでもより良いものが書けたらと思いますので、感想、批評、アドバイス、誤字脱字等があればよろしく願います。

それではまた次話で。

第四十話『決着』

「ふっ！」

遙か上空から立て続けに水弾を浴びせられるが、それらを全て切り伏せた。無秩序に降り注ぐ稲妻は最低限の動きで避ける。暴風雨で足場が悪くなりつつあるが、『花』を舞っている私には関係のないことだ。

「逃げているばかりでは我を止めることは出来ぬぞ」

嘲笑しながらも攻撃の手を緩めない駿嵐。私は絶えず動き回り、とにかく隙が出来るのを待つことに努める。駿嵐はなかなか攻撃が当たらないことに苛立ちを感じはじめたらしく、狙いが粗くなってきた。

「一思いに潰してくれる！」

上空からの急降下。私はそれを右に跳び避けた。すれ違い様に逆袈裟切りに鰭を切り落とす。今の私は相手の最も弱い部分を見抜くことも出来る。鰭を切られた駿嵐はバランスを崩し、地面へと突っ込んだ。どうやら鰭は飛行機で言う尾翼のような働きをしていたようだ。

「ぐう！」

それを察した私は間を置かずに肉薄すると、鰭を全て切り落とす。切り付ける度に上がる血飛沫と駿嵐のうめき声。

「まだまだあ！」

角を叩き折り、尻尾を切断。龍月を振るう度に飛び散る鱗。次第に駿嵐は傷ついてないところが少なくなってきた。しかし、完全に動けなくなるまで斬撃を続ける。限界を凌駕して繰り出した圧倒的な手数にたちまち駿嵐は虫の息となった。

「わ、我が負けるだど？」

私の息が切れるころには、駿嵐は首だけをかるうじて持ち上げて睨みつけることしかできなくなっていた。見るに無残な姿である。

「お前は勘違いをしている」

「勘違い、だど？」

「お前の妻、駿恋の本当の気持ちを考えたことはあるのか？ 駿恋は本当に自分を殺した者達を恨んでいるのか？」

私の言葉に駿嵐は一瞬まごついた。予想通りである。駿嵐は最愛の者を失った自分の悲しみを暴力に昇華させることで解消していたのだ。復讐は後づけ的な理由に過ぎない。

「今から真実を見せる」

「死んだ者は生き返らない。これは世界の絶対の法則だ。どうやって真実を見せると言っただ？」

「『御影降ろし』。死んだ者の魂を私という器に入れ、他者と話させる技がある」

神様の存在がまだ信じられていた頃に、私の村で疫病が流行った。その時に死者と話がしたいという者が多数いたため編み出した技だ。元々は小動物に私の魂の一部を分け与え、使い魔にするための物だったが、それを応用させたものである。

「……………それで駿恋と話せるのだな？」

「姿形が私なのは我慢してくれ。あくまでも魂を現世に呼び出すものだから。それと時間はかなり短いこともだ」

「良い」

私は『御影降ろし』を始めた。残りわずかとなった神気を薄く広げて世界を覆い、駿恋の魂を探す。さ迷える魂が多く中々見つけないことが出来ない。しかし、その中に気になる物を見つけた。

「駿嵐のすぐ隣？」

暖かい、慈愛に満ちた魂だった。理屈ではなく感覚で確信した。この魂が駿恋なのだと。私は自分の魂を隅にやり、手繰り寄せたそれを表面に持つてくる。私としては自分で身体を動かさずに場景が動く、そう例えて言うならばテレビを見ているような感じになった。そして、私の身体を借りた魂が初めにやったこと。

「駿嵐の馬鹿！」

駿嵐の頬へピンタすることだった。啞然とする駿嵐。

「……………駿恋か？」

「そうよ！ 人様に迷惑をかけずに生きて行こうねってあれだけ約束したのに、それを破って大暴れして。信じられない！ 誰が復讐してって言った？ め・い・わ・くはかけないってことはそういうことも含むの！ それに駿嵐と結ばれて駿郁が生まれて、その時には覚悟くらい出来てたわよ！ それを何勘違いしてるのよ！ この、馬鹿で阿保でドジでマヌケのアンポンタン！ 勝手に解釈しないでよね！」

ガトリング砲のような駿恋の言葉にたじたじとなる駿嵐。しかし駿恋の説教はまだ続く。

「近くに留まっていたら何よ。『我が身一つあれば世界を壊滅に追いやることも出来る』ですって？ 壊滅させてどうするのよ！ それでも風雨を司る者なの？ 駿嵐の仕事は風雨を管理して人様の生活を助けることでしょうが！ 本末転倒じゃないの！」

「そ、それは……………」

「この身体を貸してくれた瑠璃さんにもお礼を後で言っておくこと。それから壊したお城と森は自分で責任を持って直すこと。駿郁とこれからをどうしていくのか話し合うこと。いいわね!？」

「……………はい」

先程まで私に向かって威厳を放っていた駿嵐も駿恋の前では形無しだった。しょんぼりとして唯々諾々としている。

「駿嵐なら大丈夫。ちゃんとやり直せる。私の大好きな人だもんね？」

「・・・・・・・・」

「ずっと、ずっと側にいるからさ」

最後にそう言つと駿恋が私の身体から自然に抜けていくのが感じられた。タイムアップだ。隅に追いやっていた私の魂が表面に戻る。

「というわけらしい」

「・・・・・・・・我が間違つていたのだな」

「確かに最愛の者を亡くすものは辛い。でも、死に別れたらそれで終わりなのか？ 永久に想い合うことこそ、共にあるということ。お前が駿恋を想い続けている限り駿恋はお前の心の中で生き続けるはずだ」

天津姫が私に教えてくれたこと。悲しみや怒りに身を委ねてはならない。それに立ち向かい克服することで本当の強さは身につけられる。それは別に一人で立ち向かわなければならぬというわけではない。仲間、家族、恋人、支えてくれる者なら誰でも構わない。要は逃げ出さない強さということだ。

「我はやり直せるだろうか？」

「駿恋が言っていただろ？ いつまでも一緒にいるつて。一人より二人とも言つし、きつとやり直せるさ。それにお前には駿郁だっているだろ？」

「・・・・・・・・そうだな」

駿嵐は初めて嘲りの色のない、本当の笑みを浮かべた。

「この姿のままでいるというのも失礼な話だな。人の姿になろう」

駿嵐の身体が急速に縮んでいく。それはやがて人の形となった。
駿郁に良く似た一人の青年がそこにはいた。

「お礼を言わせてくれ。お前がいなければ我はいつまでも復讐の
悲しみに飲まれていた。本当にありがとう」

「どういたしまして」

二人で笑い合う。そこにはある種の心地良さがあった。拳と拳で
語り合った男同士の友情のようなものだろう。まあ、私は女だが。

「終わったみたいね」

「天津姫、蘭紗、華蓮」

振り返ると三人がいた。華蓮は天津姫をブスツとした顔で睨んで
いる。天津姫はそれをスルーし、人の姿に戻った蘭紗はいつも通り
の無表情。

「この通り、封印はしなくても平気です」

「憑き物が落ちたみたいだわ」

天津姫が駿嵐をのぞきこむ。駿嵐も見つめ返して言う。

「天津姫も数百年前はもつと荒らぶれた感じだったがずいぶんと丸くなったな」

「失礼ね。太ってなんかないわよ」

「そういう意味じゃない」

堪え切れなくなったのか二人同時に吹き出した。しばらく笑ってから真面目な表情に戻ってから駿嵐は言った。

「我を封印してくれ」

第四十話『決着』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

さて、いかがでしたでしょうか？

少しあっさりとした決着のつき方となりました。

まあ『雪月花』の『花』は一種の無敵状態なんで当然と言えば当然なんですわ

次回は少し更新が遅くなるかもしれませんが。

大学の方で試験が始まってしまいますので……。

ご感想、ご意見、批評、アドバイス、誤字脱字報告などがあればよろしく願います。

それではまた次話で。

第四十一話『再封印』

「封印って……何でだ？」

「心の整理、だな。駿恋の本音もわかった。瑠璃に止めてもらったお陰で目を覚ますことも出来た。だが、理屈でわかってても気持ちの面で整理がすぐにはつけられない」

駿嵐はそう言った。長年、人間に復讐することだけを考えてきたのだ。言われてみれば当然のことかもしれない。

「……わかった。お前が封印から解き放たれたいと思ったら解けるようにしておく。しっかりと気持ちの整理をつけてくれ」

私、天津姫、華蓮、蘭紗は駿嵐を中心としてそれぞれ東西南北の順に等間隔に並んだ。

「これから何するのよ？」

「話くらい聞いておきなさい。これから駿嵐を封印するのよ。そのための魔石も渡したでしょ」

天津姫は馬鹿を見るような目で華蓮を見ていたが、ため息をついて真面目な顔に戻った。

「それじゃあ始めるわよ」

これから行う四方の陣。それは四元素を利用したものだ。術者は

それぞれ火、風、水、時を思い浮かべる。火は活気、風は慈愛、水は癒し、時は悠久を意味する。術者ならどれを思い浮かべて良いというわけではないのがこの術の難しいところだ。神気にも特徴があり、その特徴は性格に反映される。例えば私の神気は赤色だが、それは四元素の火を意味している。他にも蘭紗の緑色は風、天津姫の紫に近い青色は水と時を意味している。

普通、二種類もの特徴は持てないのだが、天津姫のように長生きをしている場合は例外だ。私より明らかに年下に見えても、実際は三千歳を越えている。私はその十分の一をようやく越えた程度だ。

「天狐は火、蘭紗は風、華蓮は水を目を閉じて思い浮かべて」

天津姫の指示通りに私たちは目を閉じ、それぞれ思い浮かべる。

「火よ、風よ、水よ、時よ。苦しみから解き放ち、導け。彼の者に安らかな眠りを与えんことを」

駿風の足元が光りはじめた。仄かな、淡い光だ。

「この封印も二度目だな」

「あの時はきちんと説明しなかった私も悪かったのかもね」

「いや、天津姫にも感謝している」

「そう言われるとこちらとしても心が楽になるわ。気持ちの整理がついたら、昔のように人々の暮らしを助けてあげて」

「ああ」

こうして話している間にも駿嵐は光に包まれていく。その姿は薄れ、そして…………消えていった。

「封印されたのかしら？」

「そうだよ。心の整理をつけたら、今度は人を助けるために戻ってくるってさ」

「なら、私の王朝で農業管理をさせるわ。力は犯罪防止に役立つし、税収も上がるし良いことづくめね」

相変わらず我欲に忠実な娘だ。

「その前に国の立て直しをしな、つつ！」

体内に急激な負荷がかかった。急速に蝕まれて行くのを感じる。神氣を使い切ったため、自己治癒も出来ない。

「どうしたの？」

「いや、何でもない」

口ではそう言ったものの、何でもないわけがなかった。フィードバックが一気に来たのだ。激痛に思わず吐きそうになるが、何とか堪える。

「……………瑠璃？」

蘭紗が裾をつかんで見上げてくる。私はそれに笑い返した。それ

は端から見れば、ぎこちないものだったろう。

「大丈夫だよ」

「天狐」

私は天津姫に向き直った。本当にわずかだが、片眉が上がっている。私が『花』のフィードバックを受けたことに気がついたようだ。

「ちよつと天狐を借りるわ」

天津姫はそう言って、華蓮と蘭紗をその場に残して私を木陰へと連れて行った。

「天狐。何でフィードバックを我慢しているの？　どれだけ危険なのかは、わかってるでしょう？」

「せっかく全部が終わったのに私が倒れたら台なしになるじゃないですか。数分なら持ちこたえられますよ」

天津姫は私の言葉に眉をひそめる。

「もう、本当に馬鹿。早く治療しないと」

「わかってます。お別れを言ったら元の世界に戻りましょう」

私と天津姫は二人の元に戻った。

「とまあ、そういうわけで私たちは故郷に戻らないといけなくなつたから」

適当に嘘をでっちあげて華蓮に説明する。しばらく華蓮は「瑠璃は私の下僕でしょ！」とか「主の命令には従いなさいよ！」とか駄々をこねていたが、最終的には渋々とだが承諾してくれた。華音が私の指をしきりになめてくる。名残惜しく思ってくれているのだろうか。

「忘れないでよ。瑠璃は私の下僕なんだからね！」

「わかつたつて。機会があれば、またここに来るからさ。その時には、この国がすっかりと立て直された姿を見せてよ」

「駿郁を下僕に引き入れて罪滅ぼしに奴隷のように働かせるから平気よ。それに蘭紗、美羽、劉仙、鷺羽もいるし」

華蓮の言葉に私は苦笑いした。「ほどほどにね」と一応言っておく。華蓮の人使いの荒さは私自身が身をもって体験している。蘭紗はさつきから私の袖を握りながらうつむいていた。私は転ばないように気をつけながらしゃがんで蘭紗の視線に合わせた。

「華蓮に言つた通り、また来るからさ。その時にはまた美味しいものを食べよう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・〔コク〕」

いつもより長い沈黙だったが、うなずいてくれた。私は左手でその頭を撫でようとした。しかし、それは出来なかった。左腕が動かせなくなっていたのだ。代わりに右手で撫でて立ち上がる。もう少し話をしたかったが限界だ。フィードバックの蝕みが想像以上に早い。気を抜けば倒れてしまいそうだ。

「それじゃあ、また」

天津姫が指をパチンと鳴らす。この世界に来た時と同じ術だ。私たちの身体が淡い光に包まれた。

第四十一話『再封印』（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

そろそろ終盤ですが、いかがでしたでしょうか？

今回は駿嵐の封印、そして元の世界への帰還です。

四方の陣の詳細も明らかとなりました。

感想、批評、アドバイス、誤字脱字報告、その他何か気が付いたことがありましたら気軽に感想欄へお願いします。

それではまた次話で。

エピソード

目を開けると懐かしい場所に私はいた。

「ここは・・・・・・・・私の神社か」

天津姫の厄払いで崩された神社は無事に修復されていた。鳥居も鮮やかな紅色に塗り直され、石畳も綺麗に敷き直されている。

「天狐が最も力を発揮できる神域。私も天狐も神気がほとんど尽きている今となつては、ここに頼るしかないわ」

天津姫が私を支えながら言った。

「私も神気が戻つたらすぐに治療に回るから、それまで絶対に安静にしてなさい。今、薬を作つて来るわ」

天津姫は私を入口まで連れていくと、神社の奥にある森へと走つていった。薬草を取りにいったのだろう。その表情は厳しかった。私は這う様にして神社の中に入り、畳の上で身体を横たえた。息をするだけでもかなり辛い。

「修業不足なのかな・・・・・・・・」

動くはずの身体は戦いから長い間離れていたせいか、思った以上に錆び付いていた。最盛期の頃ならもう少しマシだったかもしれないと、そう思った。

「治つたらもう一度修業を・・・・・・・・ゴホッ」

咳とともに口の端から血が流れ落ちる。せつかく新品の綺麗な畳に血が染み込んでしまった。右腕で擦り取ろうとするが、わずかに弱々しく動いただけに終わる。

「あ、れ？」

身体がうごかなくなってきただけではなく、眠気まで襲ってきた。まぶたが重い。思考もまとまらない。

「何か………すごく、眠い」

外から足音が聞こえてきた。参拝者だろうか？ それなら、起きて願い事を聞き届けられないといけないなと頭の片隅で思った。

「天狐！？」

私を呼ぶ声を聞いた気がした。しかし、私はそれに返事が出来ない。目の前が暗くなっていく。何もかもが黒く塗り潰されて、そして。

私の意識はそれきり閉ざされた。

ここからは私、ひかりえのあまつひめ光江之天津姫が代筆する。

何故、天狐がロンデステルテンに行くことになったのかというところから書こうと思う。ロンデステルテンで華王朝が発足したのもずいぶんと昔のことだ。私は修業と称して様々な世界を渡り歩いていた。ロンデステルテンに行ったのもその一環に過ぎない。しばらくモンスターを相手に技を研いでいたときだ。

駿嵐がその当時の王朝に、あの悲しい出来事の復讐のために反乱を起こした。事情も知らず、一方的な正義感から私はその鎮圧に乗り出した。恐らく力試しがしたただけなのだと思う。蘭紗と華森に会ったのもその時だ。対話もなく、力押しで駿嵐を倒した私は魔石で封印をした。国の命運をかけた戦いがあったためか印象深く度々訪れる世界の一つになった。

数百年が経ったある日、反乱が再び起きた。根回しなどは完璧だったようで、対策を立てる前に華王朝は崩壊する。反乱の首謀者は駿郁。調べたところ駿嵐の息子ということがわかった。私自身で救済に行きたかったが、大切な厄払いの最中でしばらく動くことができない。そこで天狐に行ってもらうことにした。厄払いで神社を壊したのは口実作りということもあったのである。

天狐は想像以上に動いてくれた。そう……フィードバックが治癒不可能なところまで来るほどに。一度、強制的に全快させたため潜在していた神気も尽きていた。どんな重傷を負っても、普段は使われることのない潜在している神気で治癒出来るようになってる。身体の仕組みからしてそうなっているのだ。それがない場合に重傷を負うとどうなるか。答えは簡単。自分以外から神気をもたらって治癒しない限り死ぬ。

私が天狐に飲ませた青色の丸薬は私の神気を固形化させたものだ。

自分以外がそれを飲むと、強制的に体内の神気を全て使って治癒をするようになる。要するにリミッターを解除するのだ。そうでもない限り助かりようのない毒だった。

神気が使える者ならば、修業次第で身につけられる技だ。天狐が固形化させたなら赤色の丸薬が出来る。蘭紗なら緑色の丸薬だ。それぞれ力とスピードが上がるようになっていく。

話が逸れたので戻そう。とにかく、その丸薬を飲ませたため、天狐は治癒が出来なくなってしまうていた。もちろん私も固形化して飲ませたため、神気は尽きている。だから、私は天狐を神社に連れしてきたのだ。

しかし、フィードバックの蝕みはひどかった。すでに体中を蝕み、天狐の体内はズタズタになっていた。細胞が自壊を起こし、血管は至るところが切れていたのだ。天狐が死に向かっていくのを、ただ見ているしかできなかった自分を不甲斐なく思う。今から思い返しても悔やまれることが多い。

以上が事の顛末である。私はこの日記に贖罪の思いも込めて全てを書いた。願うは天狐の安らかな眠りである。

後書き

最後までお読み下さりありがとうございました。

この作品は久遠の初完結作品です。

執筆を始めて半年と少し。

様々な良作に刺激を受け、素晴らしいユーザーの皆様からアドバイスや激励を頂きここまで続けることが出来ました。

心からの感謝をこの場を借りて申し上げたいと思います。

書きはじめたきっかけは友人がなろうで作品を投稿していると聞いたことでした。

もともと適当に書いて自己満足に浸っていた久遠にとって、誰かに読んでもらうという考えは持ち合わせていませんでした。

しかし、なろうではお互いの交流が活発。

しかも読者の方が大勢いらっしやるので幾人かが感想をくださる。

それを元に改善点を見出させる。

自分の小説の力を伸ばすには持つてこいの場所でした。

さて、拙作の『お稲荷様日記』のテーマですが以前に書いた通り『絆』です。

一番伝えたかった事は瑠璃に言わせてますが、見抜くことは出来ませんでしたでしょうか？

他に伝えたかったことも、所々で言わせてたりしています。

これからも執筆活動は続けていきますが、「そういえば久遠なんてやつが作品書いてたけど今何やってるんだろ？」程度でも気にかけてくださると嬉しいです。

もちろん、「久遠の作品って結構好きだからガシガシ読むぜ」と言

つていただけたらさらに嬉しいです。

2011年 7月22日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6381p/>

お稲荷様日記

2011年11月15日01時39分発行